福岡市博多区

下月隈天神森遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第76集

1981

福岡市教育委員会

福岡市博多区

下月隈天神森遺跡

序　　文

福岡平野の席田丘陵から月隈丘陵にかけての一帯は，席田遺跡群，持田ヶ浦古墳群を始めとして，非常に多くの古墳が群集している丘陵地帯として著名な地域であります。

今回，発掘調査の対象となった下月隈天神森遺跡は福岡市が市道下月隈藤田正手線を新設するにあたり，その路線内に存在するため，調査が必要となったもので，教育委員会が調査主体となり，昨年の２月から３月にかけて発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果は，報告書にみられるように，この地域の古墳の形成過程や，当時の墓制の型式等を知る上で，貴重な成果を得ることができました。

本書が古代史研究の手掛りとなり，郷土の文化財の保存のために役立つならば，誠に幸いと存じます。

調査にあたりよせられた多くの方々のご理解とご協力に，心から感謝を申し上げます。

昭和56年３月

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

凡　例

- 本書は，市道下月隈藤田正手線の新設に先立ち，1980年２月12日から３月31日にかけて福岡市教育委員会が実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 遺跡が福岡市博多区大字下月隈字天神森に位置するため，遺跡名を『下月隈天神森遺跡』とする。
- 遺跡の発掘調査には，福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄，力武卓治，岡島洋一（事務担当）が当り，本書の執筆・編集は飛高憲雄，力武卓治が行なった。
- 本書の作成には，次の方々のご協力を得ました。ここに氏名を記して感謝の意を表します。（敬称略）

荒津孝治　　安東　昇　　岩永貞弓
江越初代　　河野徹也　　関加代子
関　直樹　　関　政子　　武本延子
藤たかえ　　中村満代　　花畑照子
広田清美　　藤田　太　　溝口博子
実渕栄治　　安武裕子　　山内タツ子

福岡市博多区　下月隈天神森遺跡

目　　次

序　文

凡　例

Ⅰ　はじめに……（7）

Ⅱ　発掘調査の概要……（11）

Ⅲ　遺構・遺物……（13）

1．土壙墓……（13）

2．竪穴……（30）

3．下月隈天神森１号墳……（31）

4．下月隈天神森２号墳……（40）

5．ピット群……（45）

6．掘立柱建物跡……（46）

Ⅳ　おわりに……（47）

挿 図 目 次

1 下月隈天神森遺跡と周辺の遺跡（縮尺1/25,000）……（9）
2 下月隈天神森遺跡周辺のようす（縮尺1/5,000）……（10）
3 下月隈天神森遺跡遠景（西から）……（11）
4 下月隈天神森遺跡遠景（東方の月隈丘陵上から）……（11）
5 下月隈天神森遺跡地形測量図（縮尺1/1,000）……（12）
6 下月隈天神森遺跡遺構配置図（縮尺1/100）……折り込み
7 土壙墓群全景（南から）……（13）
8 1・2・10・17号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（15）
9 10号土壙墓……（16）
10 17号土壙墓……（16）
11 1号土壙墓……（16）
12 2号土壙墓……（16）
13 18号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（17）
14 6・7・11号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（18）
15 7号土壙墓……（19）
16 6号土壙墓……（19）
17 6号土壙墓出土石鏃実測図（縮尺3/5）……（19）
18 6号土壙墓出土石鏃……（19）
19 3号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（20）
20 4号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（20）
21 3号土壙墓……（21）
22 4号土壙墓……（21）
23 12号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（22）
24 12号土壙墓……（22）
25 19号土壙墓……（23）
26 19号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（23）
27 5・13・14号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（24）
28 13号土壙墓……（25）
29 5号土壙墓……（25）

30 14号土壙墓……（25）
31 16号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（26）
32 16号土壙墓……（26）
33 15号土壙墓……（27）
34 15号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（27）
35 8号土壙墓……（28）
36 8号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（28）
37 9号土壙墓出土石鏃実測図（縮尺3/5）……（29）
38 9号土壙墓……（29）
39 9号土壙墓実測図（縮尺1/30）……（29）
40 竪穴……（30）
41 竪穴実測図（縮尺1/40）……（30）
42 下月隈大神森1号墳の発掘前のようす……（31）
43 下月隈天神森1号墳墳丘測量図（縮尺1/100）……（31）
44 下月隈天神森1号墳封土除去後のようす（南西から）……（32）
45 下月隈天神森1号墳封土除去後測量図（縮尺1/100）……（32）
46 下月隈人神森1・2号墳全景……（33）
47 下月隈天神森1号墳と土壙墓……（33）
48 下月隈天神森1号墳石室実測図（縮尺1/50）……（34）
49 下月隈天神森1号墳石室全景①（石室入口がわから）……（35）
50 下月隈人神森1号墳石室全景②（石室奥壁がわから）……（35）
51 下月隈天神森1号墳右側壁……（35）
52 下月隈天神森1号墳左側壁……（35）
53 下月隈天神森1号墳石室内副葬品出土位置図（縮尺1/40）……（36）
54 耳飾りの出土状況……（36）
55 鉄鏃の出土状況……（36）
56 下月隈天神森1号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……（37）
57 下月隈天神森1号墳出土遺物……（37）
58 下月隈天神森1号墳石室内出土遺物実測図（縮尺1/2・3/5）……（38）
59 下月隈天神森1号墳石室内出土遺物……（39）
60 下月隈天神森2号墳現況測量図（縮尺1/100）……（40）
61 下月隈天神森2号墳全景……（40）

62 下月隈天神森２号墳測量図（縮尺1/100）…… (41)
63 下月隈天神森２号墳全景（覆土除去後のようす）…… (41)
64 下月隈天神森２号墳石室実測図（縮尺1/50）…… (42)
65 壁石裏がわに見える線刻…… (42)
66 直刀・鎌の出土状況…… (42)
67 下月隈天神森２号墳石室内出土鉄器実測図（縮尺1/2・1/4）…… (43)
68 下月隈天神森２号墳石室内出土鉄器…… (44)
69 ピット群全景（南西から）…… (45)
70 ピット群出土青磁実測図（縮尺1/3）…… (45)
71 ピット群実測図（縮尺1/100）…… (45)
72 掘立柱建物跡（北東から）…… (46)
73 掘立柱建物跡実測図（縮尺1/100）…… (46)
74 下月隈遺跡群遠景…… (48)

I はじめに

福岡市における朝夕の通勤時の交通混雑は，他都市に勝るとも劣らないものである。これを解消するためには，車両を既設道路に見合った数におさえることであろうが，今日の車優先社会においては，急増する車に対応するために道路の新設や拡張を余儀なくされ，そのためにおびただしい埋蔵文化財と自然が破壊されている。

今回発掘調査が行なわれた下月隈天神森遺跡の場合も，市道月隈線の建設予定地に当る。当地は，1971年発行の「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表—総集編—」にみえる周知の遺跡（天神森古墳群）であったが，それ以外に甕棺墓や遺物包含層の埋蔵が予想されたため，数か所の地点を選んで遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を，1978年10月4日から7日にかけて実施した。その結果，丘陵上の西側先端部のトレンチおよびその拡張区において，柱穴と溝状遺構が検出された。特に溝状遺構の中からは，細片ではあったが弥生土器の出土をみた。

このような経過から，福岡市文化課では，下月隈天神森遺跡には，古墳2基と溝状遺構および建物跡が埋蔵されていることを，最終的に確認した。

下月隈天神森遺跡が周知の遺跡ではあったが，道路の設計変更等が不可能ということで，われわれは，1980年2月12日から年度内の終了をめざして発掘調査に着手した。

下月隈天神森遺跡の発掘調査については，地元の人々をはじめ関係各位の絶大なる協力があったことを明記しなければならない。発掘調査には福岡市文化課の関係各位の外に次の方々のご協力を得ました。（敬称略）

荒津孝治　岩永真弓　江越初代　河野徹也　小島由美子　関加代子　関政子　鶴田サヨ子　藤たかえ　花畑照子　藤田太　溝口博子　実渕栄治　安武裕子　山内タツ子

また，発掘調査事務所の設置には，月江英海氏，光安禎太郎氏および各ご家族の方々の絶大なるご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

下月隈天神森遺跡は，福岡市博多区大字下月隈字天神森にある。

福岡平野の東を限る三郡山地より派生した大城山（標高410m）の山麓に，南東から北西に延びる標高100m～150mの月隈丘陵がある。下月隈天神森遺跡は，この月隈丘陵の西側に独立した東西約130m，南北約50m，高さ約20mの小丘陵上に位置し，福岡空港滑走路東南角より約300m東に当る。

月隈丘陵には西へ延びる支丘が幾つもあり，支丘と支丘の間の谷には，出口に堤防を築いた

用水池がみられる。下月隈天神森遺跡の位置する丘陵が，かつては一支丘の先端部の高まりをなした部分であったかもしれないが，現在では，一独立丘の観を呈している。

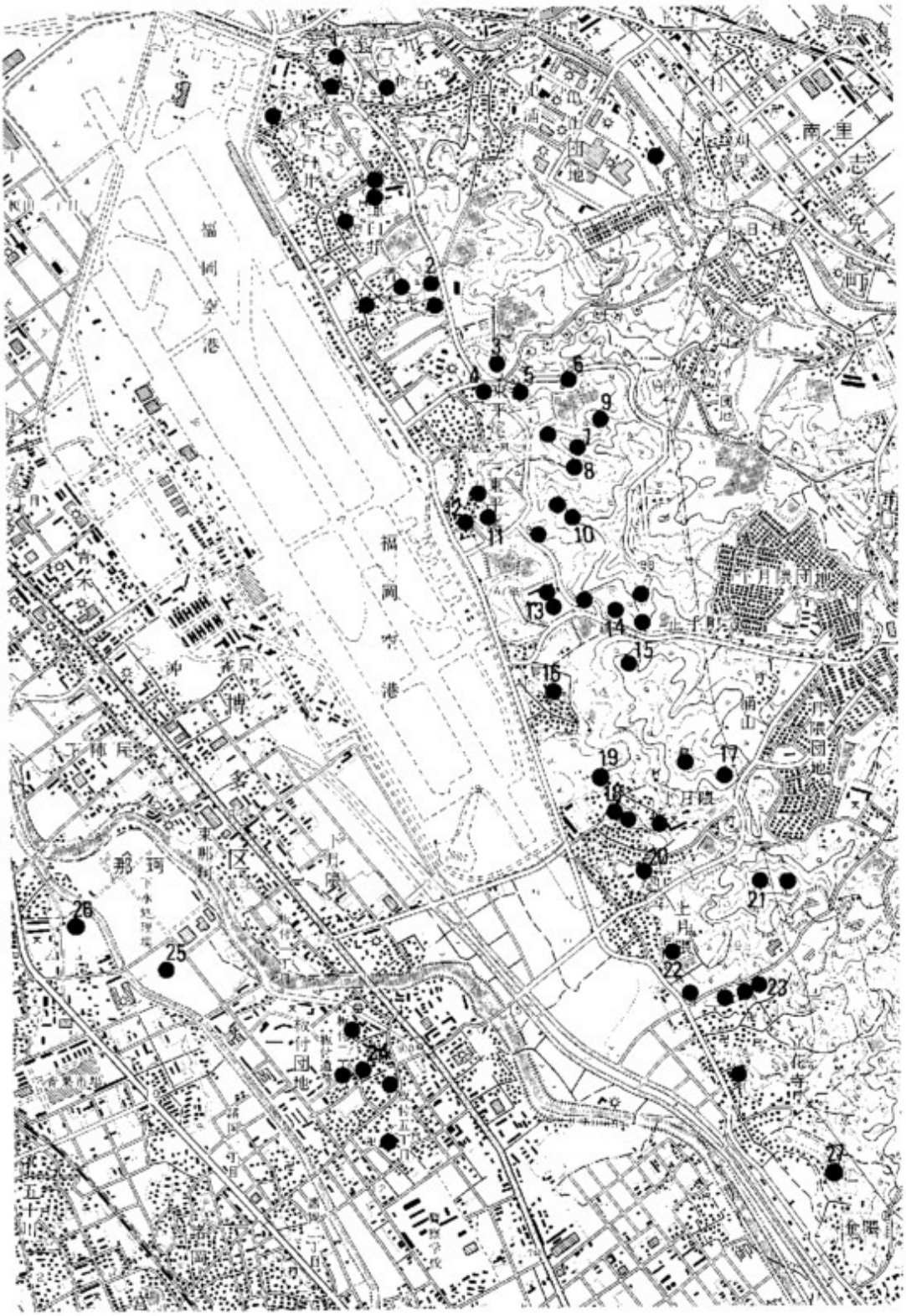
下月隈天神森遺跡の立地する丘陵の北側は，戦後の一時期，米軍板付基地付属の射撃場になっていたため地形に変貌をきたしているが，地元の人々の話によれば，米軍に接収されるまでは，数基の古墳が保存されていたとのことである。また地元で博打穴と呼んでいた横穴式石室をもった古墳もこの中に含まれていたと聞く。一方，東側の月隈丘陵には，福岡城築城の際の黒田藩の石切り場があったといわれ，現在でも崖面には石を切り出した痕跡が残されている。

月隈丘陵では，弥生時代に至るまでのようすは目下のところ不明であるが，弥生時代中期以降になると人々の活発な動きがあったようで，数次におよぶ席田遺跡群の発掘調査によって生活跡や墓地のようすが明らかになりつつある。

弥生時代の甕棺墓遺跡としては，月隈丘陵最北端に位置する下臼井遺跡をはじめ，青木，北ノ浦，席田林崎，宝満尾等々の遺跡をあげることができる。しかしながら過半のものは，未調査のまま土取り，地下げ等によって消滅してしまった。古墳の場合も近世以降の盗掘あるいは抜石によって当初の面影をとどめるものは１基としてないようで，下月隈天神森遺跡の２基の古墳もすでに大井石，壁石の大半は失われていた。下月隈天神森遺跡の南東約200ｍのところには，弥生時代中期の下月隈宮ノ後遺跡が，さらに南へ上月隈，金隈等の甕棺墓遺跡へと連なり，また目を南西に転じれば，初期農耕集落遺跡として著名な板付遺跡が，さらに奥には奴国王の墓所といわれる須玖遺跡等が望まれる。

下月隈天神森遺跡と周辺の遺跡

1．下臼井甕棺墓遺跡	2．青木甕棺墓遺跡	3．北ノ浦古墳（東平尾古墳）
4．北ノ浦甕棺墓遺跡	5．席田中尾遺跡	6．席田堤ノ上遺跡
7．席田貝花尾１号墳	8．席田貝花尾２号墳	9．席田新立表古墳
10．席田大谷遺跡（上ノ浦池遺跡）	11．席田久保園遺跡	12．席田林崎遺跡
13．宝満尾遺跡	14．宝満尾東遺跡	15．上ノ池古墳群
16．雀居古墳	17．下月隈古墳群	18．下月隈宮ノ後遺跡（下月隈遺跡）
19．下月隈天神森遺跡（天神森古墳群）	20．上月隈甕棺墓遺跡	21．上月隈古墳群
22．文殊谷古墳群	23．谷頭古墳群	24．板付遺跡
25．那珂君休遺跡	26．那珂深ヲサ遺跡	27．金隈遺跡



1　下月隈天神森遺跡と周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

2　下月隈天神森遺跡周辺のようす（縮尺1/5,000）（上）今から約40年前（下）現在

II 発掘調査の概要

下月隈天神森遺跡では，試掘調査の結果から，２基の古墳と柱穴および溝状遺構の確認された地点を中心に，下草を刈り，写真撮影と地形測量を実施し，発掘調査を開始した。丘陵東部の標高約20ｍの最高所に約10ｍの間隔で，ほぼ南北に並ぶ古墳は，北側のを下月隈天神森１号墳，南側のを下月隈天神森２号墳とした。この２基の古墳を結ぶ線が，丘陵の稜線と一致することが地形測量図と調査後の地山の地形測量図とから判明した。１号墳は南西に開口する横穴式石室をもつ円墳である。副葬品として耳飾り，鉄鏃，鉄斧，刀子が残存し，覆土中から須恵器が出土する。２号墳は，東と西に壁石と思われる大石が残るのみだが，１号墳同様に内部構造は横穴式石室であろう。副葬品として鉄鏃，直刀，鉄鏃がある。

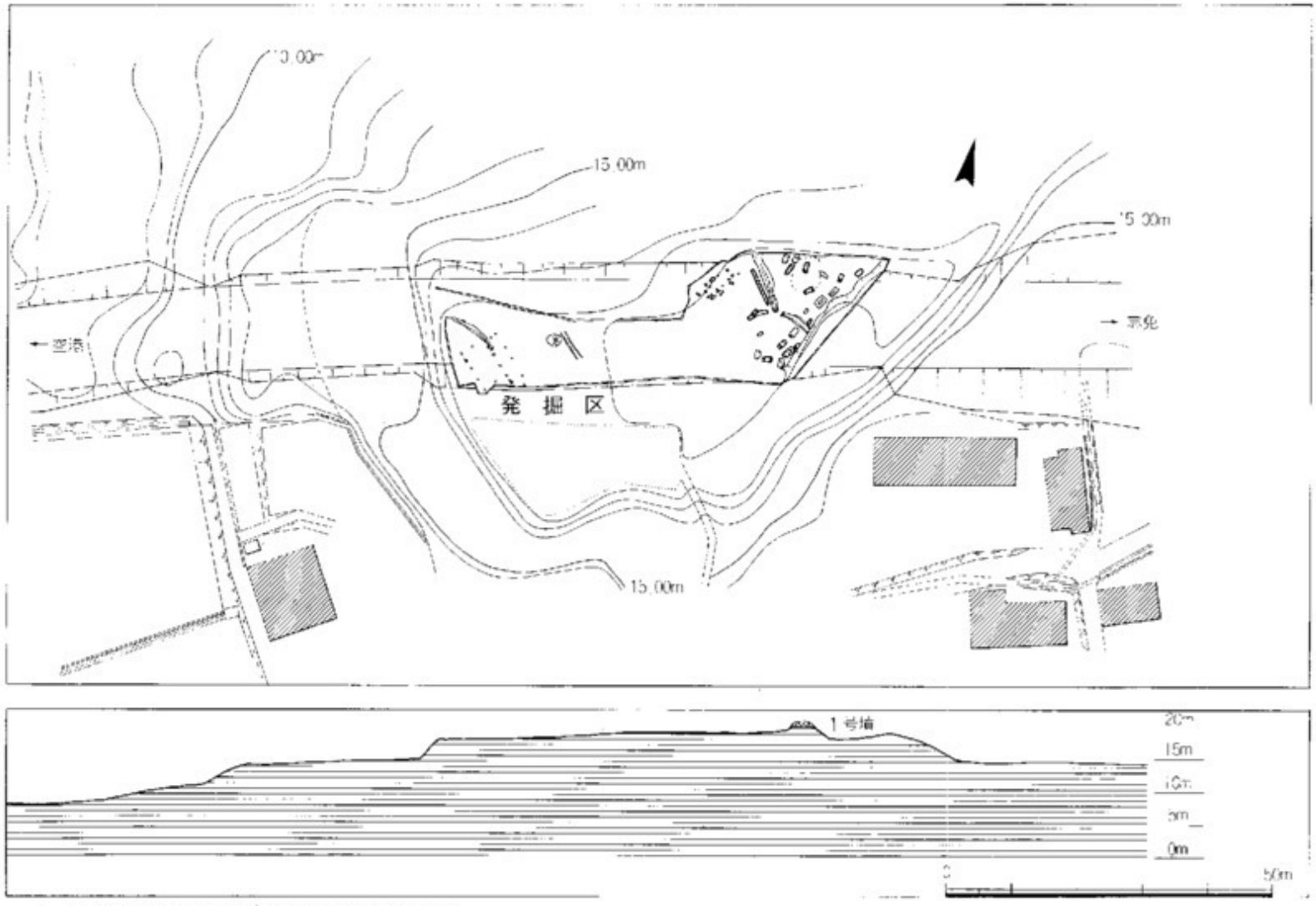
古墳の石室下を含めて合計19基の土壙墓が検出され，特に６・９号土壙墓からは，石鏃が出土する。

丘陵西側先端部に柱間４間×２間の掘立柱建物跡を検出するが，出土遺物はない。

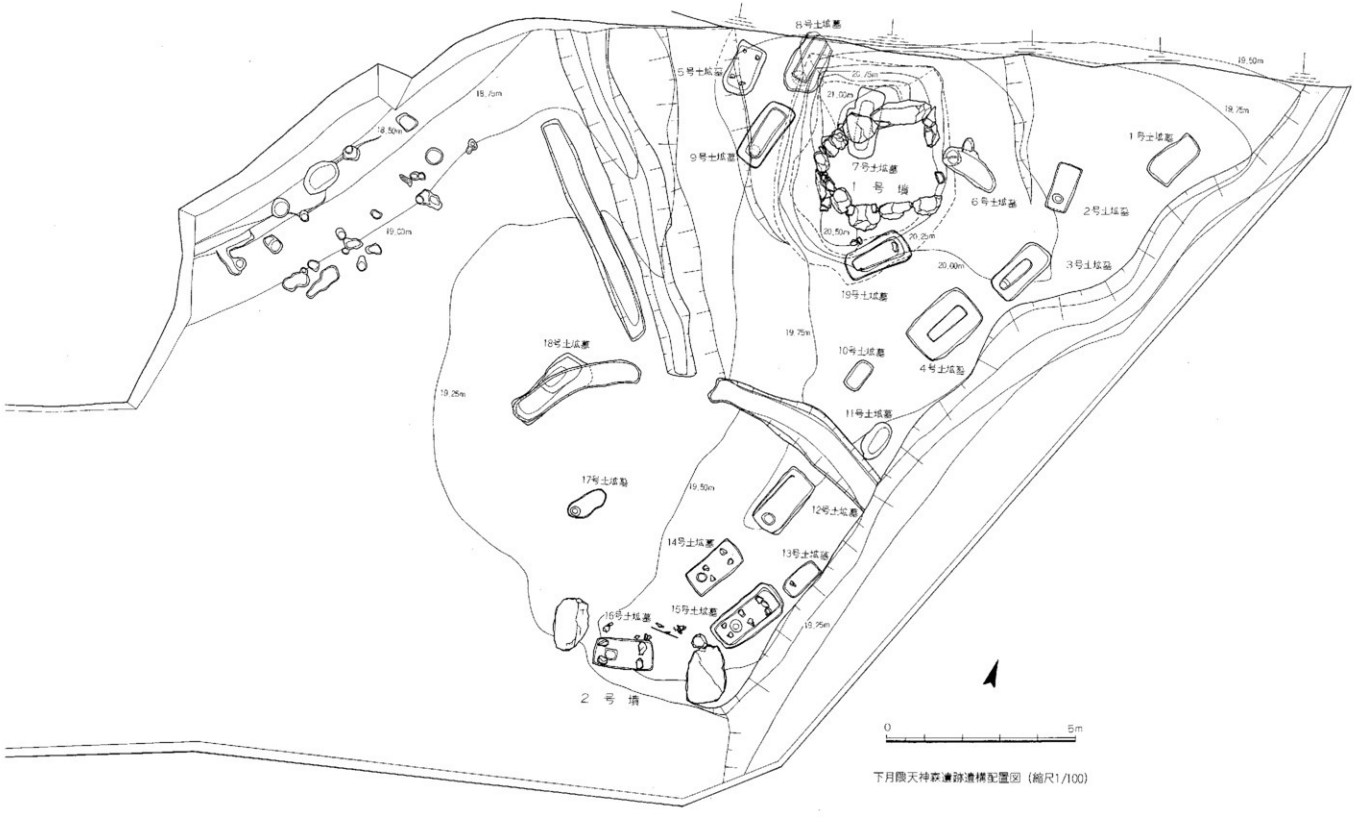
この北側から，建物に先行する溝状遺構を検出するが，出土遺物はない。この遺構は試掘時に確認され，弥生土器の細片が出土したものである。掘立柱建物跡の北東から竪穴を検出するが，出土遺物はない。１号墳の南西斜面からピット群が検出されるが性格は不明である。

3 下月隈天神森遺跡遠景（西から）

4 下月隈天神森遺跡遠景（東方の月隈丘陵上から）



5 下月隈天神森遺跡地形測量図（縮尺1/1,000）



下月隈天神森遺跡遺構配置図（縮尺1/100）

Ⅲ 遺構・遺物

1．土坑墓

下月隈天神森遺跡は，古墳２基と掘立柱建物跡等をもってそのすべてであると考えて，発掘調査を開始した。ところが，下月隈天神森１号墳の外部施設の有無を探るべく東側の表土除去を進めていたところ，長方形の浅い落ち込みを検出する。坑底をわずかに残す程度のものではあったが，これが１号土坑墓であった。当然ながら土坑墓が単独で存在するはずはないということで，さらに周辺の表土を除去し，赤褐色を呈した丘陵地山面で調査を進めたところ，土坑墓が続々と検出され，２基の古墳の周辺すなわち当丘陵の最高位に集中して営まれているということが明らかになる。このことは，また，２基の古墳の下部からも土坑墓が検出されるのではないかという予測を立てるのに充分であった。

下月隈天神森１号墳と同２号墳の調査完了後に石室床下の精査を行なう。予想どおりに土坑

7　土坑墓群全景（南から）

墓の検出をみる。最終的には，相当に破壊がひどくて不明確なものをも含めて，総数19基にのぼる。特にグループを構成することはないようであるが，主軸を南北に近い方向にとるものと，これとほぼ直角のもの，あるいは，まったく別の方向をとるものなどがある。土坑墓群が比較的狭小な範囲に19基も形成されているにもかかわらず，切り合いがまったくなく，土坑墓の中での先後関係はまったく不明であるが，短期間に営まれたものであろうということはいえる。

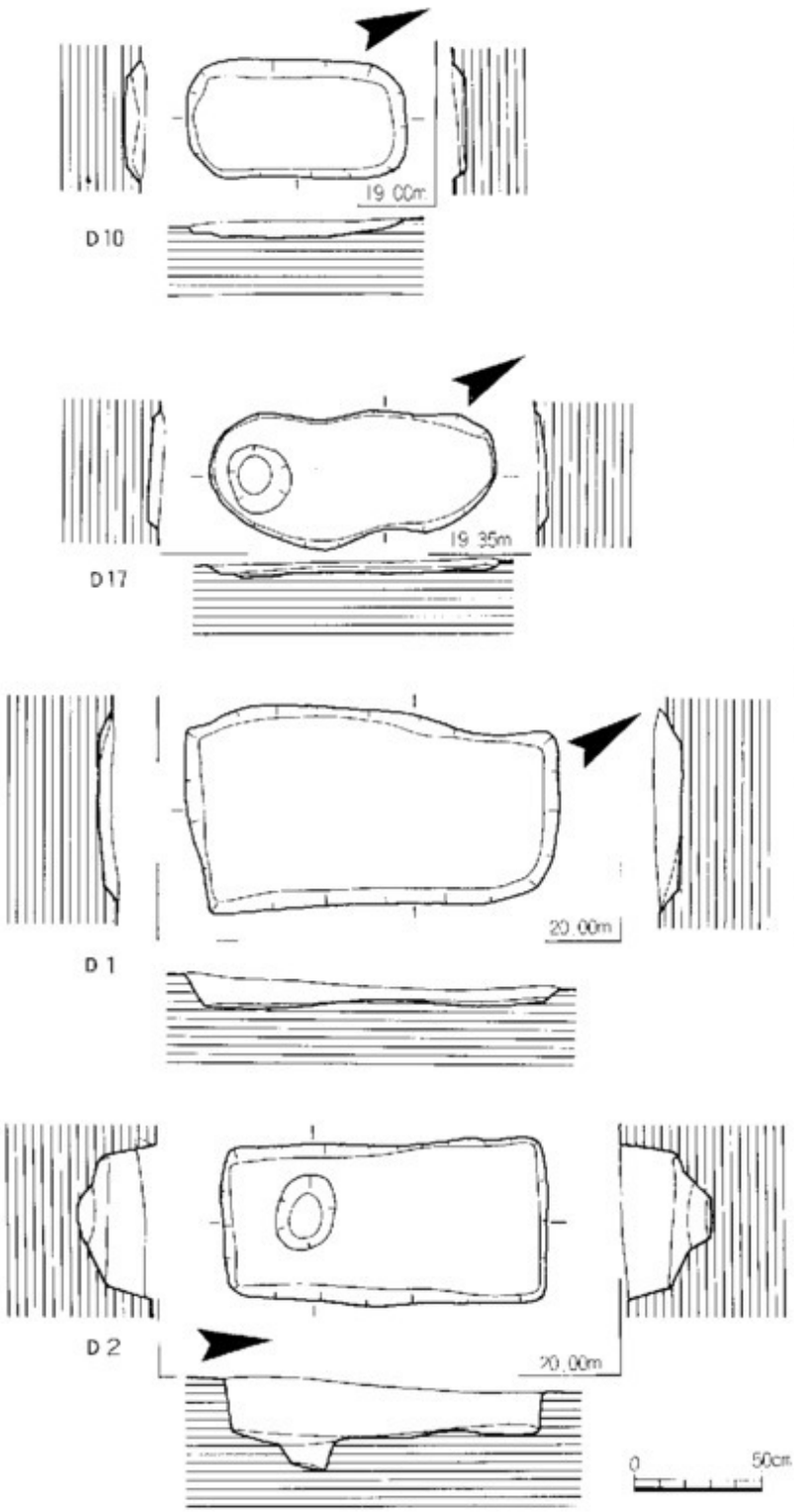
特記すべきことは，先端部あるいは基部を欠失した石鏃を出土した土坑墓があるということと，坑底に角礫を配したり，あるいは，坑底の足位と思われる個所に円形または方形のピットをもったものがあるということであろう。

土坑墓計測値一覧表

（単位　cm）

No.	方　向	平面形	一段目掘り込み 長さ×幅×深さ	二段目掘り込み 長さ×幅×深さ	備　考
1	N－31°－E	長方形		146×76×10※	
2	N－3°－E	長方形		127×63×23※	ピットあり。
3	N－28°－E	隅丸長方形	168× 80×36	108×31×9	ピットあり。
4	N－34°－E	長方形	191×127×27	126×53×46	木棺か。
5	N－2°－E	隅丸長方形		137×80×11※	木棺か。角礫4個。
6	E－19°－S	不整形 （長方形）		163×62×16※	ピットあり。石鏃3本。
7	N－14°－E	隅丸長方形		185×45×37	
8	N－14°－E	長方形		（復原） 180×95×45	ピットあり。木棺か。 粘土床（131×45×9）
9	N－18°－E	長方形		183×78×30	ピットあり。木棺か。 粘土床（146×45×10）
10	N－22°－E	隅丸長方形		85×45×6※	
11	N－18°－E	隅丸長方形		109×97×9※	
12	N－24°－E	長方形	181× 90×25	158×66×20	ピットあり。木棺か。
13	N－28°－E	長方形		108×52×13※	角礫あり。
14	N－35°－E	長方形		157×75×25	ピットあり。角礫4個。
15	N－36.5°－E	長方形	201× 95×20	181×65×30	ピットあり。角礫7個。
16	N－79°－E	長方形		160×80×38	方形ピットあり。角礫4個。
17	N－28°－E	隅丸長方形		112×50×4※	ピットあり。
18	N－30°－E	不整形 （長方形）		120×60×26※	
19	N－46°－E	隅丸長方形	178× 78×20	143×55×12	石枕様角礫あり。

※は，上面が削平され，深さが不正確と思われる。



8　1・2・10・17号土坑墓実測図（縮尺1/30）

10号土坑墓

4号土坑墓の南西1.3mのところにあって主軸をN－22°－Eにとる。素掘りの小型の土坑墓で，長さ85cm，幅45cm，深さ6cmを測る。上部を削平され，土坑底を残すのみである。

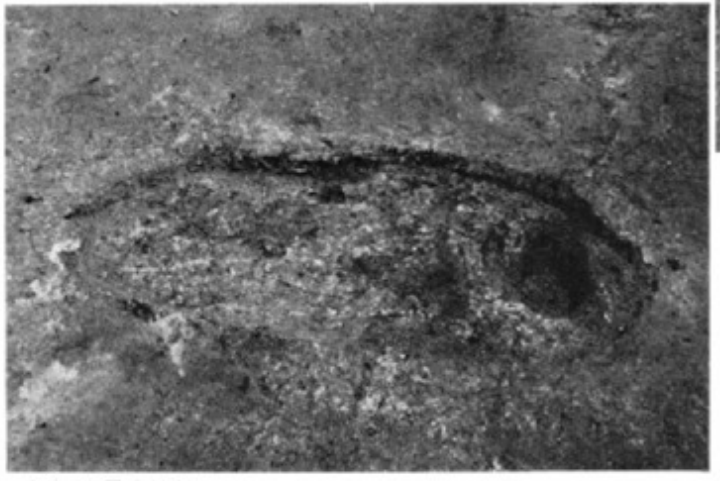
17号土坑墓

14号土坑墓の西3.5mに位置し，主軸をN－28°－Eにとる。素掘りの小型の土坑墓で，長さ112cm，幅50cm，深さ4cmを測る。足位に径24cm，深さ1cmの円形ピットがある。

1号土坑墓

土坑墓群の中で最北東に位置し，主軸をN－31°－Eにとる。上部を削平され，土坑底を残すのみであるが，長さ146cm，幅76cm，深さ10cmを測る素掘りの土坑墓である。

9 10号土壙墓



10 17号土壙墓

11 1号土壙墓

12 2号土壙墓

2号土坑墓

6号土坑墓の東1.5mにあって主軸をN−3°−Eにとる。長さ127cm，幅63cm，深さ23cmを測る。足位に径25cm，深さ11cmの円形ピットがある。素掘りの土坑墓である。

18号土坑墓

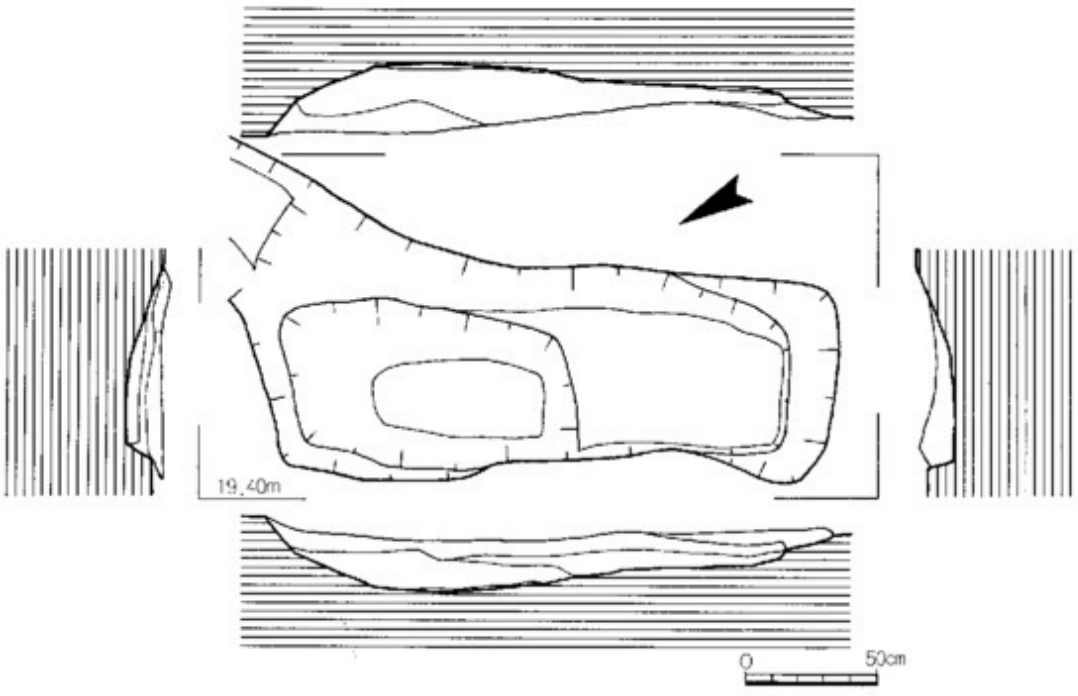
17号土坑墓の北西にあって，土坑墓群の中で最も西に位置する。下月隈天神森2号墳の溝によって破壊されているため，平面は不整形であり，かろうじて坑底が残っているだけである。主軸をN−30°−Eにとり，現状では長さ120cm，幅60cm，深さ26cmを測る。

7号土坑墓

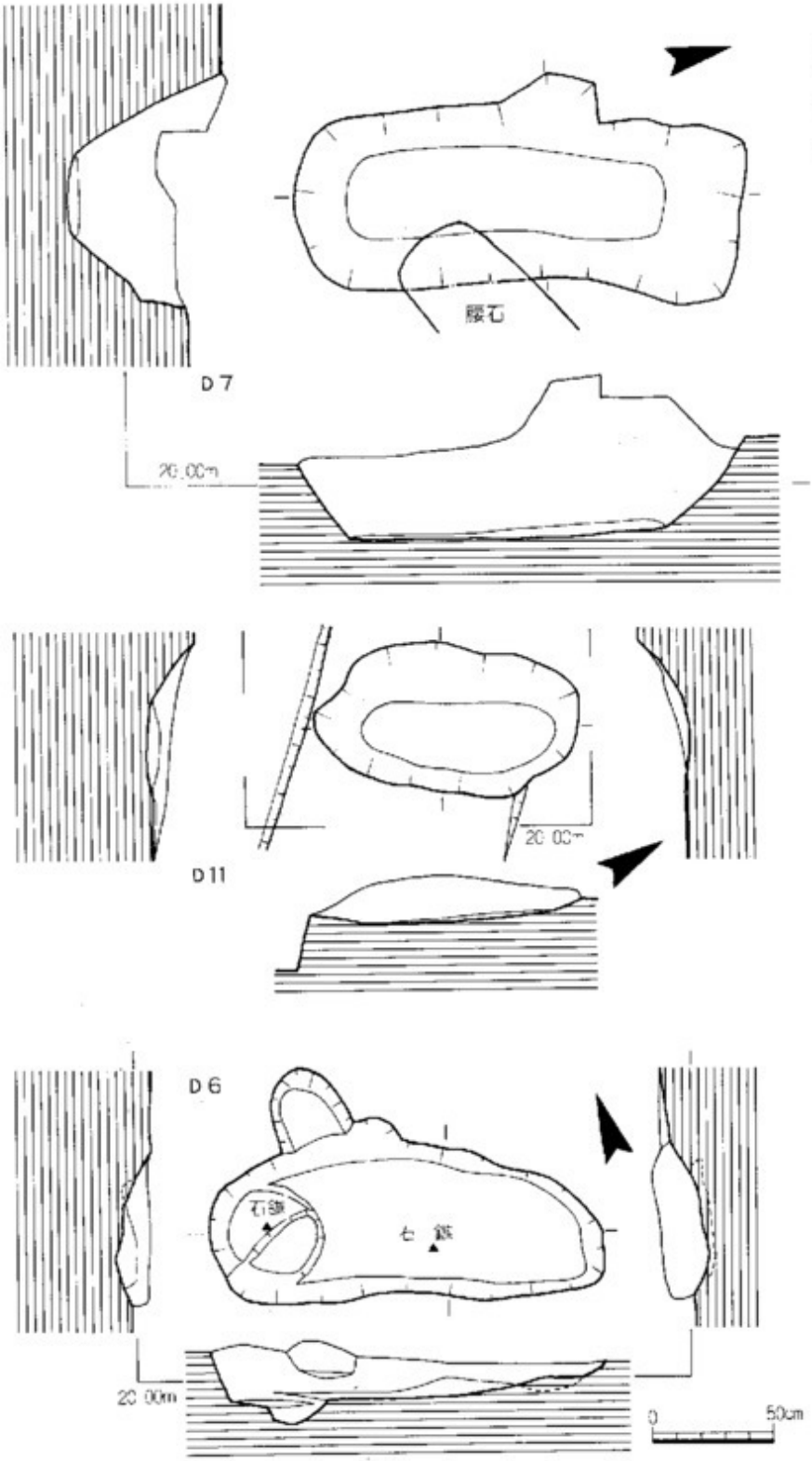
8・9号土坑墓の東1.5mに位置し，下月隈天神森1号墳の左側壁の構築に際して一部を破壊されている。腰石が土坑墓の南を斜めに横切る状態ですえつけられている。主軸をN−14°−Eにとり，平面形が隅丸長方形の土坑墓である。長さ185cm，幅45cm，深さ37cmを測る。

11号土坑墓

10号土坑墓の南東1mのところにあって，主軸をN−18°−Eにとる。上部を削平され坑底を



13　18号土坑墓実測図（縮尺1/30）



14　6・7・11号土壙墓実測図（縮尺1/30）

残すのみであるが，長さ 109cm，幅97cm，深さ９cmを測る。南がわ短側壁は，下月隈天神森２号墳の周溝によって破壊されている。

６号土壙墓

２号土壙墓の西1.5ｍの位置にあって，主軸をＥ－19°－Ｓにとる平面不整形の土壙墓である。西がわ短側壁が，下月隈天神森１号墳の奥壁のほぼ直下になる。上部は削平されているが，長さ163cm，幅62cm，深さ16cmを測る。足位には径25cm，深さ９cmの円形ピットがある。石鏃３本の出土をみる。２本は壙底のほぼ中央部から，１本は円形ピットの中から半折した状態で出土する。

▶15　7号土坑墓
下月隈天神森1号墳の左側壁の腰石が上にのる。

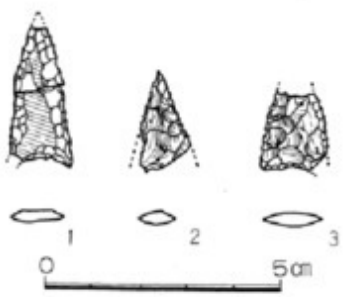
▶16　6号土坑墓
石鏃3本を出土した土坑墓。

6号土坑墓出土石鏃

1は，足位の円形ピットから出土。中央部で折れているが，現存長3㎝，最大幅1.35㎝，厚さ0.25㎝の安山岩製。抉り込みは浅く，周辺剝離は細かく整い，片面のみ中央部を磨いている。先端と基部片側は欠失している。

2は，土坑中央部から出土。基部を欠失して原寸法は不明である。灰色黒曜石製。周辺の剝離は非常に細かい鋸歯状で，先端は尖って調整されている。

3は，土坑墓中央部から出土。黒曜石製。先端と基部片がわを欠失するが，比較的幅広で，うすく剝離され，抉り込みはごく浅く，両側はやや外側にカーブして全体として丸みをもった形である。

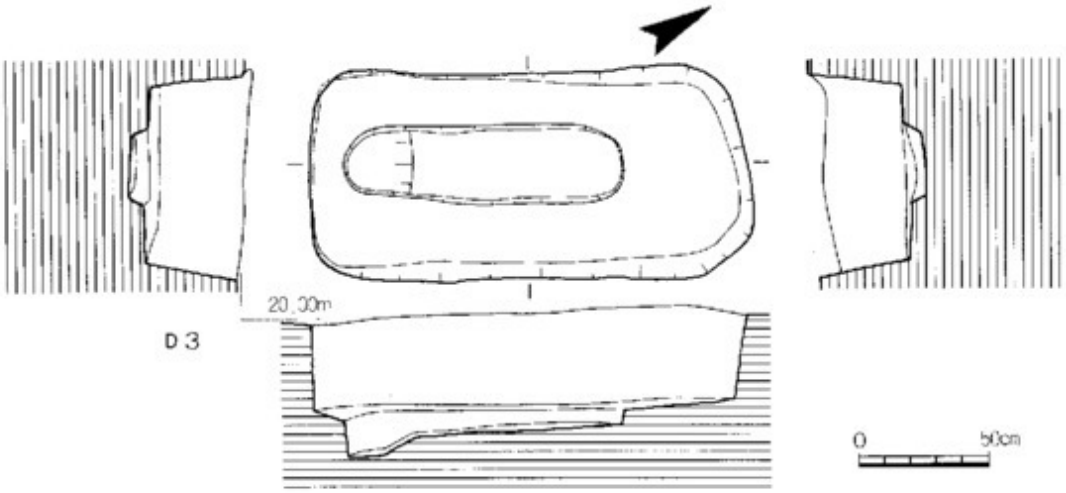


17　6号土坑墓出土石鏃実測図（縮尺3/5）

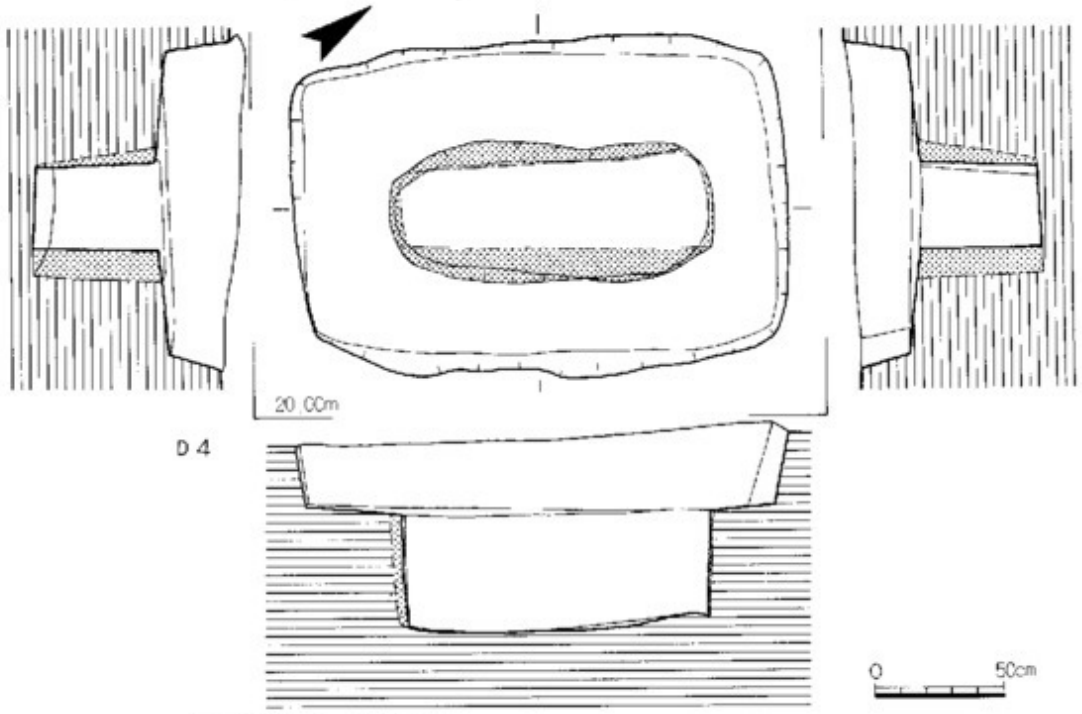
18　6号土坑墓出土石鏃

3号土壙墓

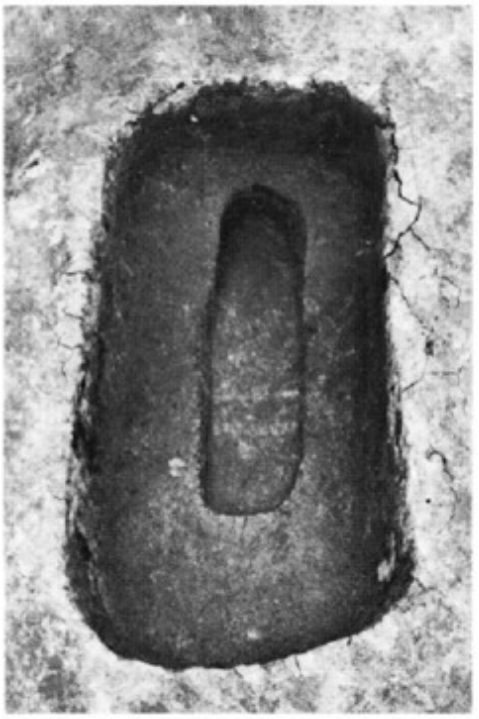
3号土壙墓は，2号土壙墓と4号土壙墓との間に位置し，主軸をN−28°−Eにとり，平面形が隅丸長方形を呈する。二段掘りで，一段目の掘り込みは，長さ 168cm，幅80cm，深さ36cmである。二段目の掘り込みは，一段目の掘り込みより相当西に片寄った位置を選んで，長さ 108cm，幅31cm，深さ9cmで形成されている。壙底は一段目の掘り込みと同様に足位の方がやや低くなっており，短側壁から25cmの範囲が，深さ8cmで掘りくぼめられている。おそらく，円形



19　3号土壙墓実測図（縮尺1/30）



20　4号土壙墓実測図（縮尺1/30）



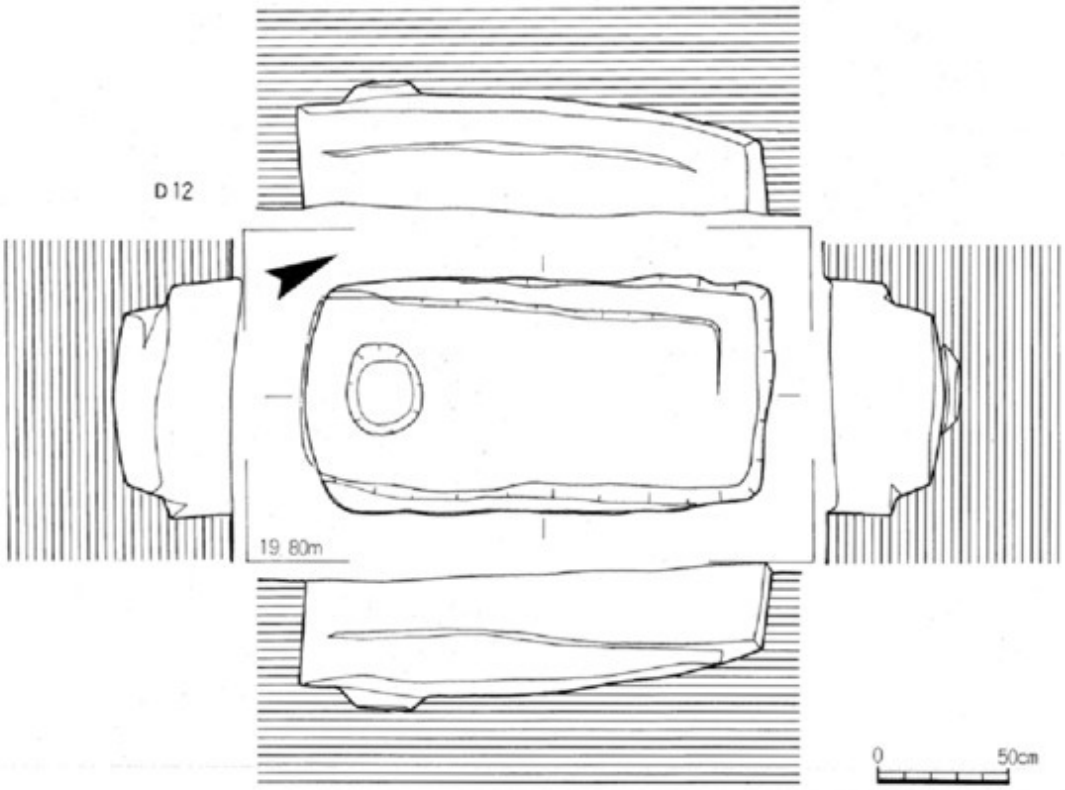
▲21 3号土坑墓

▼22 4号土坑墓

ピット状を呈していたものと思われる。13号土坑墓あるいは17号土坑墓と，まったく同一の方向をとっている。

4号土坑墓

4号土坑墓は，3号土坑墓から70cmの位置にあって，主軸をN－34°－Eにとる。見掛け上，3号土坑墓の南東がわ側壁と，この4号土坑墓の南東がわ側壁が一線に並ぶようであるから，時間的にも，あまり隔たりはないものと思われる。3号土坑墓と同様，二段掘りで形成され，一段目の掘り込みは，長さ191cm，幅127cm，深さ27cmを測る。二段目の掘り込みは，一段目の掘り込みのほぼ中央に，長さ 126cm，幅53cm，深さ46cmで形成される。二段目の掘り込みの内側に四壁が確認される。小口の突出はなかったが，木板状のものが，はめこまれていたのではなかろうか。四壁は長さ 112cm，幅は南西がわ短側壁で28cm，北東がわ短側壁で34cmを測る。北東がわ短側壁の方が幅が広いことと，坑底の北東部分がやや高くなっていることからみて，北東に頭位をとっていたものと考えられる。



▲23　12号土坑墓実測図（縮尺1/30）

▼24　12号土坑墓

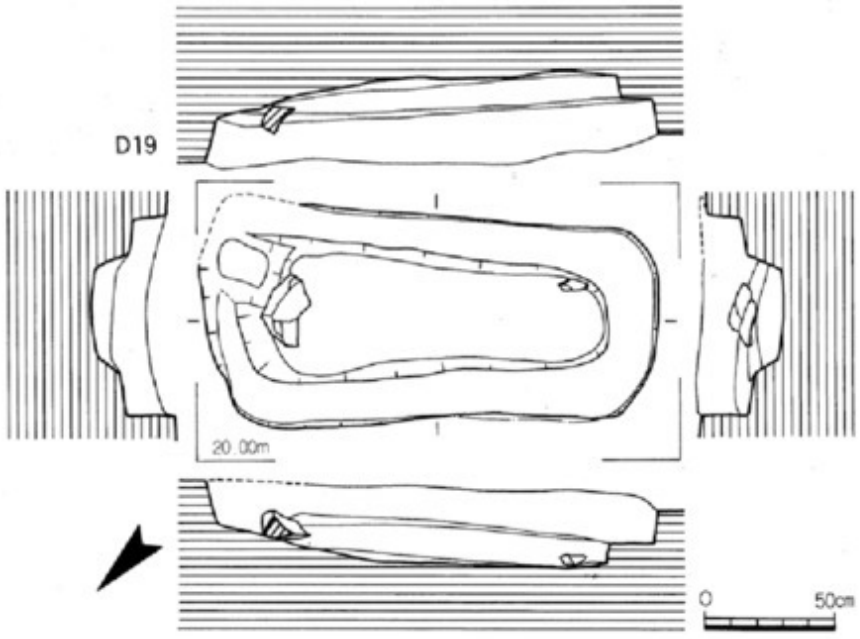
12号土坑墓

12号土坑墓は，14号土坑墓の北東90cmの位置にあって，主軸をN－24°－Eにとり，平面長方形を呈する。左右の長側壁と北東の短側壁の一部内側に，さらに二段目の掘り込みと思われるものがあるので，一応二段掘りの土坑墓と考える。一段目の掘り込みは，長さ 181cm，幅90cm，深さ25cmを測る。二段目の掘り込みは，長さ 158cm，幅66cm 深さは，北東部で9cm，中央部で20cmと南西にむかって深くなるが，足位の円形ピットを境にして，南西短側壁部で19cmと高くなる。また，横断面をみても中央部が最も深く，左右が高くなり，一見，坑底は舟底状を呈している。足位の円形ピットは，径30cm，深さ6cmを測る。

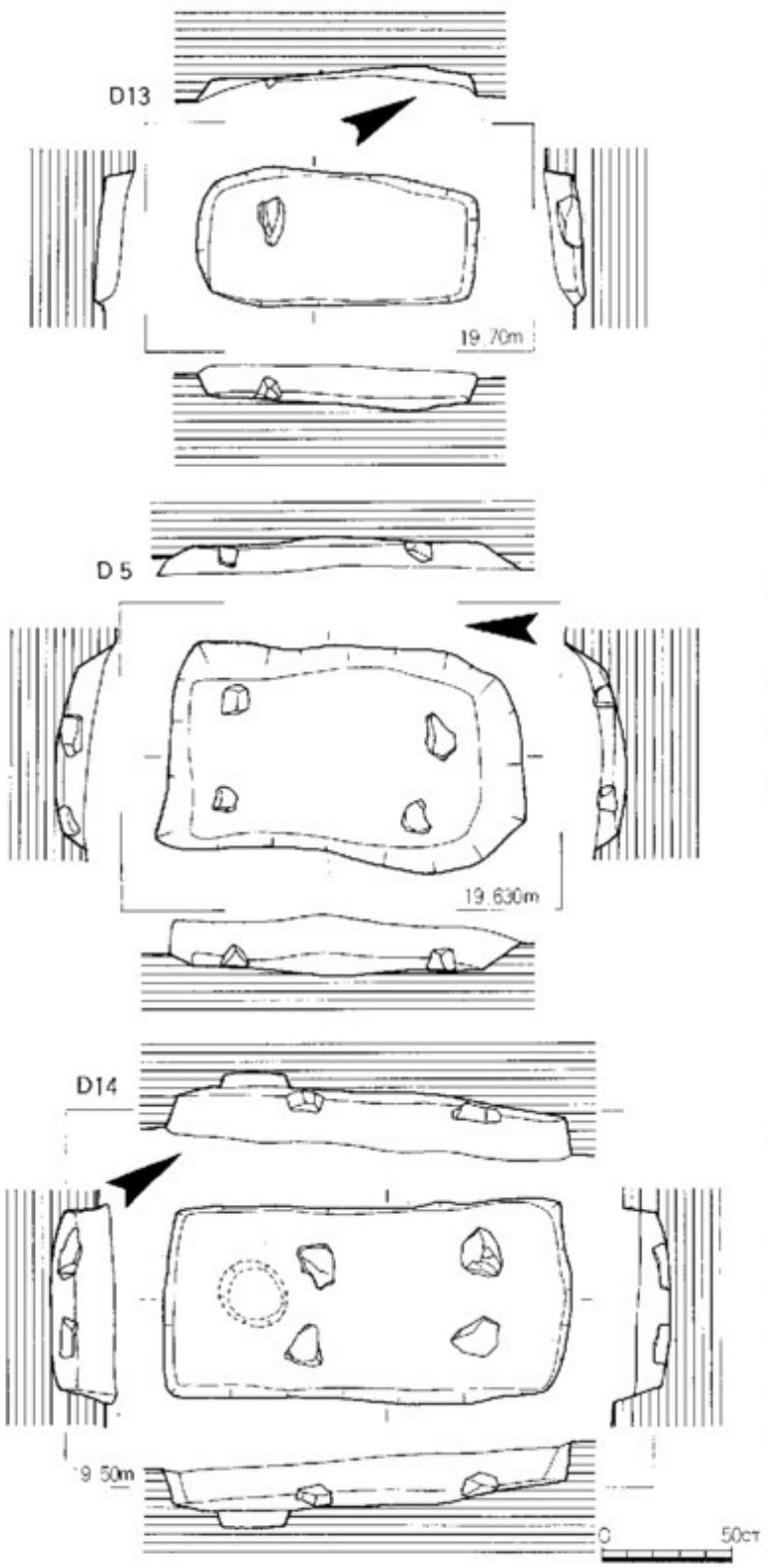
19号土坑墓

19号土坑墓は，4号土坑墓の北西1.5mに位置し，主軸をN－46°－Eにとる。平面は隅丸長方形で二段掘りで形成されている。また，下月隈天神森1号墳の横穴式石室右側壁の外側1mの位置にあるため，墳丘の下になると思われる。一段目掘り込みは，長さ178cm，幅78cm，深さ20cmを測るが，南西部は古墳構築の地山整形時に一部削平されたようである。二段目掘り込みは，長さ143cm，幅は北東で55cm，南西で35cm，深さ12cmを測る。坑底が南西にむかってゆるやかに下がっているが，この傾斜は，一段目掘り込み面も同様である。あるいは，旧地形にそったものかと思われる。頭位に28cm×15cm×10cmの石がある。石質は珪化木。足位の壁角にも10cm×4cm×3cmの角礫がある。頭位の石は，二段目の掘り込みの坑底に置かれたような出土状態を示していることから，置石の転落というよりも，一見，石枕様の観を呈する。

25　19号土坑墓



26　19号土坑墓実測図（縮尺1/30）



27　5・13・14号土坑墓実測図（縮尺1/30）

13号土坑墓

15号土坑墓と20cmの間隔で並び，北東の長側壁がほぼ一線をなす。主軸をN－28°－Eにとり，長さ108cm，幅52cm，深さ13cmを測るが，上部は削平されていて坑底のみを残す。坑底は北東部がやや下がり，南西部に18cm×10cm×8cmの角礫がある。前記した14号土坑墓の角礫と同様に，坑底にすえられているようで，置石の転落とは考えられない。土坑の幅は，南西の短側壁がわがやや広くなっている。

5号土坑墓

8・9号土坑墓の西側に位置し，主軸をN－2°－Eにとる。上部は下月隈天神森1号墳構築の際の地山整形時に削平されているが，長さ137cm，幅80cm，深さ11cmを測る。坑底北がわが最も高く，中央部はやや低く，北頭位であったと思われる。壁の四隅近くの坑底に10cm×10cm×8cmほどの

28　13号土坑墓

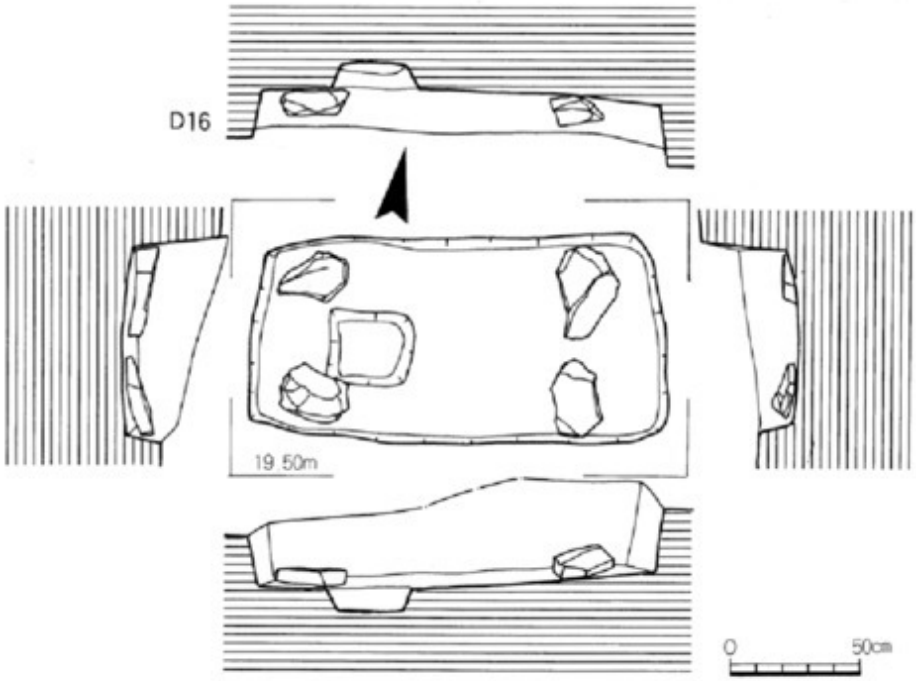
角礫が1個ずつ置かれている。北部の2個と南部の2個の石の間は70cmあり，北の2個の石の間隔は28cm，南部の2個の間隔は18cmで，南部の方が狭くなっている。

14号土坑墓

14号土坑墓は，15号土坑墓の西1mのところにあって，主軸をN－35°－Eにとる平面が長方形の土坑墓である。下月隈天神森2号墳の墳丘下になっていたと思われる。長さ157cm，幅75cm，深さ25cmを測る。坑底が南西にむかって傾斜し，短側壁から20cm前後のところに径27cm，深さ6cmの円形ピットがある。坑底の傾斜は，土坑の掘り込み面の地山の傾斜に一致する。坑底の円形ピット北東がわには，15cm×15cm×5cmほどの4個の角礫を，平坦な面を上にして，ほぼ同一レベルになるように配列している。4個の石は，土坑墓の長軸平行に50cm，短軸平行に10cmから15cmの間隔をとって置かれている。

29　15号土坑墓

30　14号土坑墓



31　16号土坑墓実測図（縮尺1/30）

16号土坑墓

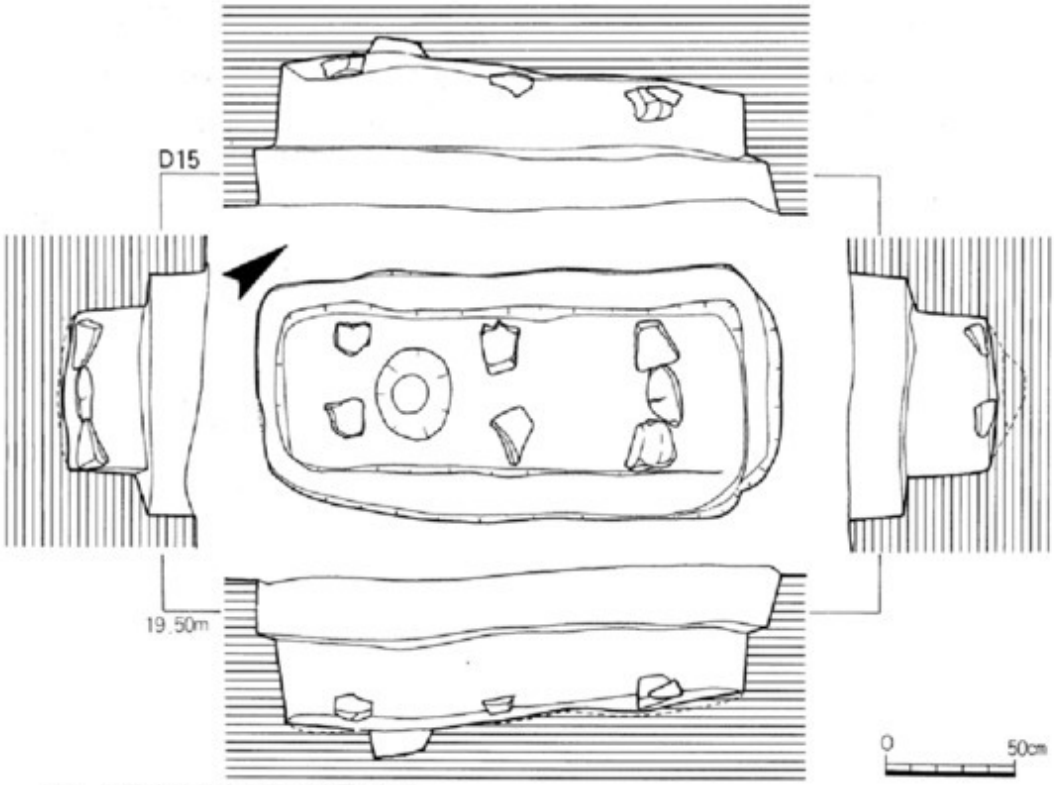
16号土坑墓は，群中最南端に位置する。天神森２号墳石室直下にあり，主軸はN−79°−Eで，方向が他と際立って異なる。長さ 160cm，幅80cm，深さ38cmを測り，平面は長方形を呈する。坑底は東から西にゆるやかに傾斜しており，東頭位と考えられる。西の短側壁から30cmの位置に長さ32cm，幅28cm，深さ９cmの方形ピットがある。不明確だった３号土坑墓を除くと唯一の方形ピットである。坑底四隅近くに各１個の扁平角礫が上面のレベルをほぼそろえて置かれている。足位側の２個は14号土坑墓と異なって方形ピットと西短側壁の間に置かれている。石は30cm×20cm×５cmの相似た大きさで，西側の石は25cm間隔で，東側のは８cmの間隔をもって置かれている。

32　16号土坑墓

15号土坑墓

13号土坑墓から20cm南西がわに位置し，主軸をN－36.5°－Eにとる。14号土坑墓とは北東の短側壁が一線をなして並び，13号土坑墓とは南東の長側壁が一線をなす。二段掘り土坑墓で，一段目は長さ 201cm，幅95cm，深さ20cm，二段目は一段目の中央部にあり，長さ 181cm，幅65cm，深さ30cmを測る。坑底は南西に傾斜し，南西短側壁から35cmの所に径28cm，深さ11cmの円形ピットをもつ。坑底に並ぶ7個の扁平角礫の上面レベルは坑底の傾斜に添い，頭位がわと思われる北東短側壁平行位置に3個，坑中央部に13cm間隔で2個，さらに円形ピットより短側壁がわに15cm間隔で2個ある。北西長側壁がわの3個は一線に並ぶが，反対がわは足位の石がやや内側になっている。

33 15号土坑墓

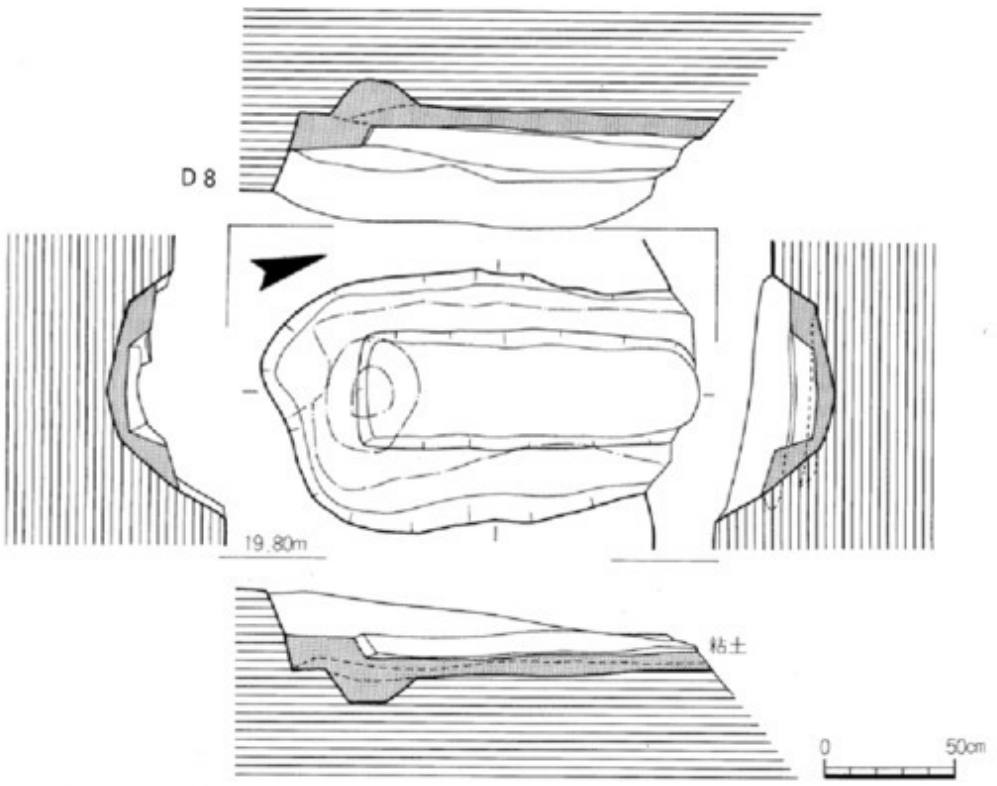


34 15号土坑墓実測図（縮尺1/30）

8号土壙墓

5号土壙墓の東にあり，主軸をN−14°−Eにとる。上部，特に西方は1号墳の地山整形時に削平され，北がわ短側壁は古墳時代以降の地下げにより破壊されており，復原長 180cm，幅95cm，深さ45cmである。壙底は北から南へゆるやかに傾斜し，南がわ短側壁より13cm内がわに径35cm，深さ10cmの円形ピットがある。壙底に厚さ約7cmの灰白色粘土を敷きつめ 131cm×45cm×9cmの埋葬主体部を形成する。粘土壁は外傾45度だが，木棺埋葬も考え得る。壙底のピットにも粘土が詰まっていたことは，ここの場合，遺体埋葬時には壙底のピットが不必要になっていたと考えられる。

35　8号土壙墓

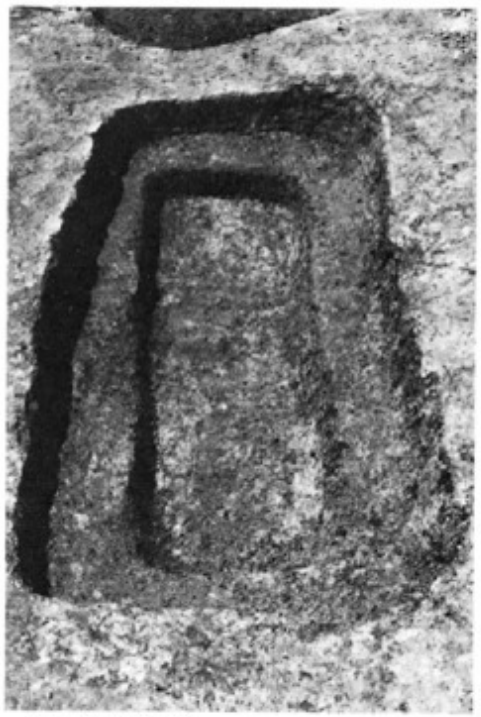


36　8号土壙墓実測図（縮尺1/30）

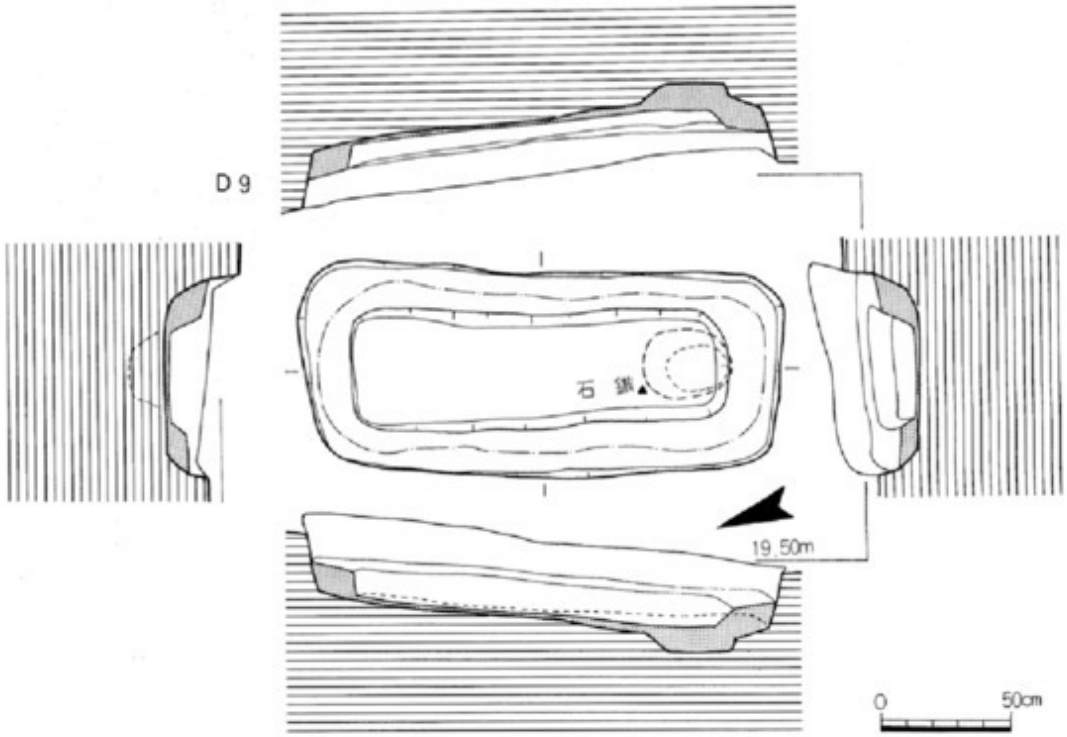
9号土坑墓

8号土坑墓の南で主軸をN−18°−Eにとり，長さ 183cm×幅78cm×深さ30cm。坑底は北から南へ土坑上面の地山とほぼ同角に傾斜する。南がわ短側壁近くに径38cm，深さ6cmの円形ピットがある。8号土坑墓と同様に，ピットも含めて坑底に灰白色粘土が敷き詰められ，厚さは中央部で1cm～2cm，両短側壁がわで10cmを測り，146cm×45cm×10cmの埋葬主体部を形成する。木棺葬の可能性を有する。円形ピット周縁附近より石鏃出土。石鏃は，安山岩製。最大幅 1.5cmで先端部を欠失。両側の調整剝離は外側にやや湾曲して全体に丸みをもち，抉り込みは浅い。

◀37　9号土坑墓出土石鏃実測図（縮尺3/5）



38　9号土坑墓

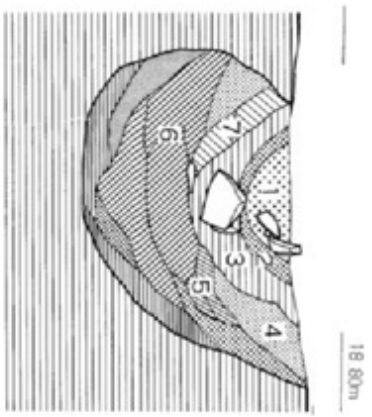


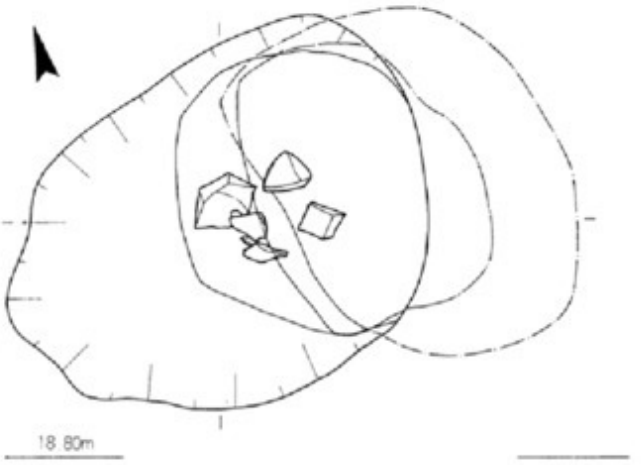
39　9号土坑墓実測図（縮尺1/30）

2．竪　穴

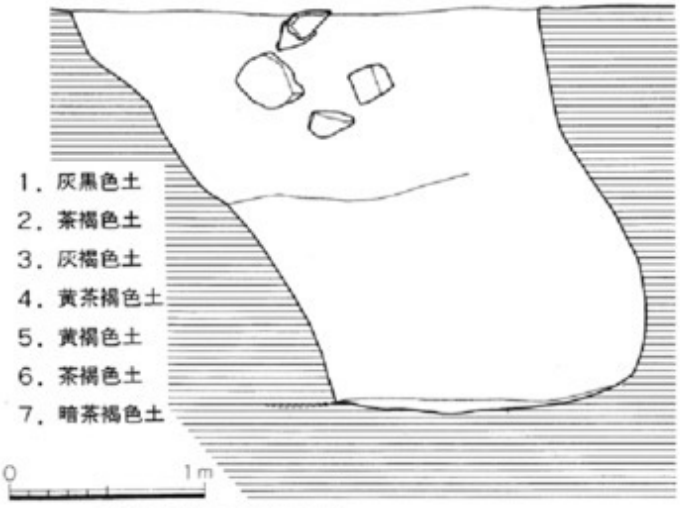
土坑墓群の西方約30ｍの丘陵先端近くから単独に検出される。後述する掘立柱建物跡や弥生時代の溝状遺構から７ｍの所で，それらとの関係が考えられるが土器は出土せず時期は不明。竪穴上面は東西225㎝×南北175㎝の楕円形。

40　竪穴





西壁は約45度で東に傾斜し，東壁は深さ60㎝のところから大きく外方に湾曲して袋状を呈し，深さは205㎝を測る。土層断面を見ると，竪穴はレンズ状堆積で埋まり，底から135㎝附近から上に角礫数個の転落がある。最上層には，径70㎝，中央部の厚さ23㎝のレンズ状に堆積した木炭を多量に含む灰黒色土が観察される。



41　竪穴実測図（縮尺1/40）

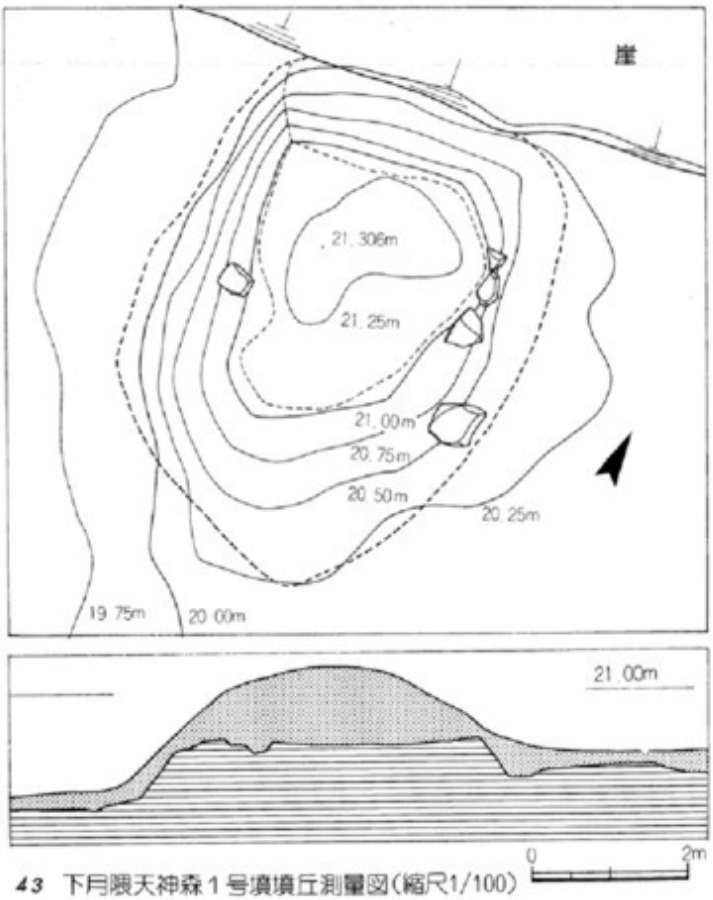
3．下月隈天神森１号墳

下月隈天神森２号墳の北に位置する１号墳は，地元の人の話によれば，今回の調査で東がわの奥壁と確認された部分の一部は，すでに半世紀以上前に開口しており，石室内部をのぞくことができたという。すなわち，その頃までは天井石も残っていたと思われる。それを裏付けるように石室内部は荒らされ，副葬品の残存もわずかで，床に敷き詰められていた角礫も，開口していた奥壁寄りの部分が，かなり広範囲にはがされ，持ち出されていた。

また，天井石，両側壁，奥壁等も，腰石と一段目積み石の一部分を残すほかは，大半の石材がはずされて，持ち出されており，石室内部には土砂が充満していた。このため，下草，雑木の伐採後，現状写真を撮影し，現況図を作り，ただちに石室内部の覆土除去作業を開始する。

以下，項目別に下月隈天神森１号墳について詳述する。

42　下月隈天神森１号墳の発掘前のようす



43　下月隈天神森１号墳墳丘測量図(縮尺1/100)

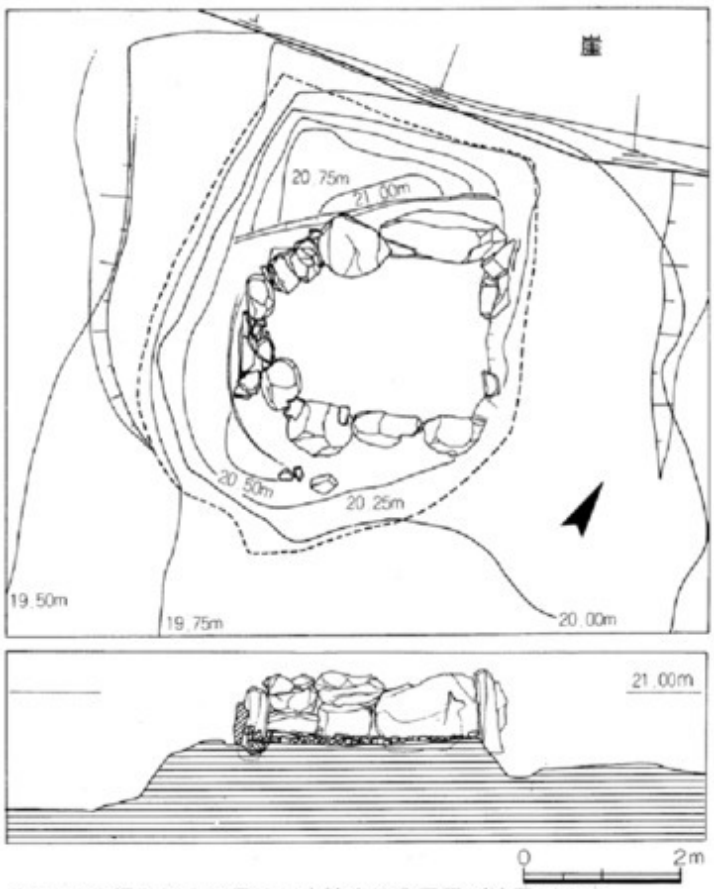
墳丘

墳丘は現状で東西約5m，南北約6m，高さ約1.3mを測る。東，北，西の等高線はほぼ直線をなして走り，傾斜も急であるが南がわは丸みをもち傾斜もゆるやかである。平面が一見，方形を呈し，さらに地山整形痕と思われるものが封土除去後に北東と北西の墳丘裾部に当ると考えられる位置に認められ，それが直線をなしていたことから，一辺約7mの方墳だったとも考えられるが，周辺が最近まで畑であり，その耕作等によって削られてそのような形を呈するにいたった可能性もある。また，墳丘下には，5～9号，19号の各土坑墓がある。

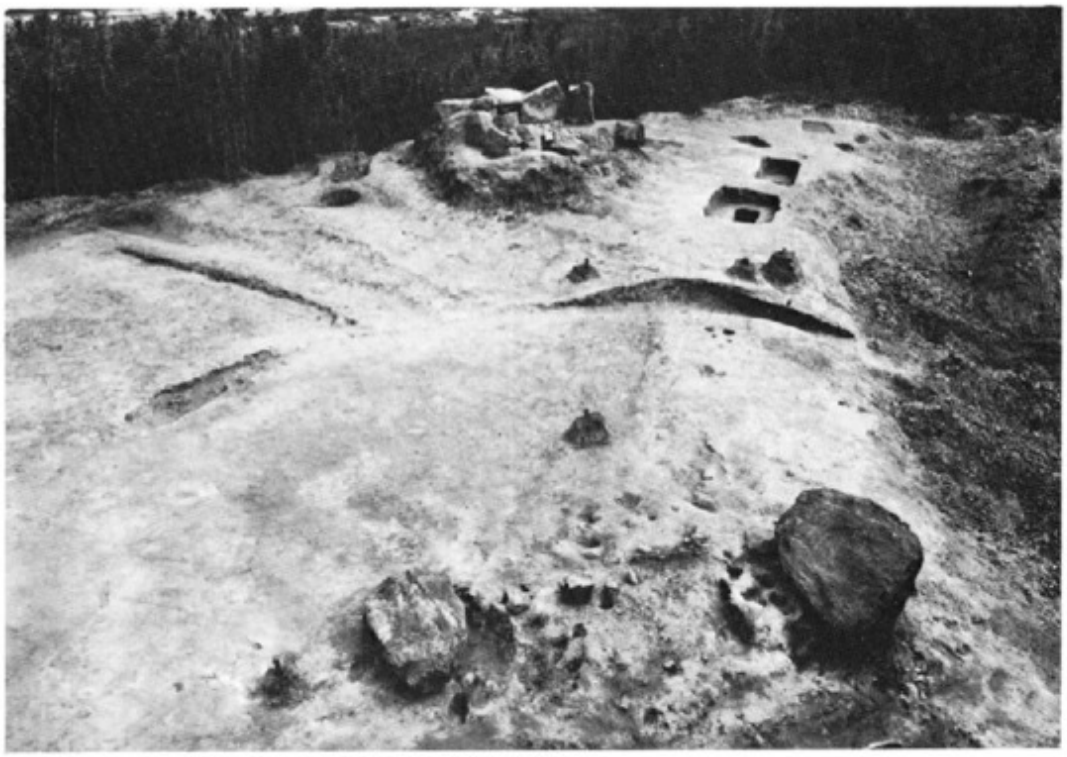
44　下月隈天神森1号墳封土除去後のようす（南西から）

内部構造

西の福岡平野に向かって開口する単室の両袖型，横穴式石室で主軸をN－58°－Eにとる。玄室の長さ275cm，幅は奥壁部223cm，入口部160cm，右側壁220cm，左側壁280cm，袖と袖の間65cm，両袖石と奥壁とは平行でない。地山に直接20cm×15cm×10cm前後の角礫を敷き詰めて床面としている。腰石は地山を掘り込んですえつけてある。短い羨道部をもち，1枚のとびら石で閉塞する。

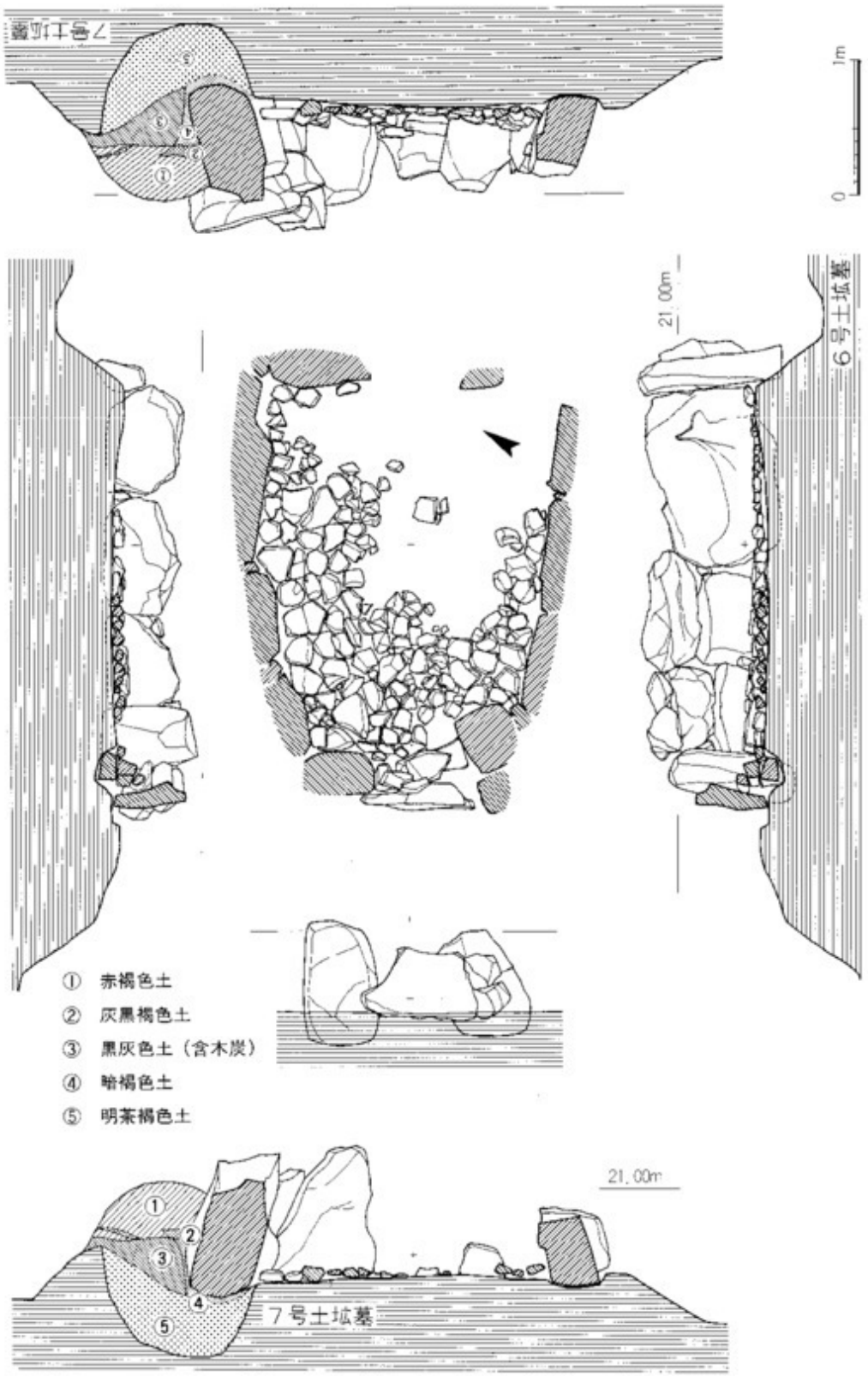


45　下月隈天神森1号墳封土除去後測量図（縮尺1/100）



▲46　下月隈天神森1・2号墳全景（手前が2号墳）

▼47　下月隈天神森1号墳と土壙墓



48　下月隈天神森1号墳石室実測図（縮尺1/50）

▲49　下月隈天神森1号墳石室全景①（石室入口がわから）

▼51　下月隈天神森1号墳右側壁

▶50　下月隈天神森1号墳石室全景②（石室奥壁がわから）

▶52　下月隈天神森1号墳左側壁

遺物出土状態

前述のように，すでに盗掘等にあっているため副葬品の出土はないものと思ったが，わずかながら貴重な遺物を得る。

須恵器　石室内の覆土を除去している時に比較的上部から出土する。石室内副葬品と思われる。

鉄　鏃　原位置を保つものは1本もないと思えるが，すべて石室内床面の主軸線より左がわから出土。特に集中する個所はない。

鉄　斧　石室内右側の袖石から50cm，右側壁から10cmの位置の敷石の間に転落した状態で出土する。

耳飾り　対をなすと思われる一組が出土。その一方には中間飾が残されている。2個とも，すでに敷石がはずされていた奥壁部の，主軸線より右がわから出土する。親環だけのものは，奥壁から30cm，右側壁から70cmの位置から出土。中間飾のあるものは，そこから75cm離れた，右側壁から30cmの石室内中央部から出土する。

刀　子　2本出土するが，左側壁寄り中央部から出土する。

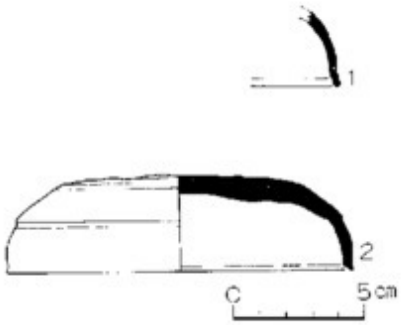
53　下月隈天神森1号墳石室内副葬品出土位置図（縮尺1/40）

▲54　耳飾りの出土状況

▼55　鉄鏃の出土状況

出土遺物

須恵器杯蓋　2個体出土する。1は墳頂部で表採する。口径を測り得ないほどの細片であるが，かなり急な立ち上がりを示し，1条の凹線によって体部と天井部を区別している。口縁内面には明瞭な段をもち，口縁は丸くおさめる。濃灰色を呈し，胎土，焼成とも良好である。



56　下月隈天神森1号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）

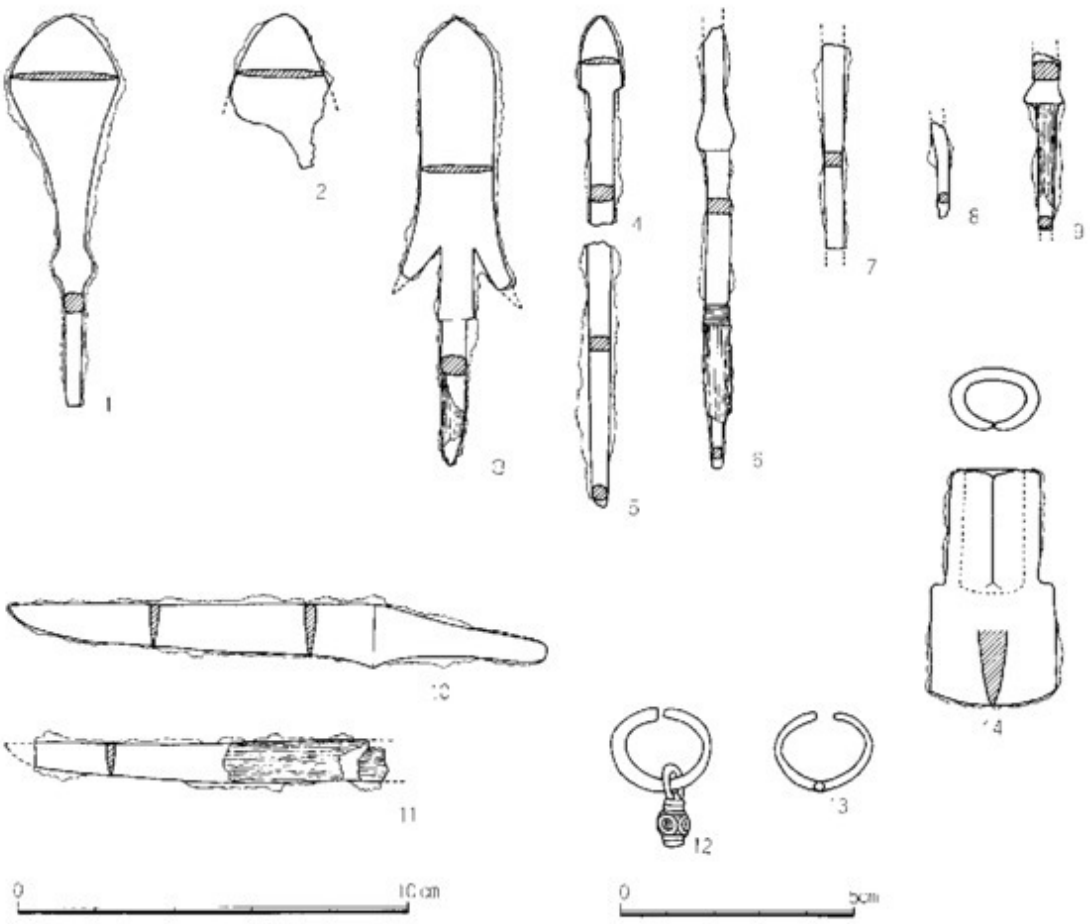
2は，二分の一足らずの破片であるが，口径13.4cm，器高3.8cmを測る。体部はほぼ垂直に近い立ち上がりを示し，天井部はヘラ削りされ平坦である。口縁内面には段があり，天井部と体部との境は凹線で区別している。内面は横ナデによって仕上げる。灰色を呈し，胎土中に砂粒が多い。焼成は普通である。

鉄　斧　1個出土している。両肩の張り出した小型の斧である。鉄板を突き合わせて柄を挿入する袋部が形成されているが，断面は楕円形で接合部はしっかりしている。全長約6cm，刃長約3cm，刃幅約3.2cmで刃部は弧状を呈し，断面は蛤刃状の両刃の斧である。

刀　子　10は全長13.8cm，刀身の長さ9.4cm，茎長4.4cmの平棟平造りの刀子である。関部から切先にむかって1cm位は，やや内反りになっているが，その先は徐々に細くなり，やや丸みをおびた切先に至る。刀身幅は関部から1.7cmの所で1.3cm，切先から3.7cmの所で1cmを測る。棟幅は全体を通じて0.3cmである。茎の棟は，関部を境にして刃部の棟に対してやや鈍角をなす。茎も平棟造りであり，茎尻は丸みをおびている。完形品である。11は，現存長9cmの平棟平造りであるが切先部と茎部を欠失する。木質部が長さ4cmにわたって残存するが，この部分が茎になるのであろう。図上の推定復原によれば，刀身は長さ5.5cmで，身幅の0.8cmと相まって非常に小型の刀子ということになる。この他にもう1本，図示しなかったが刀子の残片と思われるものが出土しているので，合計3本以上副葬されていたことになろう。

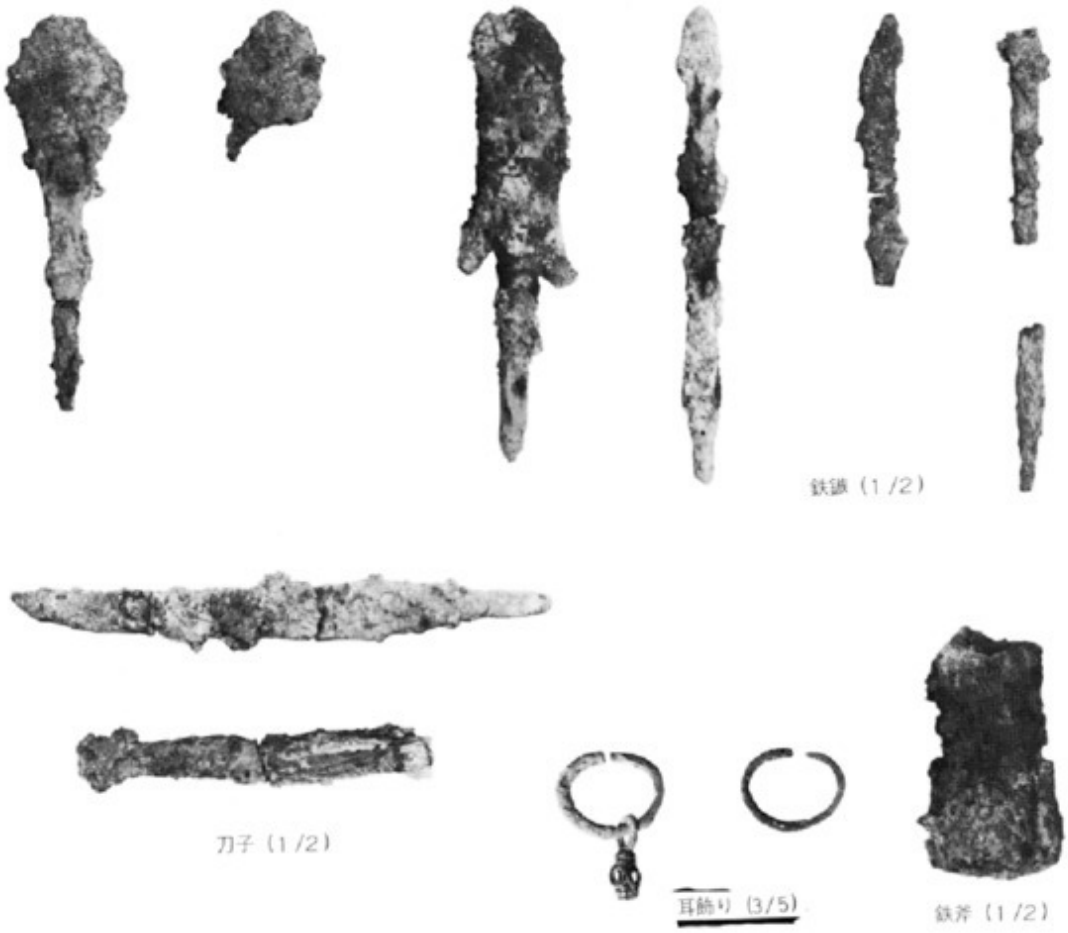
鉄　鏃　1～3は平根式，4は尖根式の有茎鏃である。1は現存長10cmで，鏃身幅2.8cmを測る。切先のフクラが鏃身の中央部から内湾する定角形を呈しているが，左右対称ではない。鏃身は両丸造りというよりも扁平に近い。鏃身と茎との間には棘状突起がみられる。2も1と同じ型式に属するものと考えられるが，鏃身部のみで長さ4cmを遺存するものである。3は全長11.5cm，鏃身長5.8cm，鏃身幅1.9cmを測る。長い鏃身には，ゆるやかに外方へ開く逆刺がつき，長さ1.9cmの箆被がつづき，茎へと至る。茎には木質部の

57　下月隈天神森1号墳出土遺物



58　下月限天神森1号墳石室内出土遺物実測図（縮尺1/2・3/5）

残存が認められる。この3の鉄鏃は，その形状が鏑のない点を除けば，三重県石山古墳出土の鋼鏃と酷似する。4と5は同一個体であろうと思われるが直接にはつながらない。全長約12.3cm，鏃身幅1cmの片刃造りの三角形式である。関から長さ約8cmの篦被がつづき，茎へと至る。鎬状突起は観察できない。6～9は篦被と茎部の破片である。6は現存長7cmの篦被の下に長さ4.2cmの茎部を残すものであるが，その篦被直下の茎部には1cmにわたって糸をまいた痕跡がある。9は，篦被の下部に鎬状突起をもち，茎部へ至る破片であるが，茎部には木質部の残存が認められる。7は篦被の，8は茎部の，破片である。上記いずれの場合も篦被は断面が扁平である。

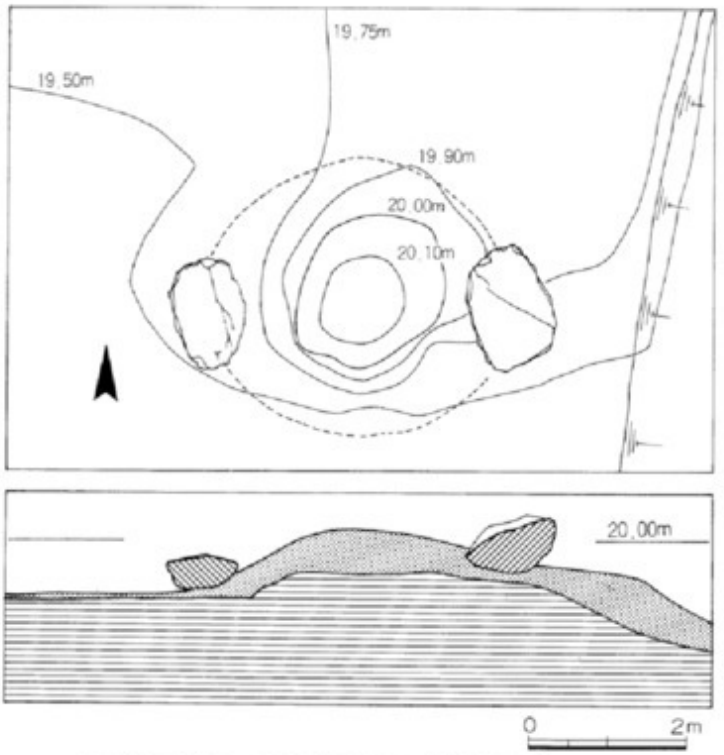


59　下月隈天神森１号墳石室内出土遺物

耳飾り　２個出土しており，対をなすものと考えられる。耳飾り12には中間飾が残っているが，耳飾り13は耳環部のみである。耳環は12，13とも長径2.1cm，短径1.8cmで，断面は直径0.25cmの円形を呈す。中実の銅芯に金箔を置いたものであるが，金箔の保存状態は不良。耳飾り12は，耳環に小環を通し，この小環に幅約0.15cmの連結金具としての板金を折り曲げて懸垂し，中間飾の中をくぐらせている。更に下方の垂下飾へとつながっていたものと思われるが，発見されなかった。また中間飾は，径約0.4cmの小円環が鳥籠形に鑞付けされ，その天井部と底部は，各々２個の同規格の小円環が積み重ねられて鑞付けされている。全長約１cmで，表面の金箔が剝落した個所が黒色を呈していることからみて，銀芯に金箔を置いたものであろう。

4．下月隈天神森２号墳

下月隈天神森２号墳は，かなり以前から２個の大石が地上に露呈し，墳丘も大半が失われており，副葬品も残存しないと思われていたが調査の結果，以下の所見を得た。



60　下月隈天神森２号墳現況測量図（縮尺1/100）

61　下月隈天神森２号墳全景（奥に見えるのが１号墳）

墳　丘

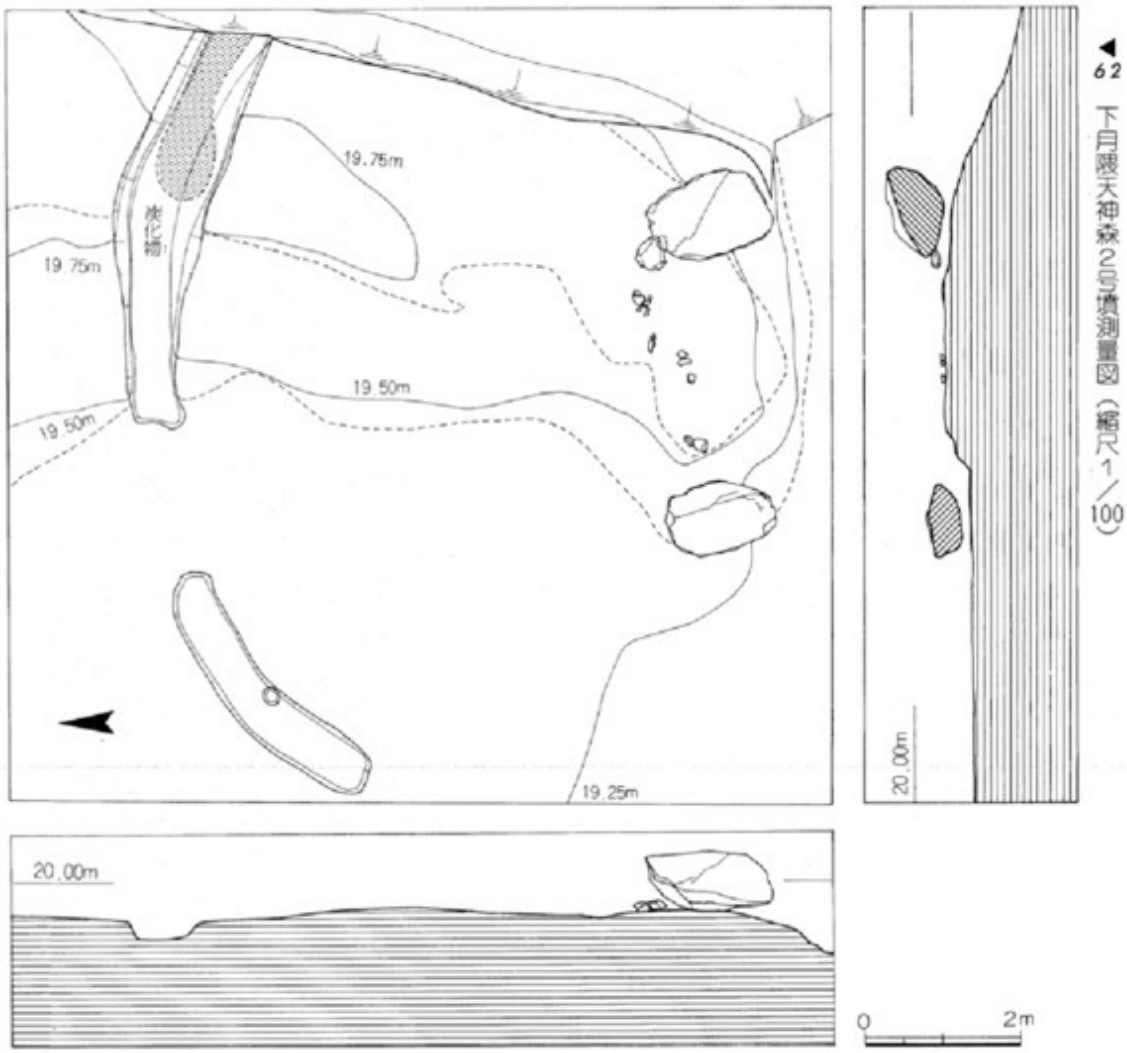
東西の大石をはさみ，現状では径４ｍの円形を呈し，高さ約60cmを測る。北方で検出した幅１ｍ，深さ約0.3ｍの弧状の溝状遺構は出土遺物がなく時期，性格とも不明であるが，構築時の墳丘裾線と考えると，直径約15ｍの円墳だったことになる。

内部構造

横穴式石室であろうが，破壊がひどく，規模，開口方向とも不明だが，東と西の大石間の床面が2.8mあることから，これを石室の長さとし，西に開口したものと考えられる。また床には，１号墳と同様に角礫が敷き詰められていたと思われる。

遺物出土状態

１号墳以上に石室の保存状態がわるいが，鉄鏃と直刀，鎌の出土をみる。



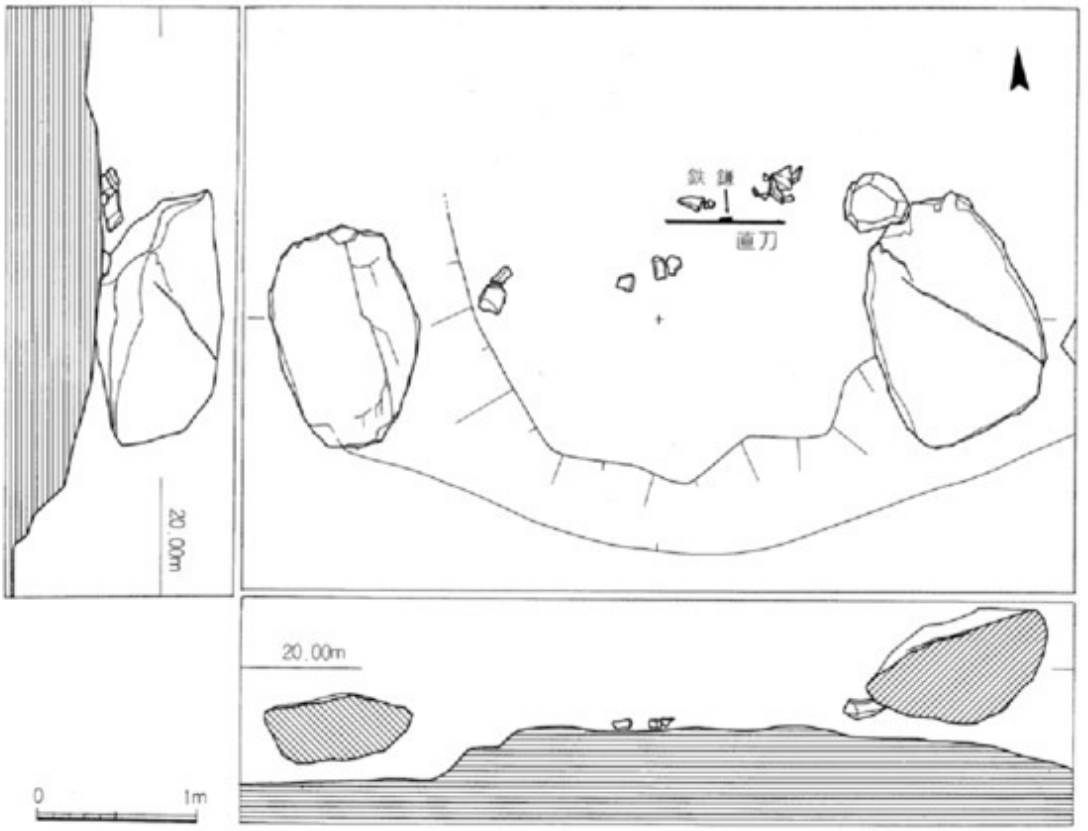
◀62 下月隈天神森2号墳測量図（縮尺1／100）

直　刀　左側壁寄りの奥壁近くから，切先を西に，刃部を石室中央部すなわち南に向けた状態で出土する。

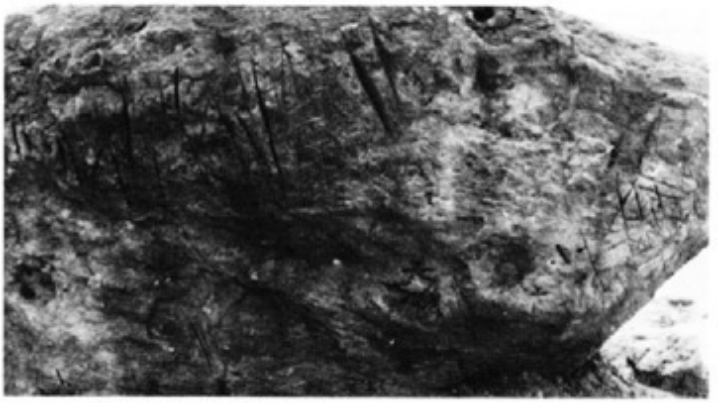
鎌　直刀と並べた状態で，先端を西に，刃部を南に向けて出土する。

鉄　鏃　残片ではあるが4本が石室中央部から出土する。床の敷石もすでになく，原位置ではないと思われる。

63　下月隈天神森2号墳全景（覆土除去後のようす）

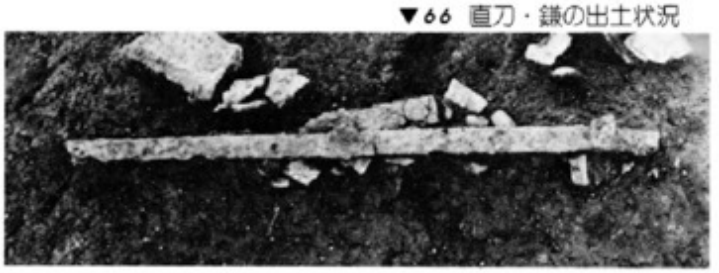


64　下月隈天神森2号墳石室実測図（縮尺1/50）



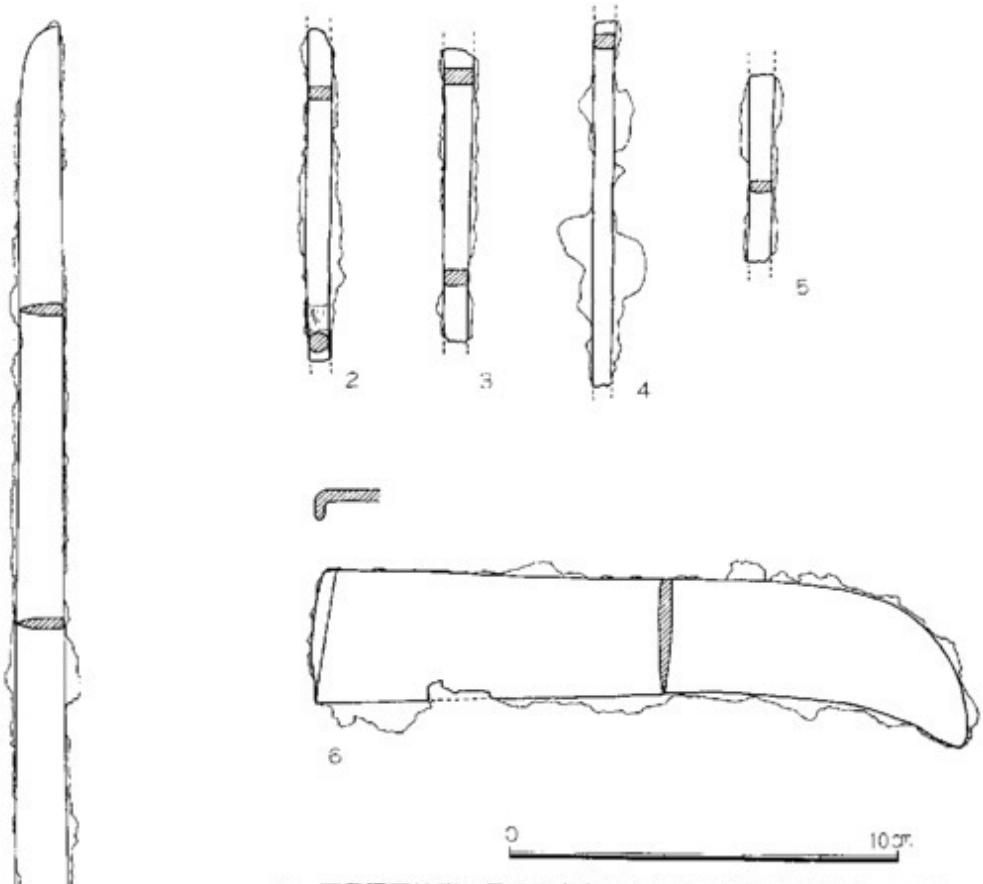
▲65　壁石裏がわに見える線刻

▼66　直刀・鎌の出土状況



線　刻

東の大石（150cm×100cm×60cm），すなわち奥壁の一部をなしていたと思われる石材の裏がわに断面V字状の，写真に示したような線刻がある。石質は滑石。



67　下月隈天神森2号墳石室内出土鉄器実測図（縮尺1/2・1/4）

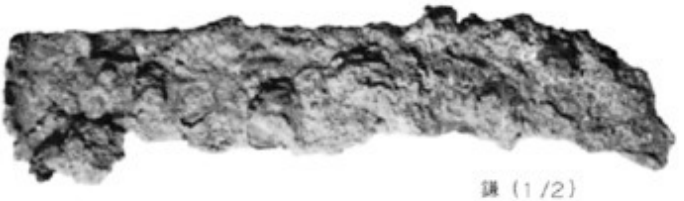
出土遺物

直　刀　現存長75.6cmで茎尻を欠失するほかは保存状態良好な平棟平造りの直刀である。刀身の長さ63.4cm，刀身幅2.6cm，刀背の厚さ0.7cmを測り，フクラがつく。茎部は現存長12.2cm，幅1.2cm，厚さ0.4cmである。関（区）の部分は錆が厚く覆っているため判断しかねるが，一見，棟関刃関ともに造られているようである。目釘孔も錆のために不明。なお関の部分には鍔状の痕跡が認められる。

鉄　鏃　4本の出土をみるが，いずれも篦被あるいは茎部の破片であって鏃身の形態は不明である。2は現存長8.5cmを測るが，現存長7cmの断面扁平な篦被とそれに続く断面円形の茎部の破片である。茎部には，木質部の残存が認められる。3は現存長7.5cmで断面扁平な篦被の破片である。鏃身寄りの方がやや太くなっている。4は，現存長9cmの篦被の破片である。5も現存長4.8cmの篦被の破片である。

直刀（1/5）

鉄鏃（1/2）



鎌（1/2）

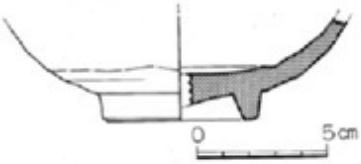
68　下月隈天神森2号墳石室内出土鉄器

鎌　全長は約17cm，刃幅は基部で約3.4cm，中央部で約3cm，背部の厚さは約0.3cmを測る。刃部はやや内湾し，両刃で，刃部先端が鉤状に曲がる曲刃鎌の形態をとる。基部は直角に0.4cmほど折りかえし，刃部に対して鈍角をなす。基部寄りの刃部に一部欠失した個所があるが，ほぼ完形品である。

5. ピ ッ ト 群

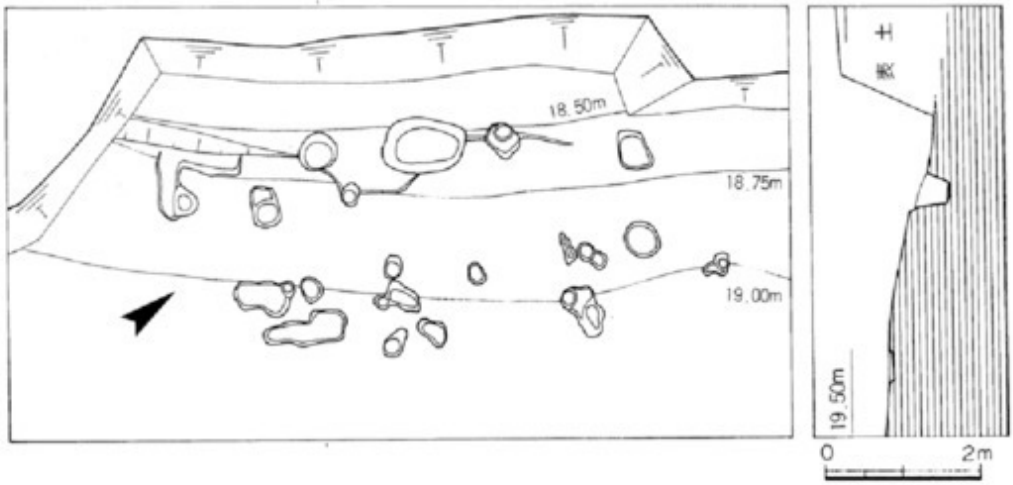
下月隈天神森1号墳に接した西側の丘陵斜面から，東西3m，南北8mにわたってピット群を検出する。ピットには，平面が円形のものと楕円形あるいは長方形のものがある。大半のものは不整形である。大きさは，最も大型の楕円形のもので，長径が100cm，短径が70cm，深さ50cm足らずである。小型の円形ピットは，径20cm，深さ10cm前後を測る。ピットからの遺物の出土はなく，一見，並びが認められるようであるが，建物にはならないと思われる。この種のピットが，丘陵西側先端部の掘立柱建物跡のピット以外には，この丘陵上のどこからも検出されなかったということは，この丘陵の利用を考える上では，きわめて重要な意味をもつものと考えるが，残念ながら，性格，時期ともに不明である。ただし，表土除去の際，図示したような青磁の底部が出土している。青磁は現存高4cm，体部径，復原で12.9cmを測る。高台径6cm。高台の一部とその上部の残片である。釉には貫入はない。

▲69 ピット群全景（南西から）



◀70 ピット群出土青磁実測図（縮尺1/3）

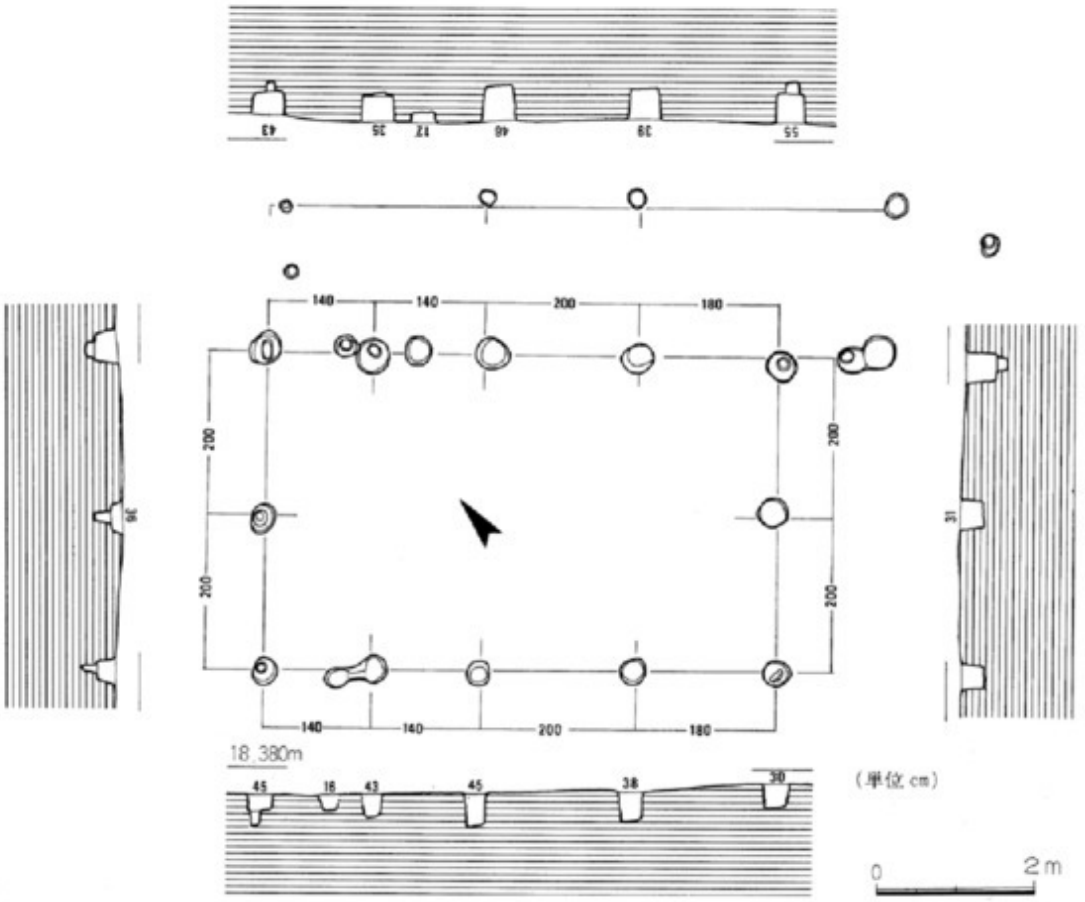
▼71 ピット群実測図（縮尺1/100）



6. 掘 立 柱 建 物 跡

丘陵西側先端部において検出される。柱間が4間×2間で，南西を向き，柱通りN－48°－Wをとる。北東の丘陵内がわに庇をもつと思われる。桁行約660 cm，梁行約400cm，柱穴径40cm，深さ40cm，柱痕跡の径約15cmを測る。時期，性格とも不明。調査区南東にも別棟建物が存在するらしい。

72 掘立柱建物跡（北東から）



73 掘立柱建物跡実測図（縮尺1/100）

Ⅳ おわりに

下月隈天神森遺跡では，完掘の結果，土壙墓と古墳，掘立柱建物跡，竪穴，ピット群が確認された。周知の遺跡であった天神森古墳群を，道路建設のためとはいいながら，破壊せざるを得なかったことは，文化財が，文化財保護法にいうような国民共有の財産という理念からはほど遠いという現実を改めて考えさせられた。それと同時に，今回，土壙墓の検出をみて，遺跡とは地下に埋蔵されている故に，表面の観察だけでは正確な内容を把握することが不可能であるということ，ひいては，遺跡の周知化の場合における遺跡の内容呈示のむずかしさ，問題点を改めて教えられた。

以上で，下月隈天神森遺跡の報告を終わるが，最後にあたって，整理してまとめとしたい。

土壙墓について

月隈丘陵における他の遺跡の在り方からみて，当然，甕棺墓の検出をみると考えていたが，予想に反して１基の検出もなかった。これに対して，土壙墓19基で構成された共同墓地が他に例をみないだけに，その歴史的・社会的背景等に特異なものを感じる。

特に土壙墓の中に，小型のピットや角礫を壙底に配したものが多いことは特記すべきことであろう。なかでも角礫は，木棺を安置する台の役目をもっていたのではなかろうか。ピットのなかには，遺体埋葬の時点にはその役割を終えていたものと，そうでないものとがあった。また，６号土壙墓や９号土壙墓から出土した石鏃の，先端部あるいは基部が欠失していたということは，これらの石鏃が副葬品ではなく遺体に射込まれていたのではないかと考える。また，土壙墓が切り合わず，整然と並んでいたことは，短期間に墓地が形成されたことを物語るものであろう。その時期は宝満尾遺跡あるいは下月隈宮ノ後遺跡の土壙墓を考慮すれば，弥生中期から後期にかけてであろう。

下月隈天神森１・２号墳について

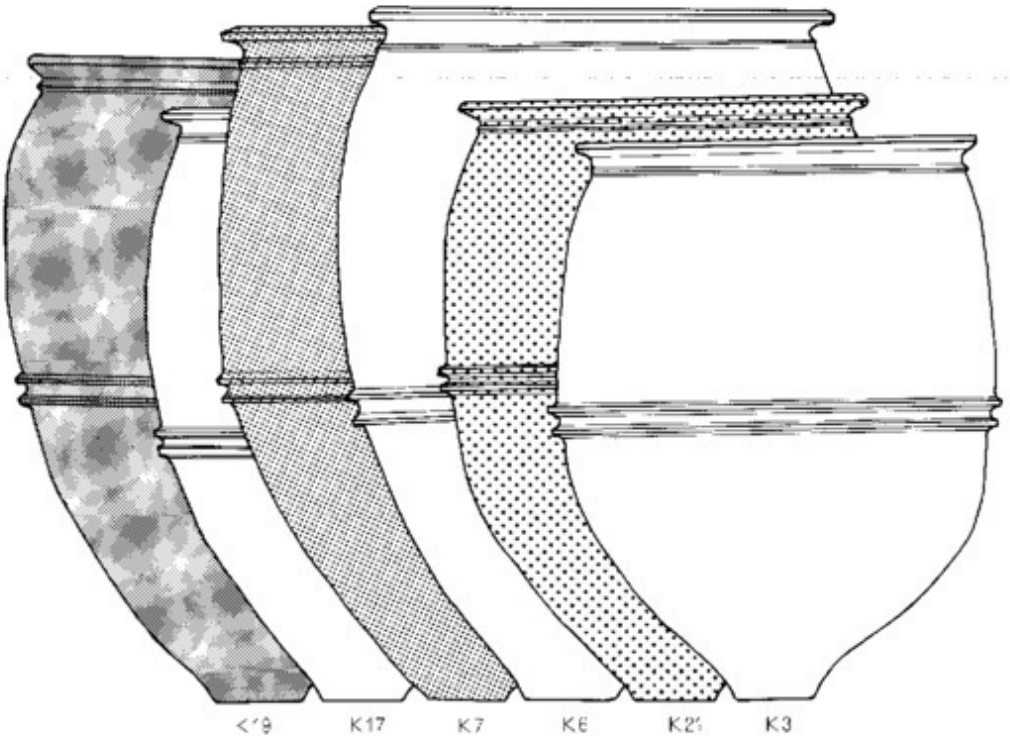
１・２号墳とも墳形不明であるが，内部構造に横穴式石室をもつ。１号墳からは，鉄鏃，刀子，鉄斧，耳飾りが，２号墳からは，直刀，曲刃鎌，鉄鏃等が出土する。追葬を考慮しなければならないが，１号墳の場合は，銅鏃の形を受けた鉄鏃，中間飾の残された耳飾り等からみて，その年代は５世紀後半を下るものではないと考える。また２号墳も，曲刃鎌を年代のよりどころとするならば，５世紀後半前後といえようか。しかし，１号墳と２号墳の先後関係については，決定づける資料を持ちあわせない。

以上簡単ではあるが，下月隈天神森遺跡発掘調査のまとめとしたい。

74 下月隈遺跡群遠景

福岡市博多区

下月隈官ノ後遺跡



本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 53
Ⅱ　遺　構 …… 57
　1．甕棺墓 …… 57
　2．土壙墓 …… 103
Ⅲ　下月隈宮ノ後遺跡甕棺墓出土の人骨… 113
Ⅳ　おわりに …… 119

• 本書は，福岡市教育委員会が昭和54年度の国庫補助を受けて，1979年12月22日から1980年3月31日までの約3か月間にわたって発掘調査を実施した福岡市博多区大字下月隈字宮ノ後に位置する弥生時代の甕棺墓および土壙墓の発掘調査報告書である。
• 発掘調査の速報はすでに「福岡市埋蔵文化財調査報告書　第61集」として発行されているが，本書をもって正式報告書とする。
• 遺跡の発掘調査には，福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄，力武卓治，岡島洋一（事務担当）が当り，本書の執筆・編集は飛高と力武が行なった。
• 本書に記載した甕棺墓，土壙墓の遺構実測図は縮尺1/20，1/40，甕棺の実測図は縮尺1/6，1/8，甕棺の写真は縮尺1/5，1/6に統一している。
• 人骨の取りあげは九州大学医学部永井昌文教授と第2解剖学教室の那須哲夫，中橋孝博，江口和洋，田中良之氏に依頼し，鑑定結果については永井教授より原稿をいただき本書に収録した。
• 遺跡の発掘調査，調査事務所の設置，甕棺の復原作業および本書の作成には，次の方々のご協力を得ました。ここに氏名を記して感謝の意を表します。（敬称略）
　江越初代　関加代子　関政子　鶴田サヨ子　中山政子　平島龍吉　山内タツ子　荒津孝治
　実淵栄治　河野徹也　藤田太　岩永真弓　中村満代　小島由美子　安武裕子　溝口博子
　武本延子　花畑照子　藤たかえ　月江英海　光安禎太郎

下月隈宮ノ後遺跡挿図目次

1	宮ノ後遺跡遠景（東から）	54
2	宮ノ後遺跡発掘前（東から）	54
3	宮ノ後遺跡発掘前（西から）	54
4	宮ノ後遺跡周辺地形図（縮尺1/400）	55
5	宮ノ後遺跡遺構配置図（縮尺1/100）	56
6	宮ノ後遺跡発掘風景	57
7	宮ノ後遺跡全景	57
8	第1号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	58
9	第1号甕棺実測図（縮尺1/6）	58
10	第1号甕棺墓	59
11	第1号甕棺（縮尺1/5）	59
12	第2号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	60
13	第2号甕棺墓	60
14	第2号甕棺実測図（縮尺1/6）	60
15	第2号甕棺（縮尺1/5）	61
16	第3号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	62
17	第3号甕棺墓	63
18	第3号甕棺（縮尺1/10）	63
19	第3号甕棺実測図（縮尺1/8）	64
20	第4号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	65
21	第4号甕棺墓	65
22	第4号甕棺実測図（縮尺1/6）	66
23	第4号甕棺（縮尺1/5）	66
24	第5号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	67
25	第5号甕棺実測図（縮尺1/6）	67
26	第5号甕棺墓	68
27	第5号甕棺（縮尺1/5）	68
28	第6号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	69
29	第6号甕棺墓	70

30 第6号甕棺（1・2は縮尺1/5　4は縮尺1/10）…… 70
31 第6号甕棺実測図（縮尺1/6, 1/8）…… 71
32 第7号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 72
33 第7号甕棺墓 …… 73
34 第7号甕棺（縮尺1/10）…… 73
35 第7号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 74
36 第8号甕棺墓 …… 74
37 第8号甕棺墓実測図（縮尺1/10）…… 75
38 第8号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 75
39 第8号甕棺（縮尺1/5）…… 76
40 第9号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 77
41 第9号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 78
42 第9号甕棺（縮尺1/5）…… 79
43 第9号甕棺墓 …… 80
44 第9号甕棺墓 …… 80
45 第10号甕棺墓 …… 80
46 第10号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 81
47 第10号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 81
48 第10号甕棺（縮尺1/5）…… 82
49 第11号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 83
50 第11号甕棺墓 …… 83
51 第11号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 83
52 第11号甕棺（縮尺1/5）…… 83
53 第12号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 84
54 第12号甕棺墓 …… 84
55 第12号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 84
56 第12号甕棺（縮尺1/5）…… 84
57 第13号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 85
58 第13号甕棺墓 …… 85
59 第13号甕棺墓 …… 85
60 第13号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 86
61 第13号甕棺下棺口縁部 …… 86

62 第13号甕棺（縮尺1/5）…… 86
63 第14号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 87
64 第14号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 87
65 第14号甕棺墓 …… 88
66 第14号甕棺（縮尺1/5） …… 88
67 第15号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 89
68 第15号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 89
69 第15号甕棺墓 …… 90
70 第15号甕棺（縮尺1/5）…… 90
71 第16号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 91
72 第16号甕棺墓 …… 91
73 第16号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 91
74 第16号甕棺（縮尺1/5）…… 91
75 第17号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 92
76 第17号甕棺墓 …… 93
77 第17号甕棺墓 …… 93
78 第17号甕棺（縮尺1/10）…… 94
79 第17号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 94
80 第18号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 95
81 第18号甕棺墓 …… 95
82 第18号甕棺（縮尺1/5）…… 95
83 第18号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 95
84 第19号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 96
85 第19号甕棺墓 …… 97
86 第19号甕棺（縮尺1/10）…… 97
87 第19号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 98
88 第20号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 99
89 第20号甕棺墓 …… 99
90 第20号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 99
91 第20号甕棺（縮尺1/5）…… 100
92 第21号甕棺墓 …… 100
93 第21号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 101

94　第21号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 102
95　第21号甕棺（縮尺1/10）…… 103
96　第1，2，3，4号土壙墓 …… 103
97　第1号土壙墓 …… 104
98　第1号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 104
99　第2号土壙墓 …… 105
100　第2号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 105
101　第3号土壙墓 …… 106
102　第3号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 106
103　第4号土壙墓 …… 107
104　第4号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 107
105　第5号土壙墓 …… 108
106　第5号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 108
107　第6号土壙墓 …… 109
108　第6号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 109
109　第7号土壙墓 …… 110
110　第7号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 110
111　第8号土壙墓 …… 111
112　第8号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 111
113　第9号土壙墓 …… 112
114　第9号土壙墓実測図（縮尺1/40）…… 112
115　土取り残土採集の甕実測図（縮尺1/2）…… 120

III　下月隈宮ノ後遺跡甕棺墓出土の人骨　挿図目次

1．第3号甕棺墓人骨出土状況 …… 116
2．第7号甕棺墓人骨出土状況 …… 116
3．第9号甕棺墓人骨出土状況 …… 117
4．第17号甕棺墓人骨出土状況 …… 117
5．第19号甕棺墓人骨出土状況 …… 118
6．第19号甕棺墓人骨出土状況 …… 118

I はじめに

本遺跡は1979年12月22日から1980年３月31日までの３か月間にわたって発掘調査を実施したもので，すでに速報として1980年３月に福岡市埋蔵文化財調査報告書第61集「下月隈宮ノ後遺跡」を発行している。しかし，この速報の編集が発掘調査途中であったために，新たに検出した甕棺墓と土壙墓については未報告となっている。また人骨の検出もあり，九州大学医学部永井昌文教授の原稿もいただくことができたので，ここに合わせて報告し，速報と記述が重複している箇所もあるが，今回の報告を宮ノ後遺跡の正式報告書とする。

本遺跡は福岡市博多区大字下月隈字宮ノ後にあることから，大字，小字名を合わせて遺跡名を，下月隈宮ノ後遺跡と呼ぶことにした。本遺跡は三郡山地より派生した大城山の山麓に，南東から北西に長さ約７kmにわたって細長く延びた月隈丘陵のほぼ中央部に位置している。この月隈丘陵の西側には福岡平野が開け，板付遺跡をはじめとする弥生時代前期からの遺跡が知られている。月隈丘陵の大部分は終戦後から米軍の弾薬庫などの基地施設が建設され長い間米軍の管理下におかれていた。また福岡空港の騒音で福岡市西区のような大開発はみられなかったが，いくつかの砕石場が山肌をむき出しにしており，地形の変貌は西区以上と言うことができる。また米軍基地が1972年に返還されると，福岡市は席田総合運動公園建設の計画を立てた。文化課は建設工事に先立って1975年より毎年調査を実施している。これまでに４次にわたる発掘調査で弥生時代から古墳時代までの住居跡，古墳等を検出している。この他にも金隈遺跡，宝満尾遺跡，持田ヶ浦古墳等の発掘例がある。金隈遺跡は1969，1970と1980の３次にわたって発掘が実施された。１次，２次調査では甕棺墓 146基，土壙墓25基，石棺墓２基，支石墓らしいもの２基で，土器型式でいう金海式土器から桜馬場式土器まであり，甕棺編年の確立，あるいは人骨などの検討による墓地の構成など多くの成果を得ている。1972年に調査された宝満尾遺跡は宮ノ後遺跡の北 900ｍに位置している。検出された遺構は円墳１基，袋状竪穴11基，石蓋土壙墓３基，甕棺墓６基，石棺墓１基，土壙墓13基等である。４号土壙墓からは漢式鏡が１面出土している。これら月隈丘陵に存在する遺跡は，完結性のある遺跡として単独に取りあげるべき性格を有するものか，あるいは，福岡平野に分布する遺跡の後背地として理解されるべきかなどの問題について検討しうる段階になりつつある。

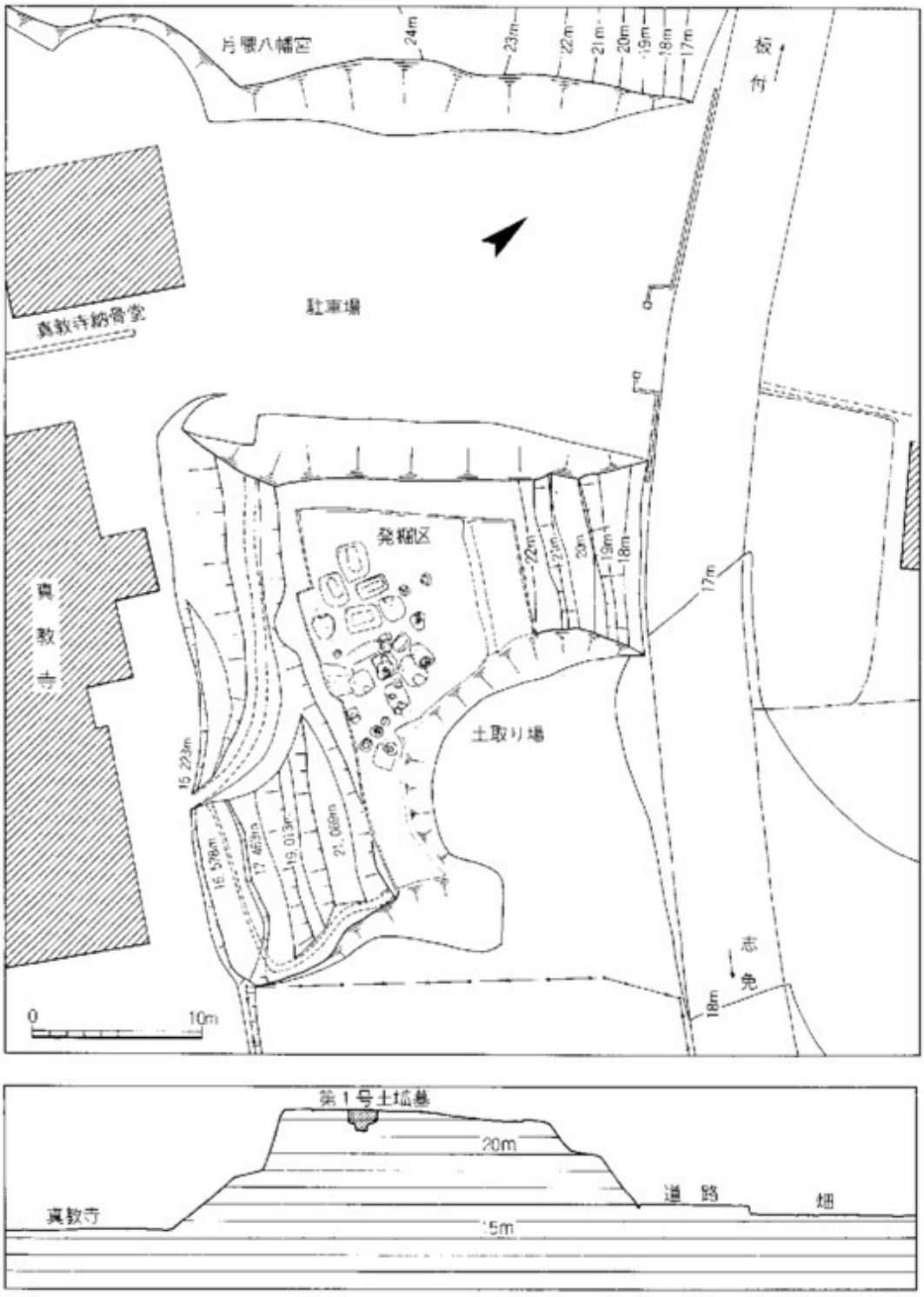
下月隈宮ノ後遺跡も周辺遺跡の立地と同じように月隈丘陵から西に向かって延びた支丘上にある。支丘の長さは約 300ｍ，幅約50ｍで，支丘先端からは東へ約40ｍの位置である。本支丘ではかつて甕棺の出土が知られていたものの調査されることはなかった。1978年，土地所有者

による土取り作業中に数基の甕棺が発見され直ちに文化課に通報されたのが今回の調査の直接のきっかけである。このため文化課は昭和54年度の国庫補助を受けて発掘調査を実施したものである。発掘調査は土取りが中断されていた15.2m×16.2mの245㎡を発掘区として設定した。発掘区は昭和初期の地図によると標高は約24mあるが，現在は標高23mを測る。北側は土取りで丘陵が切断されており発掘区は北東方向にやや傾斜している。検出した遺構は甕棺墓21基，土坑墓９基で，５基の甕棺墓から人骨が出土した。副葬品や外部施設等は存在していなかったが，土取り崩壊土から破壊された甕棺片と人骨が出土した。

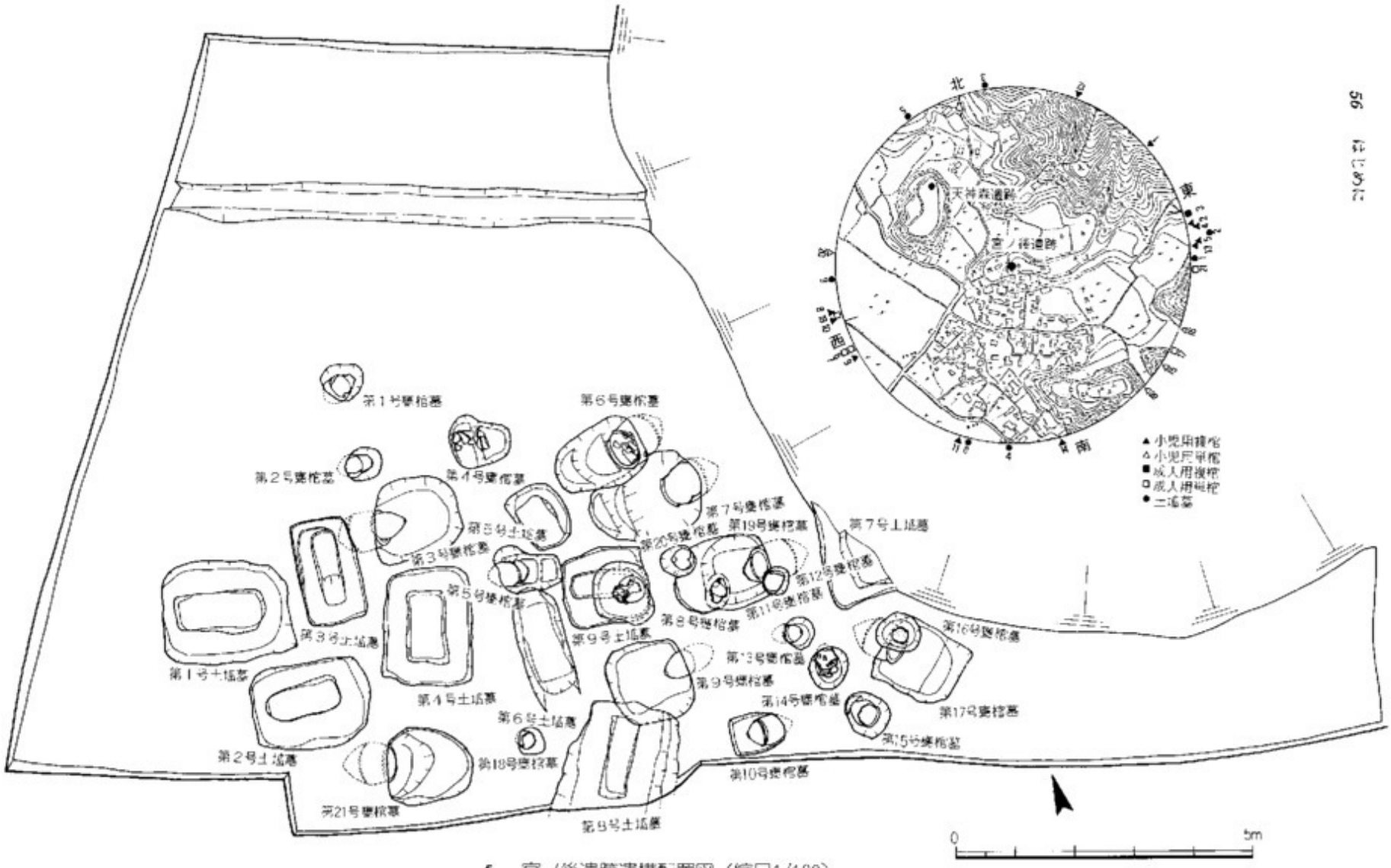
1　宮ノ後遺跡遠景（東から）

2　宮ノ後遺跡発掘前（東から）

3　宮ノ後遺跡発掘前（西から）



4　宮ノ後遺跡周辺地形図（縮尺1/400）



5　宮ノ後遺跡遺構配置図（縮尺1/100）

II 遺　構

1．甕棺墓

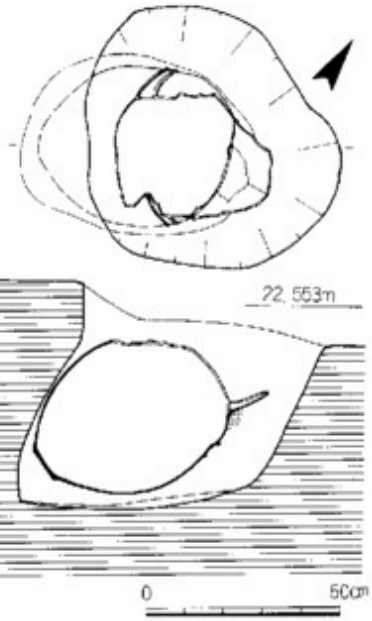
検出した甕棺墓の総数は21基で，検出順に第1号から第21号までの番号を付した。21基のうち大型甕を用いたものは6基で，小児用甕棺が多数を占めている。人骨を多数出土した金隈遺跡も近いことから人骨の検出には最大の注意をはらった。

6　宮ノ後遺跡発掘風景

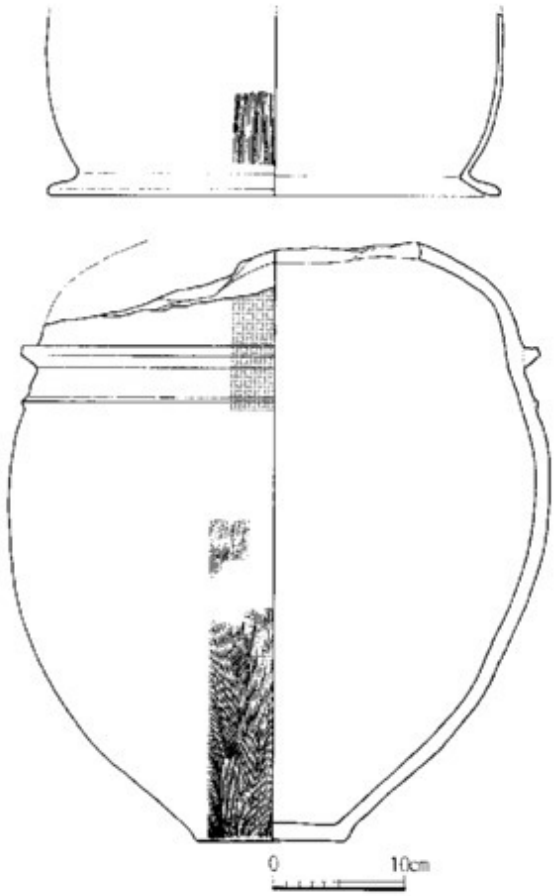
7　宮ノ後遺跡全景

第１号甕棺墓（８・10）

第１号甕棺墓は発掘区のもっとも北側に位置している。下棺に壺，上棺に小型甕を用いた複棺で，上棺の破壊状況から墓坑は20cm以上削平されているものと思われる。したがって墓坑上面プランは当初の形とは異にするであろうが現状は不整円形で径約65cmを測る。坑底はほぼ平坦で深さは約60cmある。下棺の壺は頸部より上部が打欠かれており，ここに上棺の甕口縁部を合わせる覆口式となっている。埋置傾斜は31度で覆口部にはわずかながら灰白色粘土が見られ目貼りをしている。２つの棺の復原全長が85cmであることから小児用甕棺墓であろう。



8　第１号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

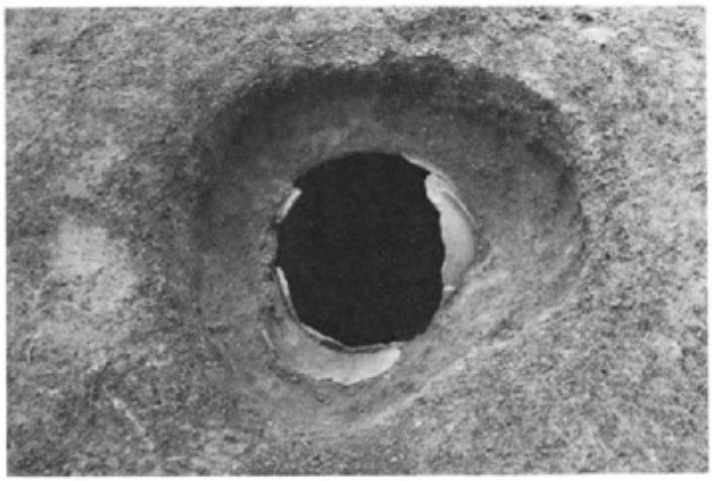


9　第１号甕棺実測図（縮尺1/6）

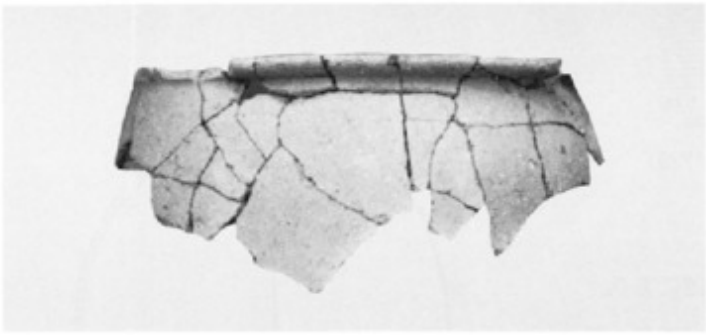
土　器（９・11）

下棺に用いられている壺は，頸部より上部を埋葬時に打欠かれているが，いわゆる弧形の壺となるものと思われる。胴上部には２条の突帯があり，下段の突帯は断面三角形，上段の突帯はやや上向きの断面台形を呈し鍔状となっている。胴中位より底部にかけてはハケ目調整で突帯部は横ナデしている。胴部最大径は41.2cm，現存器高は45.6cm，底部は平底で11.2cmある。外面の突帯部までは丹塗り痕が認められる。胎土には若干砂粒をまじえているが密といえる。内外面ともに茶色で，底部近くに黒斑が見られる。上棺は「く」字形口縁を持つ甕で，胴部下半を削平されている。口径は31.6cm，胎土には小

砂粒が多く混入されている。焼成はよく，内外面ともに明茶色を呈する。口縁部は横ナデされ内面屈曲部には，にぶい稜がつく。胴部の最大径は中位よりやや上にあり口径とほぼ一致している。胴部外面は縦のハケ目調整である。

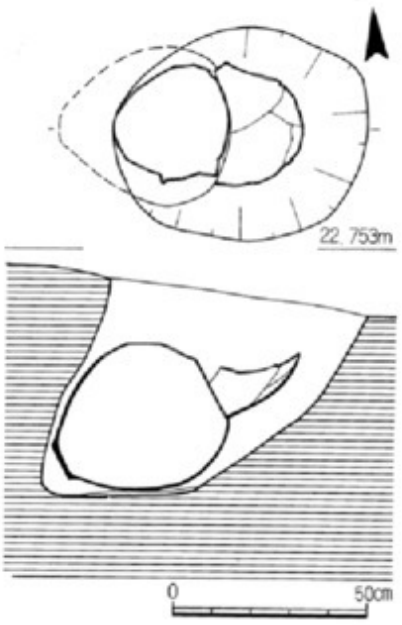


▶10　第１号甕棺墓

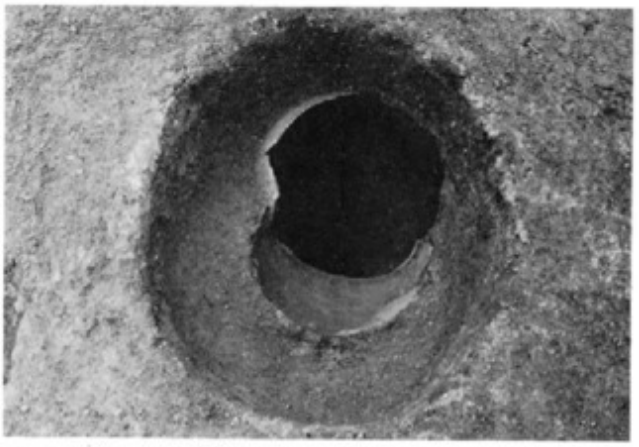


◀11　第１号甕棺（縮尺1/5）

※甕棺の写真の縮尺は大型甕を1/10とし，その他はすべて1/5に統一した。



12　第２号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



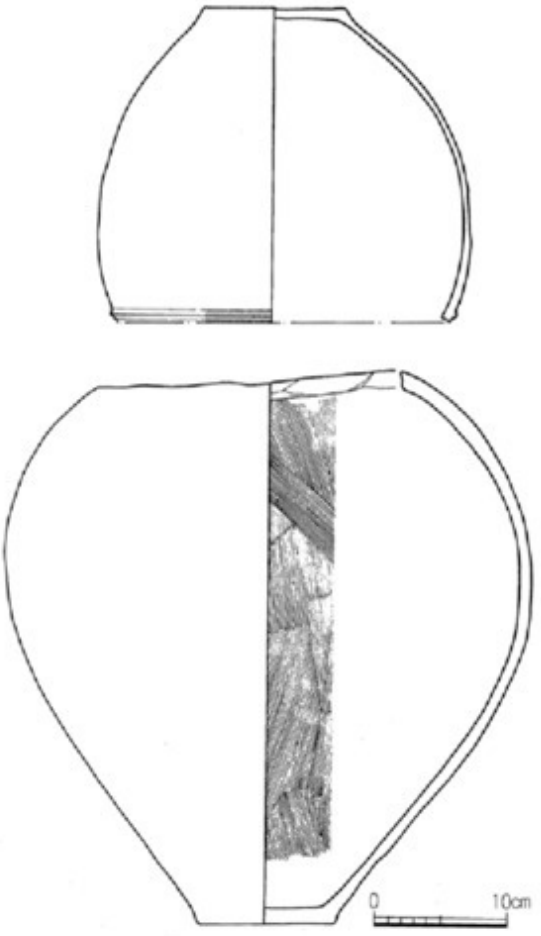
13　第２号甕棺墓

第２号甕棺墓（12・13）

第１号甕棺墓の南約１ｍの位置にあり，墓坑は同じように西側に向かって掘りこまれている。墓坑の上面プランは65cm×55cmの楕円形で深さは55cmである。下棺は頸部を打欠いた壺，上棺も頸部を打欠いた壺を組み合わせた複棺で，互いに口縁部はないが接口式と言えよう。合わせ部には粘土の目貼りは見られなかった。坑底はほぼ平坦で埋置傾斜は29度である。主軸はN－95°－Eで，頭位は東側を向いている。

土　器（14・15）

上，下棺ともに前述したように頸部から上半部が打欠かれた壺である。上棺の壺は底径10.4cmの平底から最大径を中位に持つ丸みのある胴部がつく。頸部には断面三角形の小さな突帯がめぐっており，現状では１条のみである。器形は第１号甕棺下棺の

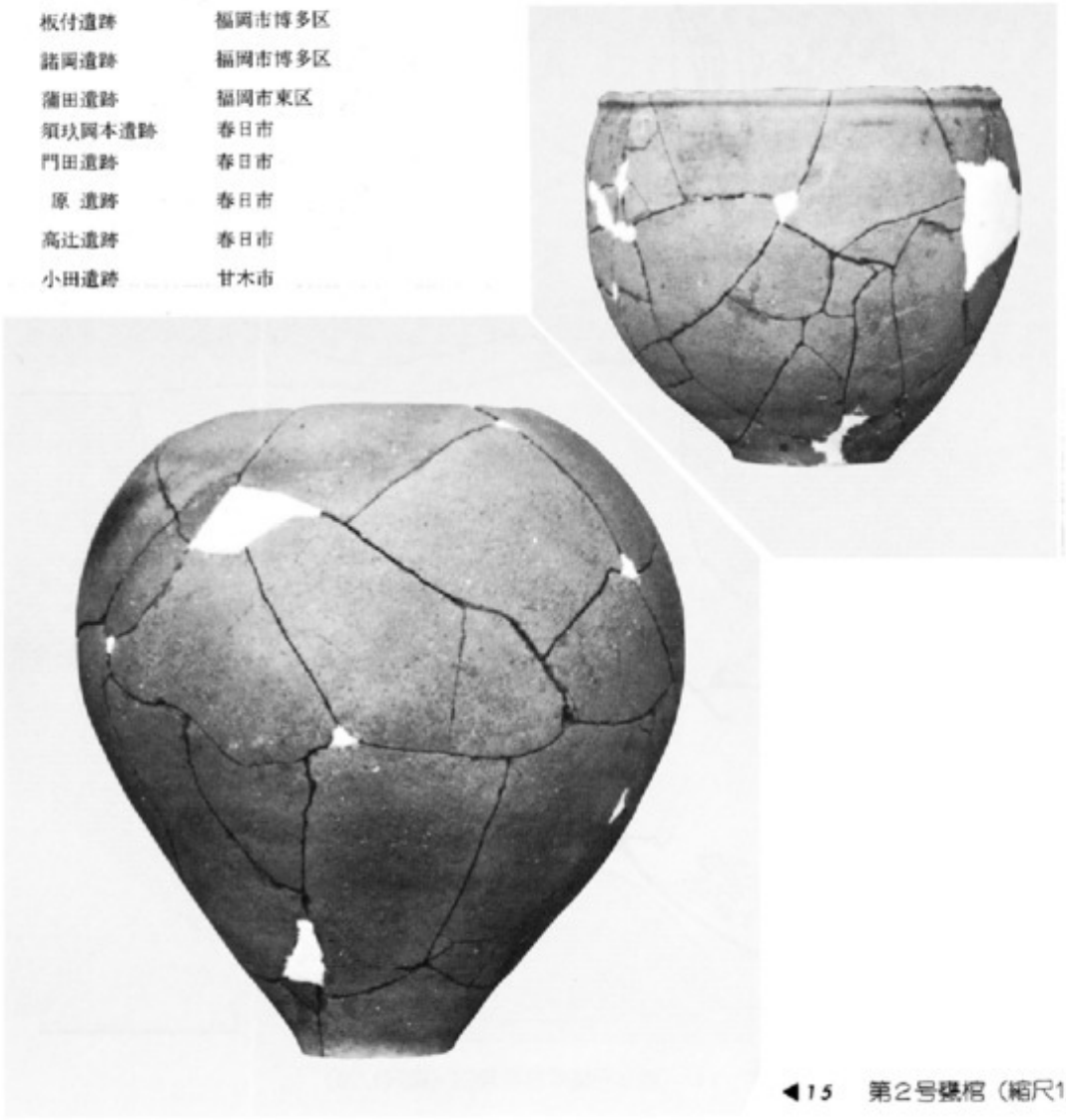


14　第２号甕棺実測図（縮尺1/6）

ように，三角形突帯上に鍔状の突帯をめぐらす甕形の土器となるものと思われる。胎土は砂粒少なく密で精良である。突帯部は横ナデ，胴部は縦のナデ，内面は丁寧なナデ調整である。突帯部には丹が塗付されている。現状の器高は24.7cmである。下甕は平底の底部に倒卵形の胴部がつく壺である。口縁部は広口になるのであろう。胎土には小砂粒が入っているが密，焼成はよい。色調は内外面ともに茶色を呈している。調整は胴部外面が板ナデで，内面は底部近くまで粗いハケ目で下から上へ施されている。底径は10.2cm，胴部最大径は40cmで，現状の器高は42.3cmを測る。丹塗りの痕跡は認められない。第２号甕棺の下甕と同じ器形は第20号甕棺にも用いられている。

甕形土器出土主要遺跡

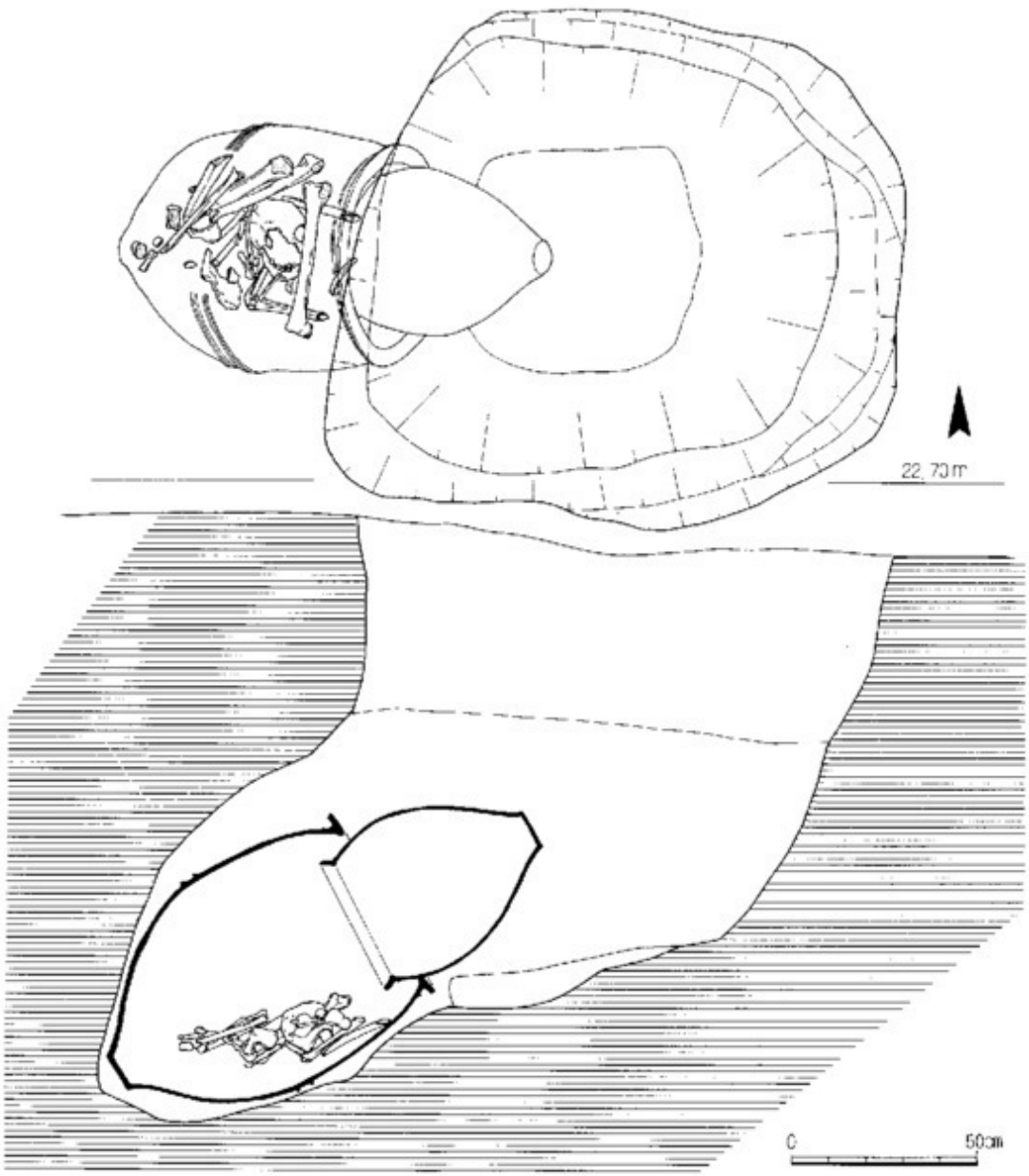
席田久保園遺跡	福岡市博多区
板付遺跡	福岡市博多区
諸岡遺跡	福岡市博多区
蒲田遺跡	福岡市東区
須玖岡本遺跡	春日市
門田遺跡	春日市
原 遺跡	春日市
高辻遺跡	春日市
小田遺跡	甘木市



◀15　第２号甕棺（縮尺1/5）

第３号甕棺墓

第３号甕棺は大型の甕を下棺に用いた挿入式の甕棺で，本遺跡の甕棺墓ではもっとも西側の高い所に位置している。墓坑の上面プランは隅丸長方形で150cm×135cmを測る。さらに深さ130cmで西に向かって下棺の甕の形よりやや大きめの斜坑が掘りこまれている。主軸はＮ－92°－Ｅ，埋置傾斜は31度である。主軸方位は両隣りの第２号，４号甕棺墓と大差がない。上棺は



16　第３号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

17　第3号甕棺墓

中型の甕が用いられており，胴部が下棺の口縁部に接するように挿入されている。挿入部には粘土の目貼りはされていない。下棺からはずれ込んだ状態で人骨が検出された。人骨の埋葬姿勢は仰臥屈葬で，熟年40才代の男性と推定されている。

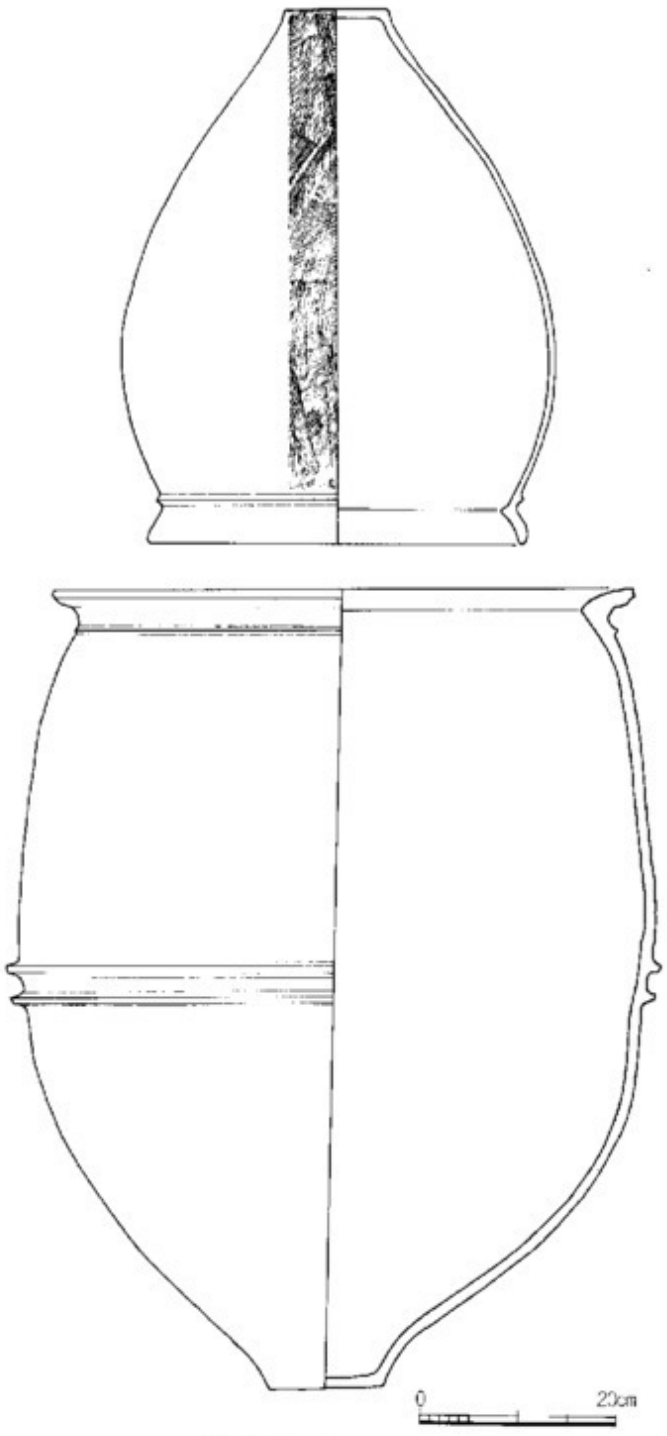
土　器（18・19）

上棺は器高55cmの中型の甕である。底径10.2cmの平底に最大径を中位よりやや上に持つ倒卵形の胴部がつく。口縁部は「く」字形で，やや内湾ぎみにのび口縁端は丸くおさめている。屈曲部外面には断面三角形の突帯をめぐらしており，内面は小さく突出し，稜を持っている。焼成は良好で，内外面ともに茶色を呈している。口縁部は横ナデ調整，胴部外面は細かいハケ目調整，内面はナデ調整である。胴部最大径部に黒斑があり，胴部外面には煤が付着している。口径は38.8cmを測る。

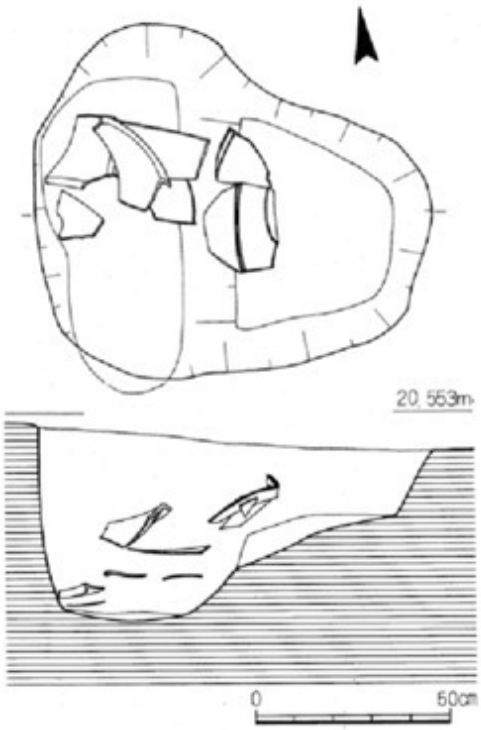
下棺は内傾する逆「L」字形の口縁を

▼18　第3号甕棺（縮尺1/10）

持つ大型の甕である。口径は60cm，器高82.3cm，底径11.6cmを測る。胴部は平底の底部から胴部中位よりやや下にめぐらせた２条の突帯まで大きく開きながらのび，突帯より上部は直立し，口縁部近くで湾曲しながら内傾し逆「L」字形の口縁部がついている。口縁外端部はわずかに窪み，その下方は肥厚し段を持っている。胴部の突帯は上向きの断面台形，口縁下の突帯は断面三角形である。口縁部と底部との中心を結ぶ中心線は垂直ではなく，また胴下半部のつくりもいびつである。焼成はよく，内外面ともに明茶色を呈する。調整は，口縁部と突帯部が横ナデ，口縁部突帯から胴部突帯までがナデ，胴部突帯部から底部へかけては，縦のナデと細かいハケ目である。胴部突帯部から底部近くまでかなり大きな黒斑が見られる。



19　第３号甕棺実測図（縮尺1/8）



20　第４号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

第４号甕棺墓（20・21）

第２号甕棺墓の東側約 1.5ｍの位置にある。墓壙は不整円形の上面プランで90cm×100cmある。二段掘りとなっており西側の深いところで上面からの深さは約50cmである。墓壙内には10点の土器片が見られた。これらの土器片は口縁部と胴部の破片で，３個体の甕である。上部を削平されたのか底部は墓壙内に見出すことはできなかった。このように土器の出土状態からすれば３個の土器は遺体を入れる棺として用いられたかは疑問と思われ，むしろ遺体にかぶせた蓋かあるいは墓域に対する祭祀遺構などの性格を考えるべきかもしれない。いずれにしてもここでは甕棺墓と認定して取りあげた。

土　器（22・23）

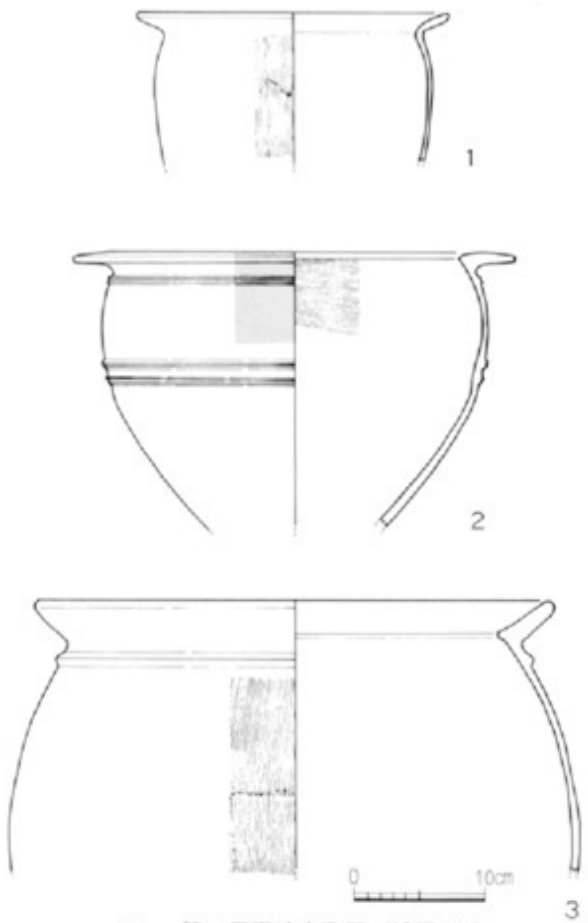
１は墓壙の中位ほどで出土したもので口縁部の小破片である。口縁部は「く」字形で屈曲部内面は丸みがある。胴部の最大径は頸部近くにあり，底部へすぼまりながらのびている。焼成はよく，内外面ともに明茶色を呈する。口縁部は横ナデ，胴部外面は細かい縦のハケ目調整である。口径は24cmを測る。

２は逆「Ｌ」字形口縁を持つ小型の甕である。口縁部上面はほぼ平坦となっており，口縁外端部はわずかながら窪み口唇状の形態に近い。突

21　第４号甕棺墓

帯は口縁下に1条，胴部最大部よりやや下に2条めぐらされており，断面は口唇状をなしている。2条の突帯部から底部へは急にすぼまりながら続いている。胎土にはきめ細かい粘土が用いられており，焼成はよい。調整は口縁部が横ナデ，内面は細かい横のハケ目を口縁部から約11cmのところまで施している。口縁部上面から胴部外面は丹が塗付されている。口径は32.8cmである。

3は「く」字形口縁を持つ甕で，他の2個の甕に比べてもっとも大きい。口縁部は胴部の厚さの2倍ほどあり肥厚している。口縁下に断面三角形の突帯が1条めぐっている。胴部下半から底部を欠いているが倒卵形に近い胴部となるのであろう。色調は茶色を呈し，焼成はよい。口縁部は横ナデ調整，内面は右上がりのナデ調整，胴部外面は粗いハケ目調整である。口径は39.8cmである。



22　第4号甕棺実測図（縮尺1/6）

▶ 23　第4号甕棺（縮尺1/5）

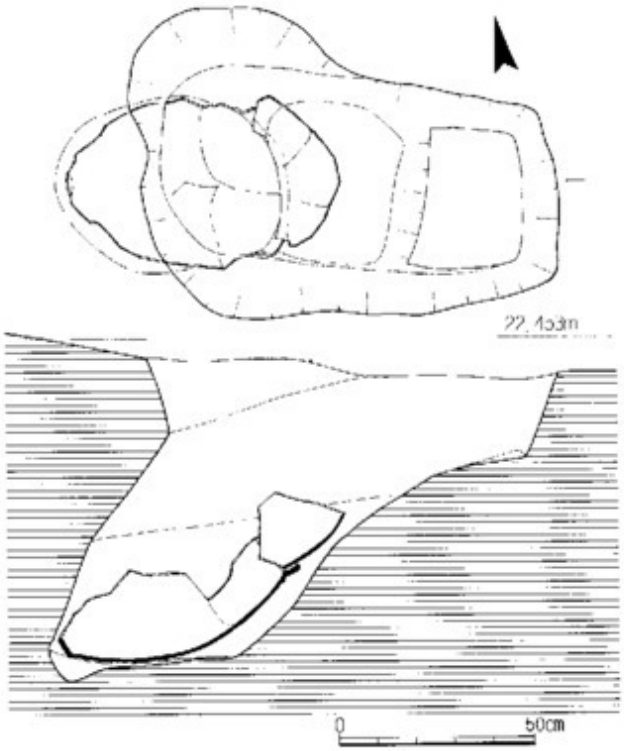
第５号甕棺墓（24・26）

第５号甕棺墓は四方を第４，５，６，９号土壙墓にとり囲まれている。墓壙は隅丸長方形で107cm×60cmの上面プランをなす。深さは25cmで，西側はさらに斜めに掘りこまれており２つの甕は36度の角度で埋置されている。下棺は器高53cmの中型甕が用いられ，上棺は胴部より上部を打欠いた土器が挿入されている。上棺は小破片となっているために全形を知りえないが，現存する破片は胎土が精良で器壁もうすいことなどから壺と推測される。上棺は茶色を呈し，調整はナデである。主軸はN－101°－Eで，第５号甕棺墓の墓壙は，第６号土壙墓を切っている。

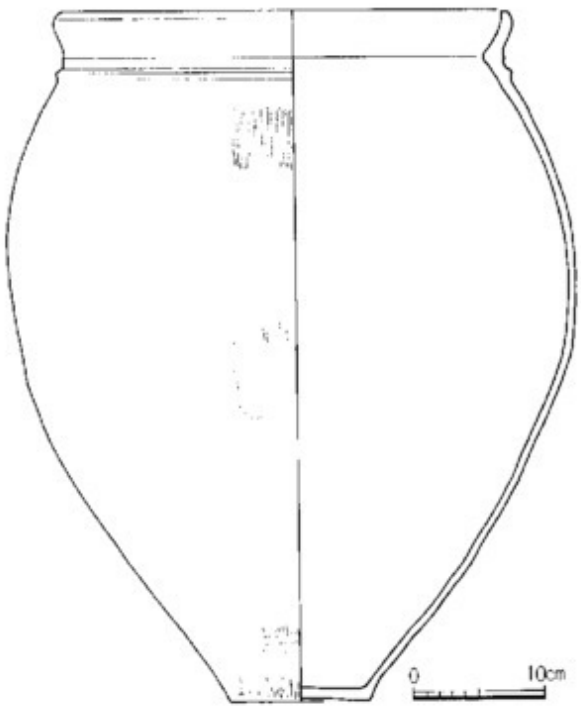
土　器（25・27）

上棺は小破片のため図化できなかったが前述したように壺の可能性があり，口径35.2cmの下棺に挿入されていることから，第10号甕棺と同じような器形が考えられる。ただ現存部の土器カーブからすれば倒卵形のやや長い胴部が推測される。

下棺は「く」字形口縁の中型甕である。屈曲部内面は，丸みがありにぶい稜をなす。内湾しながらのびる口縁部は屈曲が弱く直立ぎみである。胴部の最大径は46.3cm



24　第５号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



25　第５号甕棺実測図（縮尺1/6）

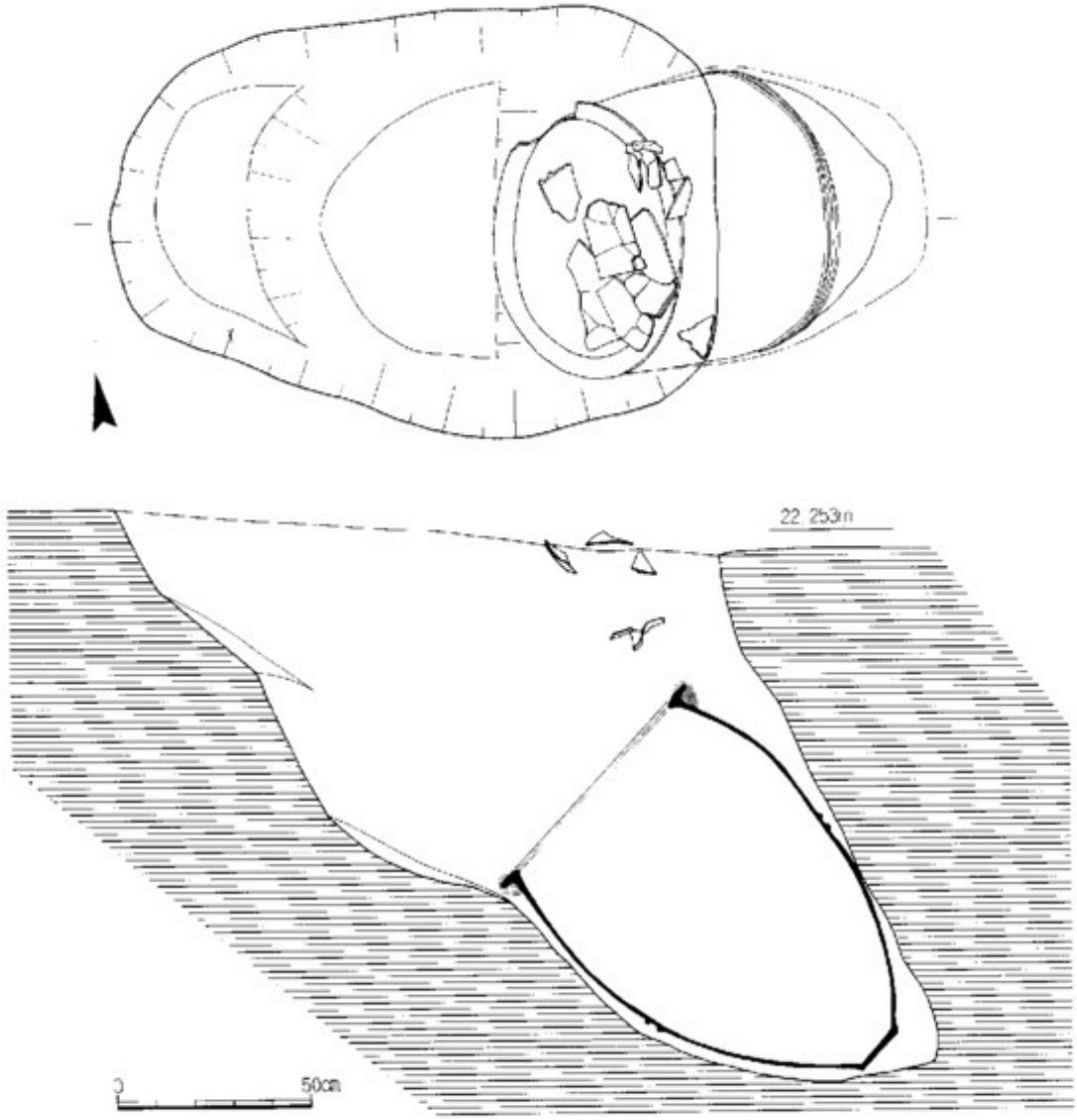
26　第５号甕棺墓

で口径より大きい。色調は濃茶色で，胎土には小砂粒が多く混入している。器面の調整は口縁部が横ナデ，胴部は縦の粗いハケ目で，内面はナデである。胴部から頸部にかけて黒斑があり，胴部には煤が付着しているのが観察される。

▼27　第５号甕棺（縮尺1/5）

第6号甕棺墓（28・29）

大型の甕を用いた単棺の甕棺墓である。墓坑は150cm×110cmの長楕円形の上面プランで，さらに東に向かって斜めに掘りこまれている。坑底は第3号甕棺墓の墓坑のように方形の竪穴を掘った後に甕棺を埋置するための斜坑を掘りこむというのではなく，最初から斜めに階段状に掘りこんでいる。口縁部には灰白色粘土があり，木蓋などの蓋がしてあったものと思われる。大型甕の口縁部の上部付近に土器片が出土した。これらの土器片は2個体の甕と壺1個で，直接第6号甕棺墓と関連するかは明らかでない。墓坑は第7号甕棺墓の墓坑を切っており，第6号甕棺墓の埋置が後である。



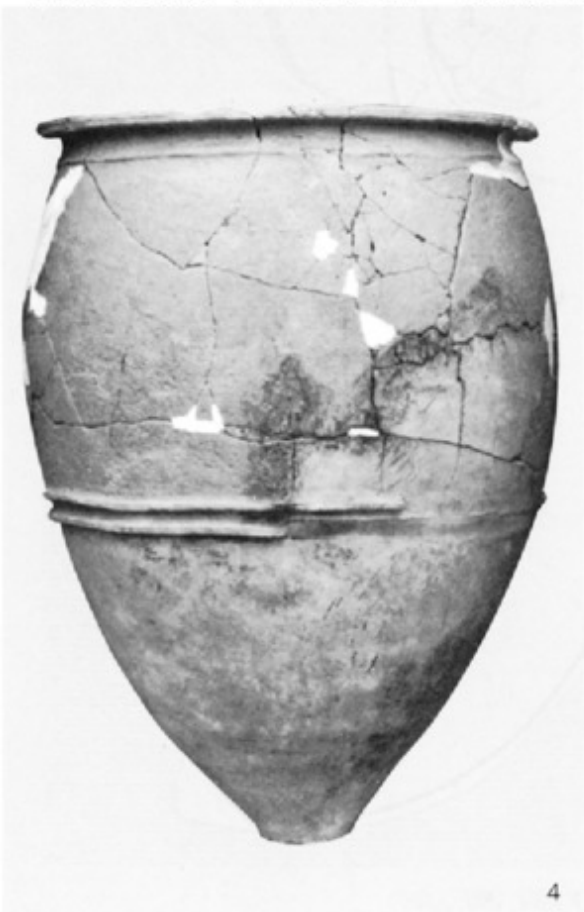
28　第6号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

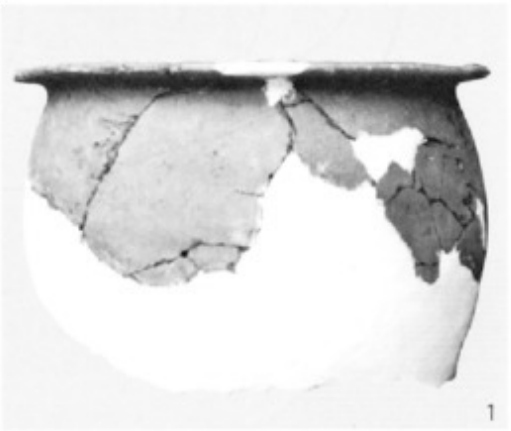
土　器（30・31）

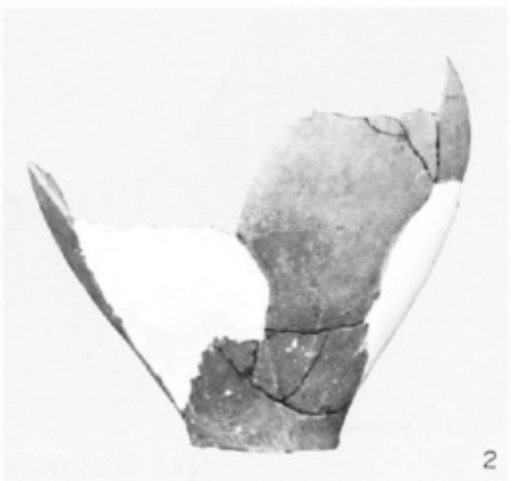
1～3は埋土中から出土したものである。1と2は小型甕で別個体である。4は口径69cm，器高 101cm，底径12.6cmの大型甕である。形態は砲弾形に近いが，第7号甕棺墓に比べ口縁部の内傾が大きい。したがって胴部にやや張りが見られる。断面台形の2条の突帯は胴部中位よりやや下方にめぐらされている。つくりは中心線がずれいびつである。

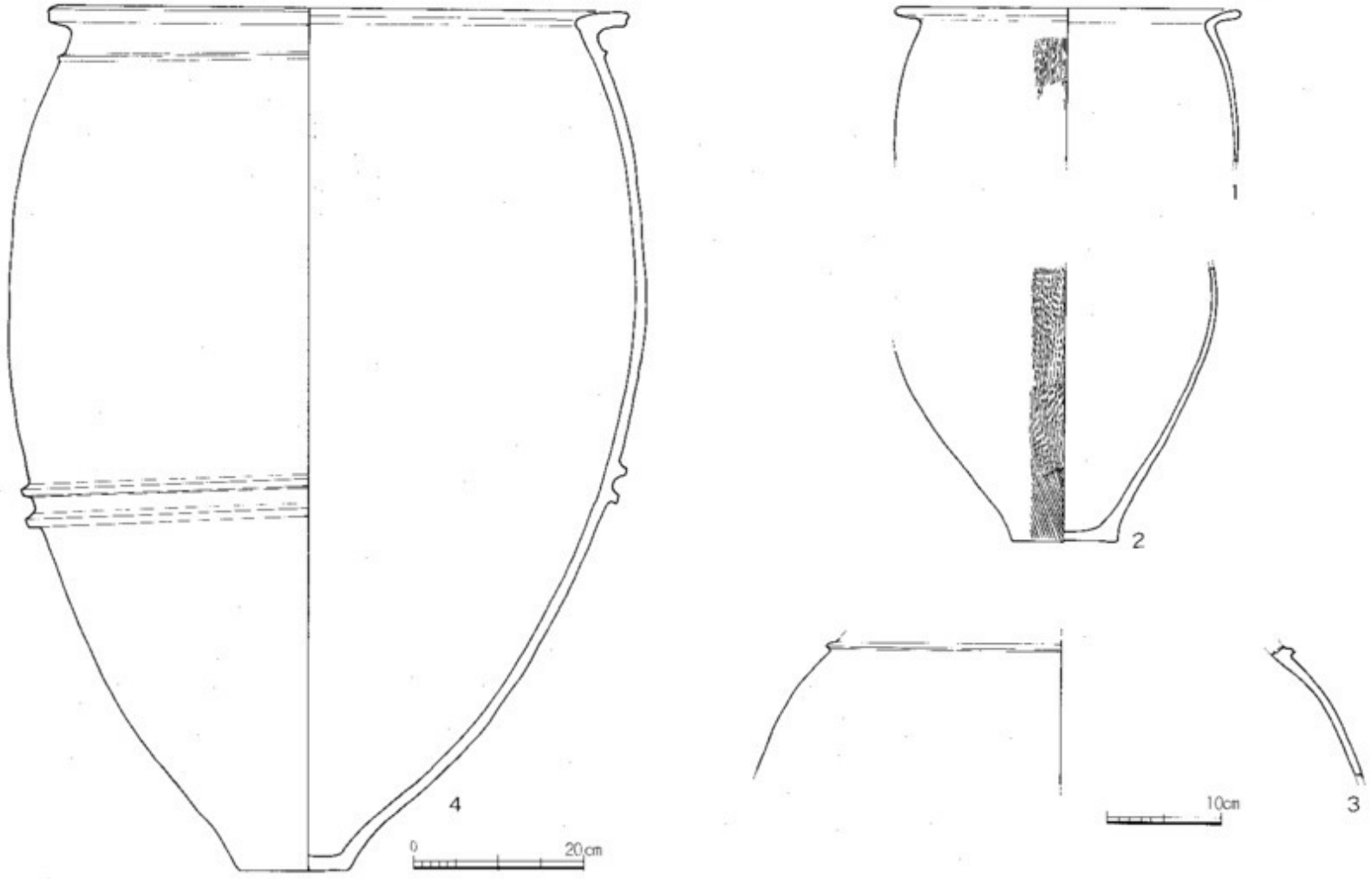
29　第6号甕棺墓

▼30　第6号甕棺（1・2は縮尺1/5　4は縮尺1/10）





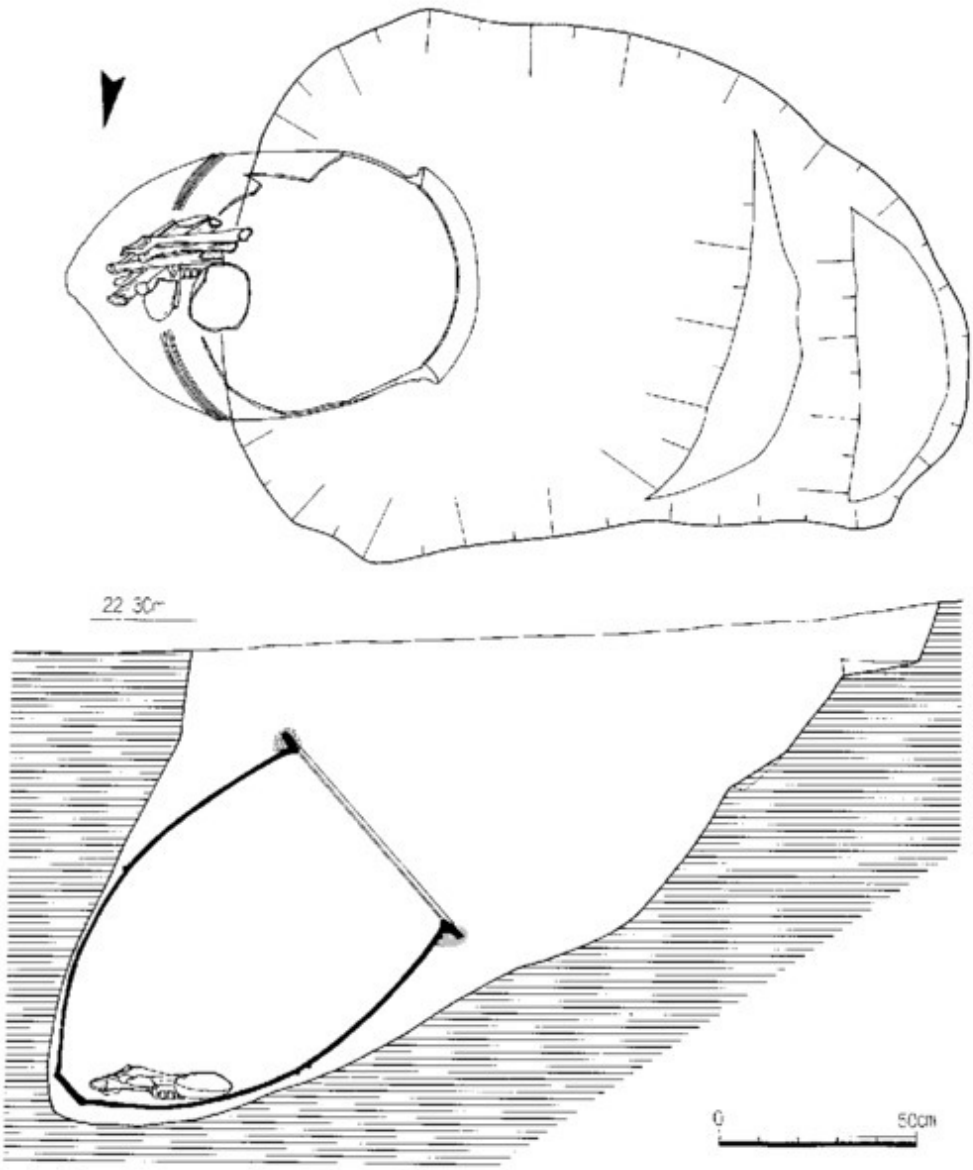




31　第6号甕棺実測図（1～3は縮尺1/6　4は縮尺1/8）

第7号甕棺墓（32・33）

第7号甕棺墓は第6，19号甕棺墓の間にあり，墓壙の一部を第6号甕棺墓から切られている。墓壙は190cm×140cmの不整長楕円形。第6号甕棺墓と同じように東側に向かって階段状に掘られ，甕棺を埋置している。棺は大型甕が用いられており，埋置傾斜は41度である。主軸方位はN－99°Wで第6号甕棺墓と共通している。口縁部には，現在蓋は見られないが，灰白色粘土が認められ本来は木蓋などの蓋があったものであろう。底部付近に保存のよくない人骨がまとまって出土した。この人骨は，男性の成人骨と推定されている。



32　第7号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

▶33　第７号甕棺墓

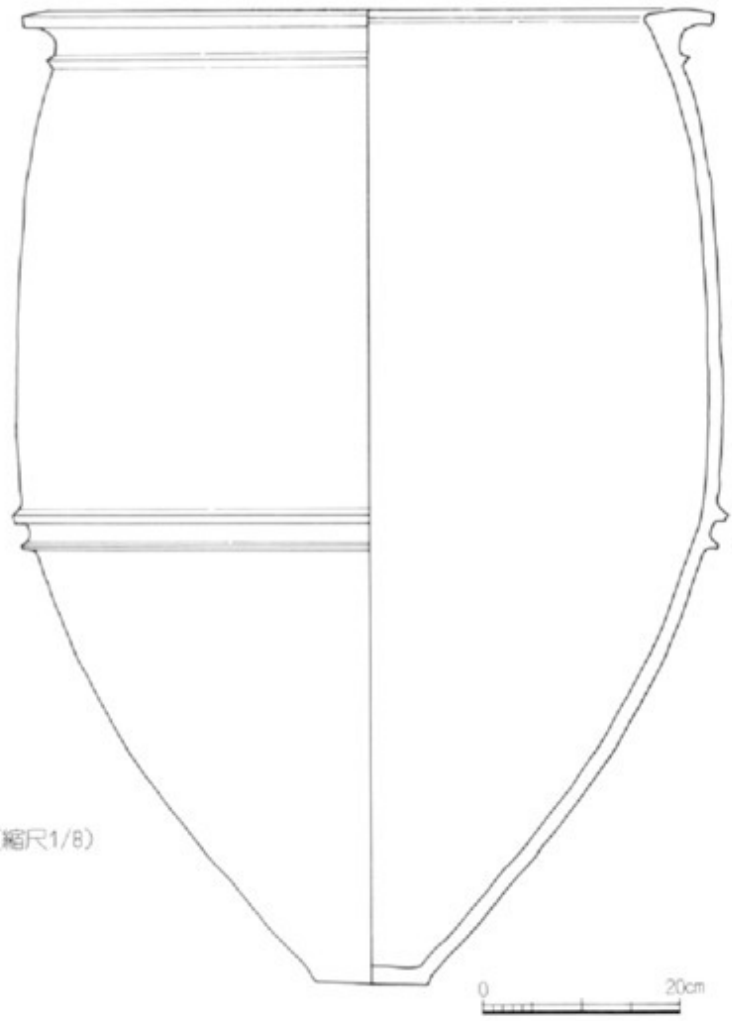
▼34　第７号甕棺（縮尺1/10）

土　器（34・35）

墓坑の切り合いから第６号甕棺墓より古い時期に埋置されていることがわかるが，棺として用いられている甕の型式にも矛盾がないようである。第７号甕棺墓の大型甕は口径70.6cm，器高99.8cm，底径11.4cmで法量はほとんど差がない。しかし形態は，第６号甕棺が胴部に張りがあったのに対し，第７号甕棺は，胴部突帯上半部が直立ぎみにのび，口縁部近くでわずかに内傾し，逆「L」字形の口縁部へと続いている。口縁内端部の突出は明瞭であり，上端部もより平坦的で，「T」字形口縁の形状に近い特徴を持っている。

内外面の色調はやや赤みをおびた茶色で，焼成，胎土ともに良好

である。器面の調整は，口縁部と突帯部が横ナデで，胴部の内外面はナデ調整されている。胴部の２条の突帯は，胴部中位にあり，やや下向きに貼り付けられている。



▶ 35　第７号甕棺実測図（縮尺1/8）

第８号甕棺墓（36・37）

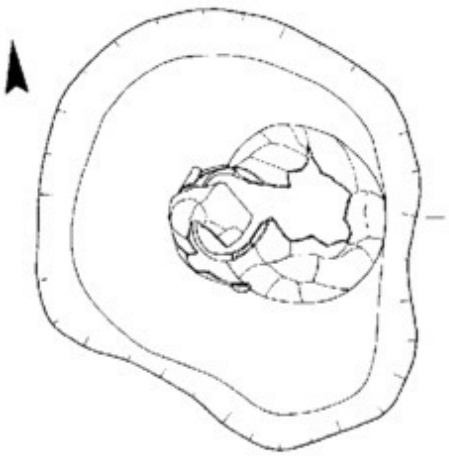
第８号甕棺墓は本遺跡の発掘区ではほぼ中央部から検出したものである。墓坑の上面プランは115cm×95cmの不整円形であるが，墓坑のレベルよりも棺の方が高く，墓坑はさらに深かったものと考えられる。棺は上棺が鉢，下棺に壺を用いた

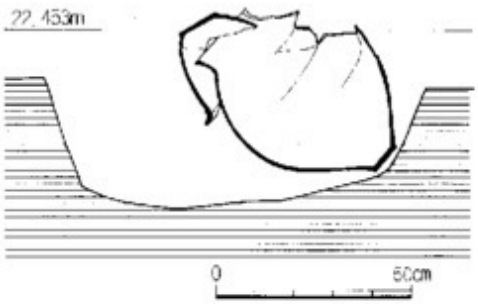
36　第８号甕棺墓

覆口式の複棺である。主軸方位はN－86°－Wで西向きの甕棺墓としては本遺跡ではもっとも西側に位置している。第８号甕棺墓墓壙の下より第９号土壙墓を検出した。

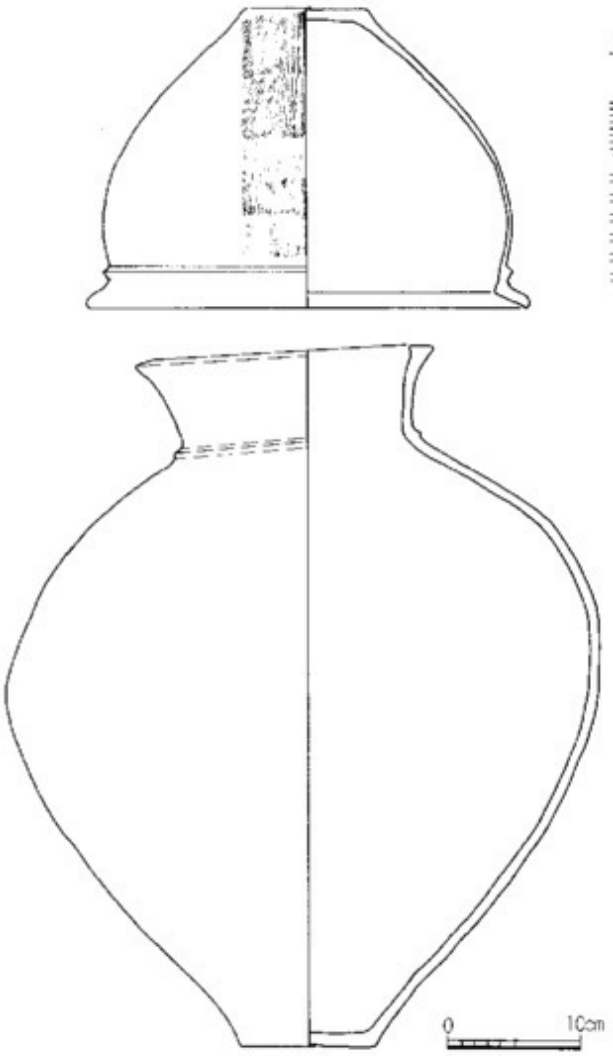
土　器（38・39）

上棺は「く」字形口縁を持つ鉢で，屈曲部外面には断面三角形の突帯を１条めぐらしている。口径は33.8cm，器高23cm，底径 9.6cmである。胎土は砂粒を多く含有している。内面は器面の剥離がはげしく↘





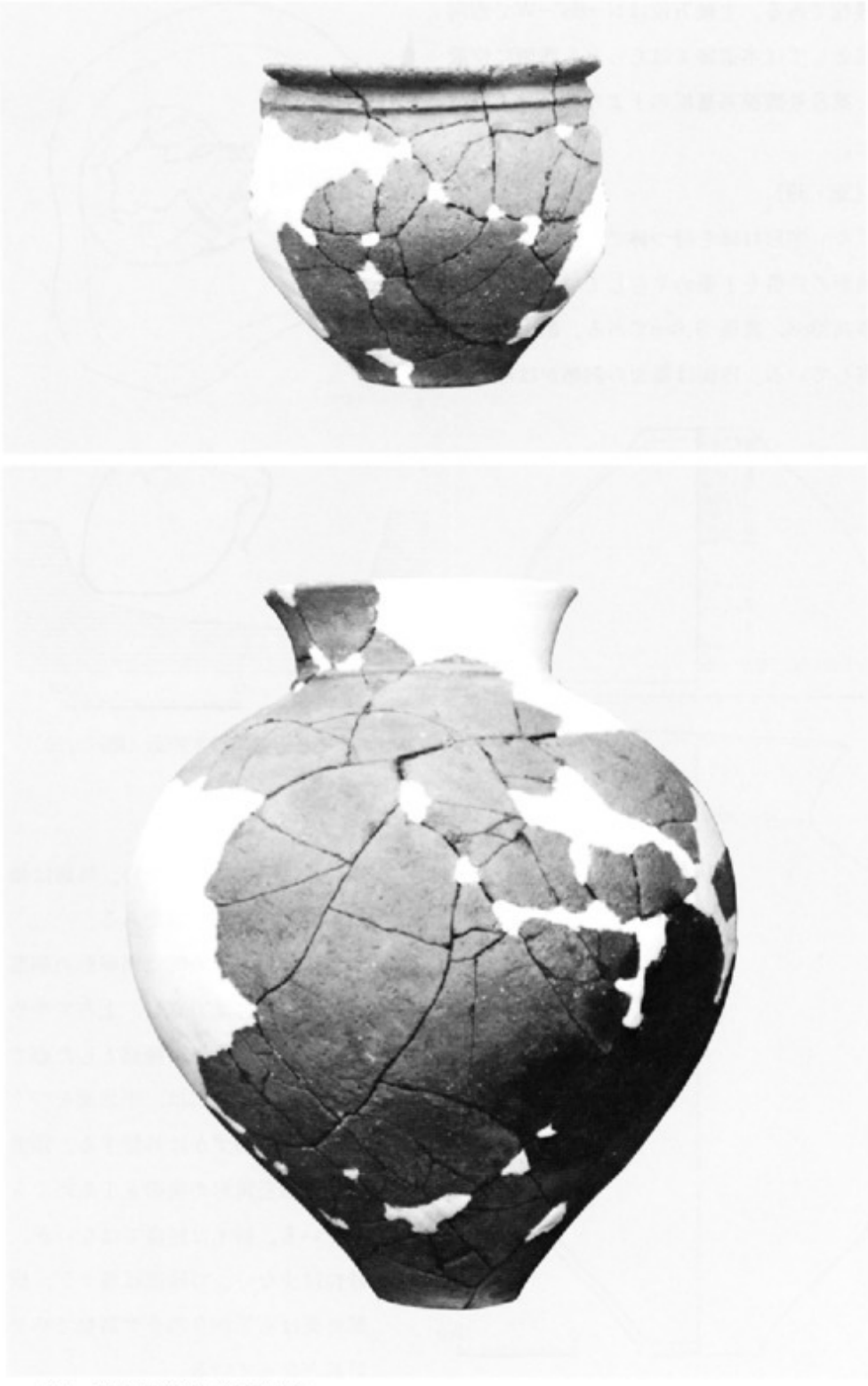
▲37　第８号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



38　第８号甕棺実測図（縮尺1/6）

↘調整法は明瞭にしえない。外面は細かい縦のハケ目調整である。

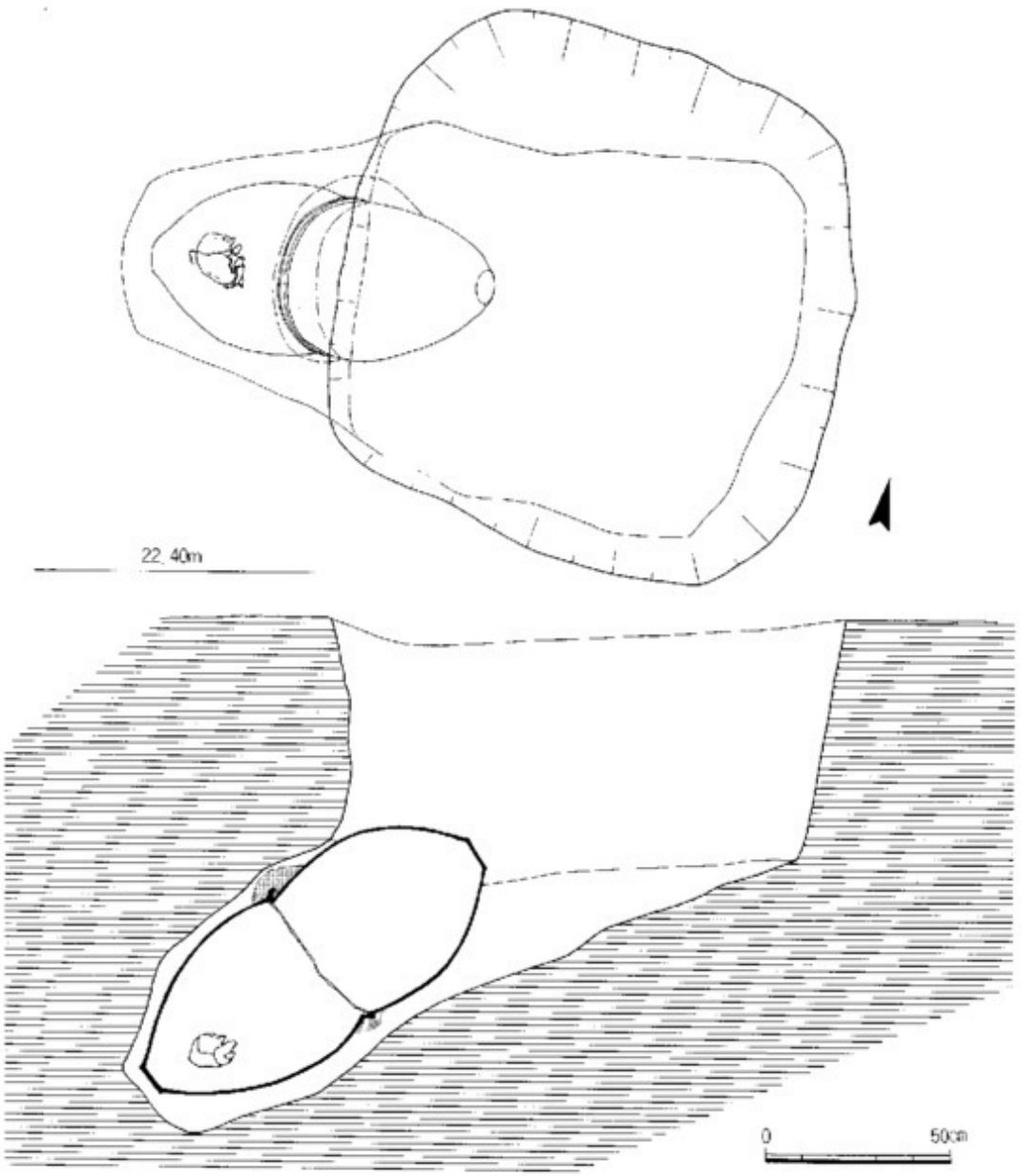
下棺は小さな底部に倒卵形の胴部がつき，頸部は直立し，上方でやや外に開きそのまま口縁部とした壺である。口縁上端部は，平坦面をつくっており，わずかに外傾する。頸部には断面三角形の突帯を１条めぐらしている。胎土は精良ではないが，砂粒は少ない。口縁部は横ナデ，胴部外面は右下がりのナデ調整でハケ目状となっている。



39　第８号甕棺（縮尺1/5）

第９号甕棺墓（40・43・44）

墓坑は136cm×140cmの隅丸方形で深さ65cmある。さらに坑底は東に向かって斜めに棺の大きさに掘りこまれている。主軸方位はN－102°－Wで，頭位を西側に置く。埋置傾斜は36度で本遺跡では平均的な角度である。棺は上，下棺とも中型甕が用いられている。この上，下棺の甕は口径がほとんど一致しているために，上棺の口縁部を¾打欠き，下棺との主軸を変えて口縁部の一部を入れこんでおり，挿入式の変形といえよう。口縁部の合わせ部には灰白色粘土が厚く



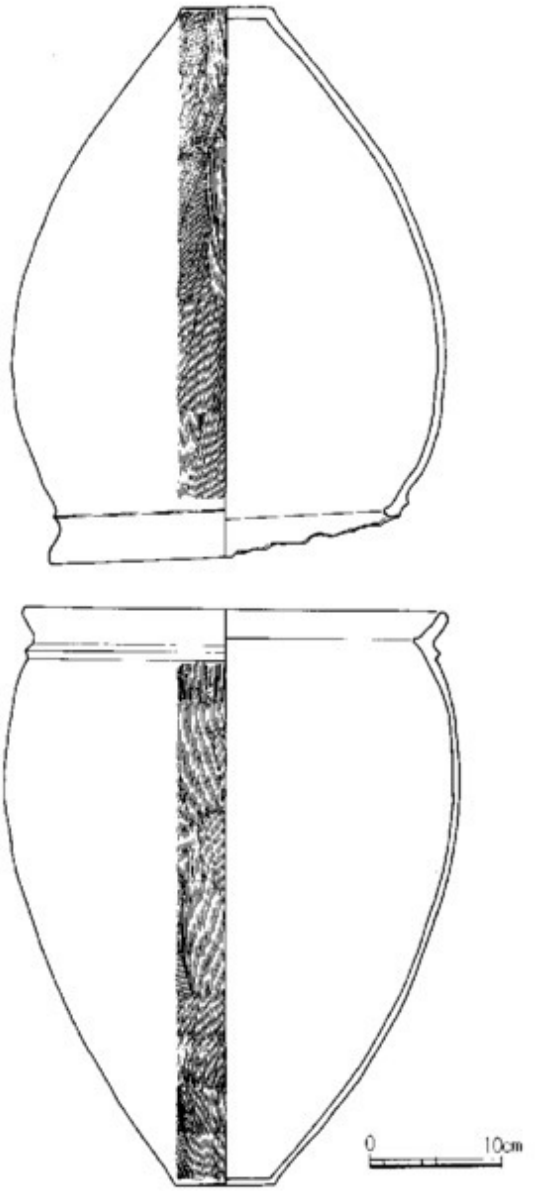
40　第９号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

目貼りされており，人骨の保存を助けている。人骨は下棺に頭蓋骨のみが検出され，4才ぐらいの幼児と推定されている。

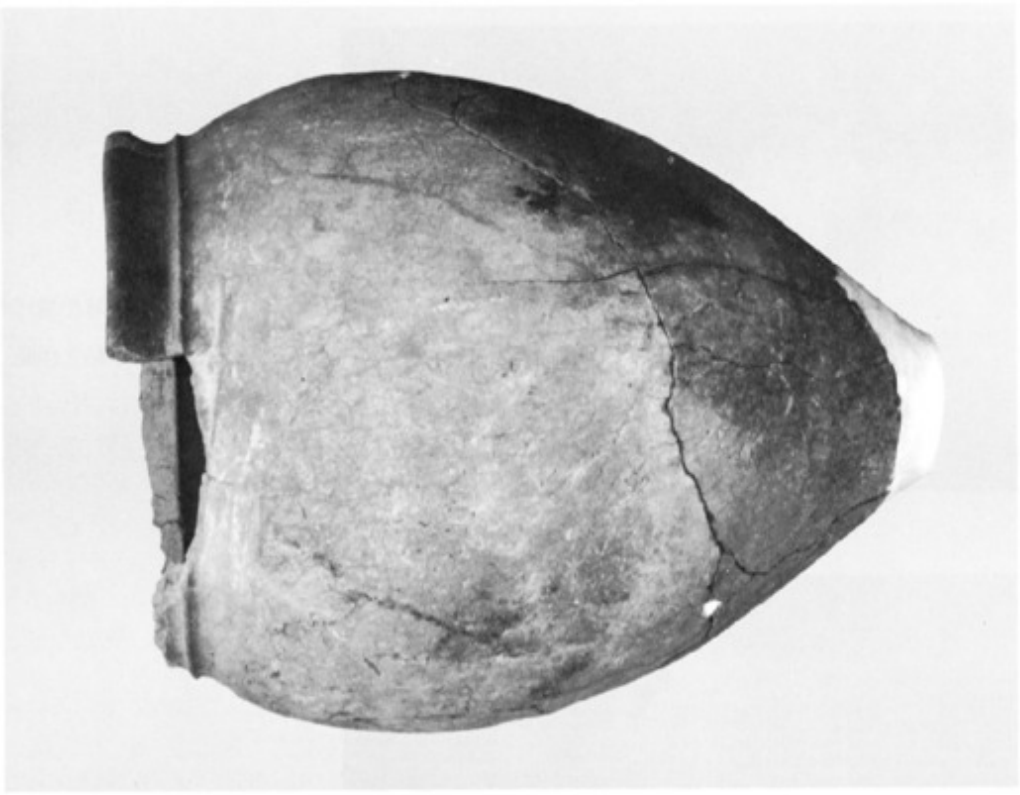
土　器（41・42）

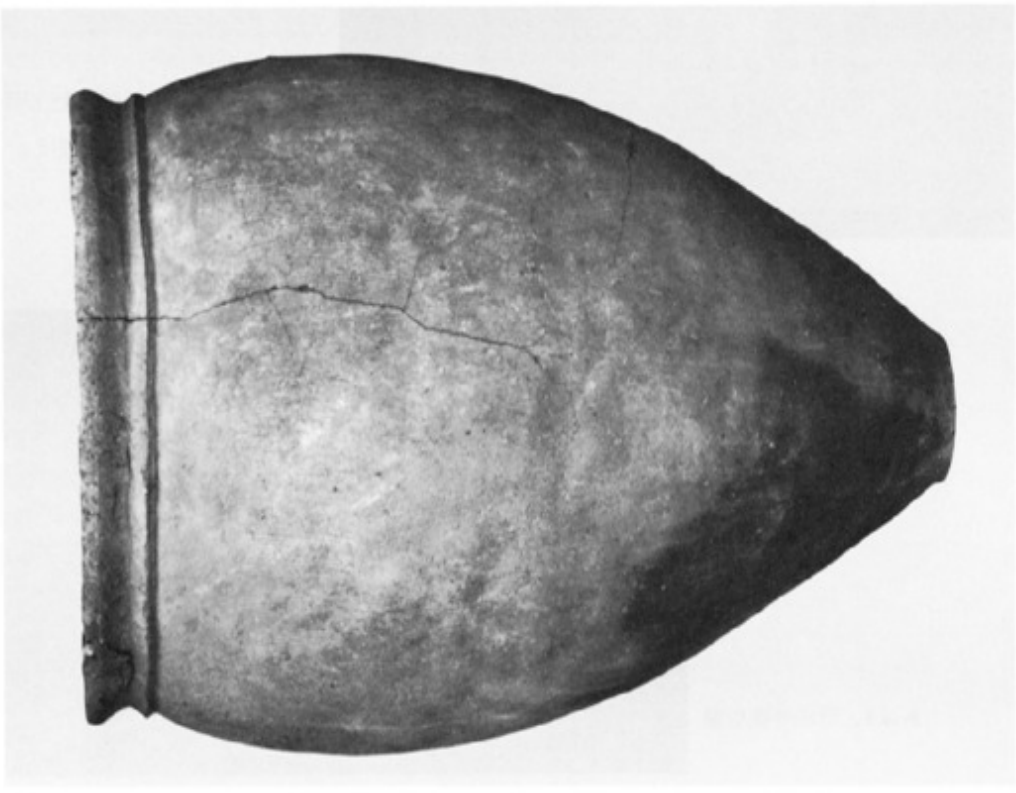
上棺は前述したように口縁部が打欠かれている。復原口径38cm，器高56cm，底径 9.6cmを測る。底部は平底で倒卵形の長めの胴部がのび「く」字形の口縁部がつく。屈曲部には小さな断面三角形の突帯が1条めぐらされており，内面への突出は顕著である。調整は口縁部が横ナデであるが，胴部の縦ハケ目後になされている。胴部最大部あたりには煤の付着が見られる。

下棺の法量は口径が42.5cm，底径は10cm，器高59cmで上棺とほぼ同じ大きさである。形態の特徴もほぼ共通しているが口縁部のつくりにやや違いがある。上，下棺ともに「く」字形口縁であるが，下棺の口縁部がより肥厚しており，屈曲部内面への突出がより顕著である。胎土は砂粒が多く，色調は茶色である。調整法も上棺と同じであるが，胴部外面のハケ目は底部から上20cmまでを細かいハケ目，さらに屈曲部から下に7cmまでを粗いハケ目後に横ナデ，これらの中間部は粗いハケ目と三段に使いわけている。また胴部のハケ目は左から右の方に順につけられている。胴部下半分には黒斑が見られる。



41　第9号甕棺実測図（縮尺1/6）



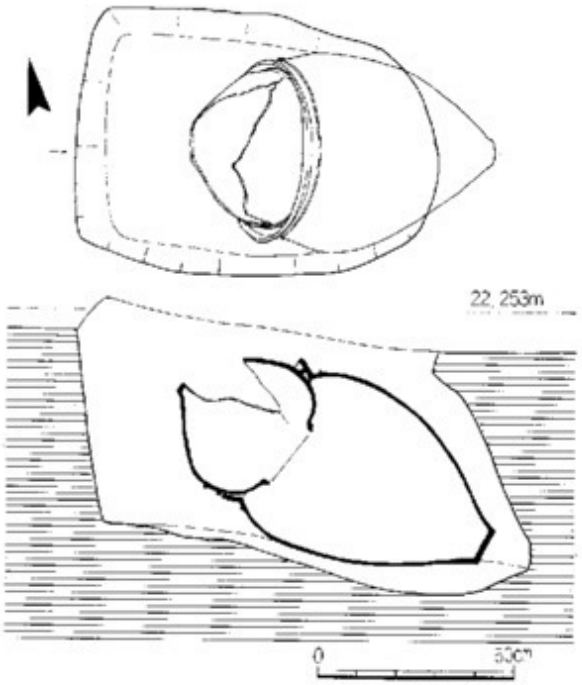


42　第９号甕棺（縮尺1/5）

◀43　第9号甕棺墓の墓壙を東西に切り，埋置法と粘土目貼りの状況をみる。

◀44　口縁接合部の粘土目貼りを取りのぞいた状況である。挿入された状況がわかる。

▶45　第10号甕棺墓



46　第10号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

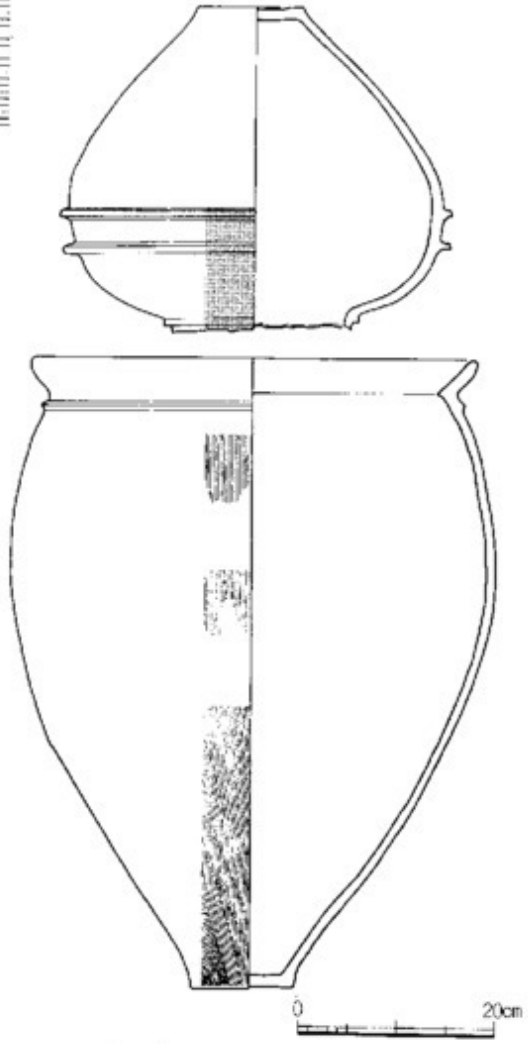
差しこんでおり挿入式である。巧みに組み合わされていたために棺内に土の流れこみはなかったが，人骨，副葬品などは見られなかった。

土　器（47・48）

上棺は頸部より上部が打欠かれているが現存高は33.2cm，底径10.6cmを測る。頸部より上部は，大きく外に開き，広口の口縁部がつく器形であろう。胴部の最大径はやや上位にあり，ここに断面台形の突帯が2条，さらに頸部にも断面三角形の突帯が1条めぐらされている。器壁は3cmと厚めでたしかなつくりをなす。胎土，焼成ともに良好で，内外面ともに茶色の色調を呈している。頸部より胴部の突帯までは丹が塗付されている。

第10号甕棺墓（45・46）

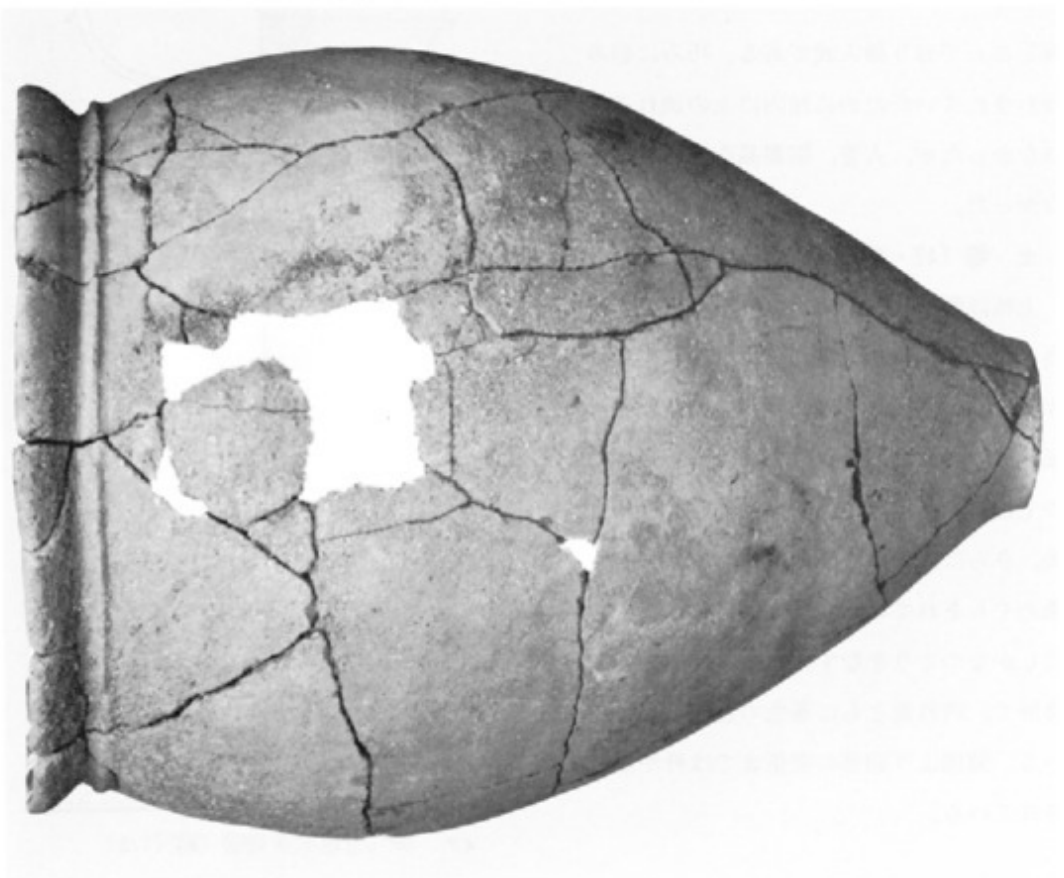
第10号甕棺墓は発掘区の南端で検出されたものである。墓坑上面プランは92cm×62cmの隅丸長方形を呈する。まず垂直に掘り，坑底のレベルをあまり変えることなく東側に斜坑が掘りこまれているので棺の埋置傾斜は28度と水平に近くなっている。棺は複棺で上棺は頸部より上部を打欠いた壺，下棺は中型甕が用いられている。上棺は胴部の突帯部まで下棺に



47　第10号甕棺実測図（縮尺1/8）

下棺は中型の甕で口径45.6cm，器高64.8cm，底径10.4cmを測る。肥厚した口縁部は「く」字形で，屈曲部内面の突出部は丸みがある。内外面ともに茶色を呈し，胎土には小砂粒が多く見られる。調整は口縁部が横ナデ，胴部外面は突帯部下方より底部までは縦の細かいハケ目調整である。同器形の中型甕は第５号甕棺墓下棺，第９号甕棺墓上・下棺に見られる。

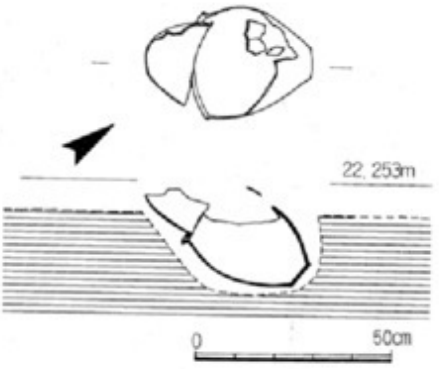
▼48　第10号甕棺（縮尺1/5）



第11号甕棺墓（49・50）　土　器（51・52）

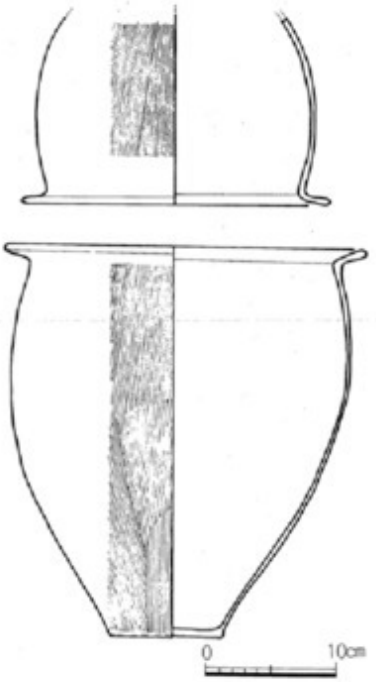
第19号甕棺墓と重複しているために墓坑のプランは明確にできなかった。棺は小型甕の合口式である。

上棺は口径28cmで「く」字形口縁をなす。屈曲部内面の稜は丸みがある。色調は茶色を呈し，胎土には小砂粒が見られる。調整は口縁部の横ナデ後に胴部の縦ハケ目を施している。下棺は口径23cm，器高30cm，底径 8.6cmである。胴部外面の調整は縦のハケ目であるが，上半分は数回くりかえしている。



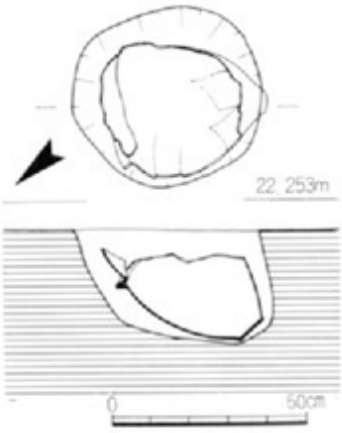
49　第11号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

▲50　第11号甕棺墓



▲51　第11号甕棺実測図（縮尺1/6）

▼52　第11号甕棺（縮尺1/5）



53　第12号甕棺墓実測図
（縮尺1/20）

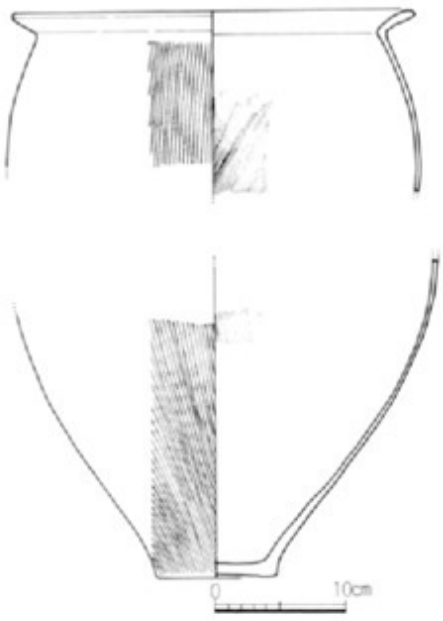
第12号甕棺墓（53・54）

第19号甕棺墓の墓坑を切って埋置されており，２つの小型甕を用いた合口式である。埋置傾斜は46度で削平時にか合口部がずれている。上棺は口縁部のみが残る。

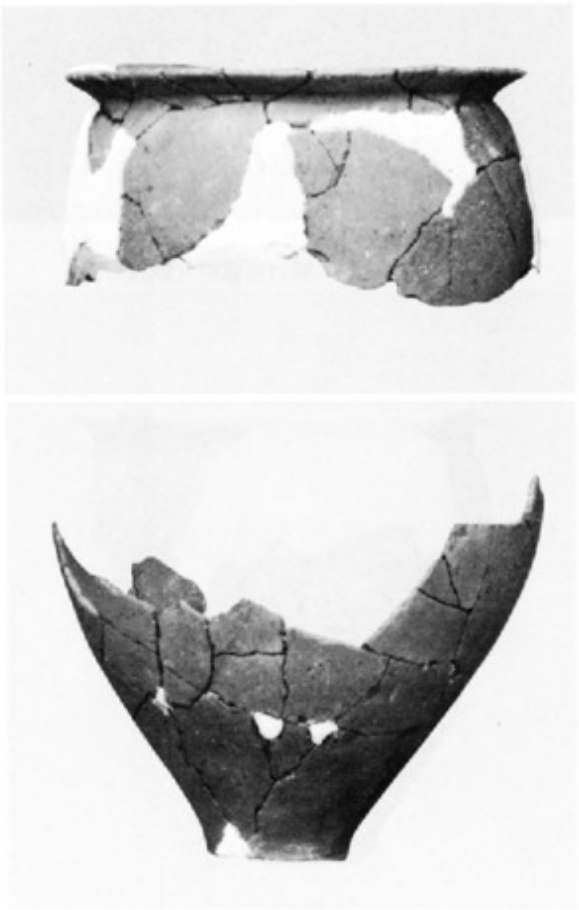
土　器（55・56）

上棺の甕は下棺と同じように「く」字形口縁を持つ。胴部は中位よりやや上に最大部があり径は約33cmを測る。下棺は胴部下半が接合できなかった。上・下棺ともに胴部外面は粗い縦のハケ目，内面は細かいハケ目調整されている。

◀54　第12号甕棺墓



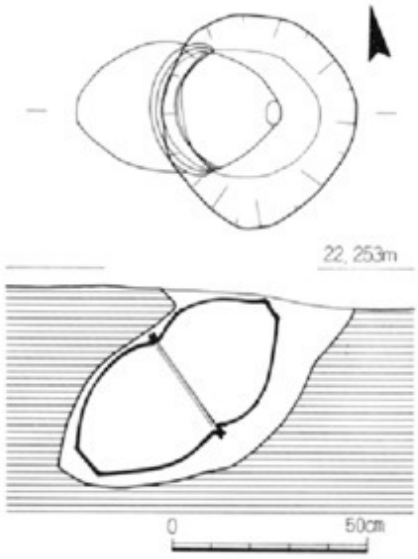
55　第12号甕棺実測図（縮尺1/6）



56　第12号甕棺（縮尺1/5）

第13号甕棺墓（57・58・59）

墓坑の上面プランは53cm×54cmの円形で最初から棺の大きさに合わせて斜めに掘りこまれている。主軸方位はN－101°－Eで，埋置傾斜は38度である。棺は小型甕を用いた複棺で，合口式である。合わせ部には粘土の目貼りは見られなかったが，完全に接合されている。

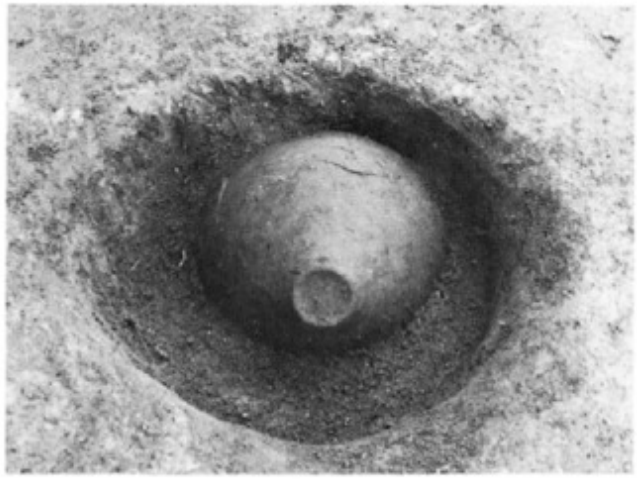


57　第13号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

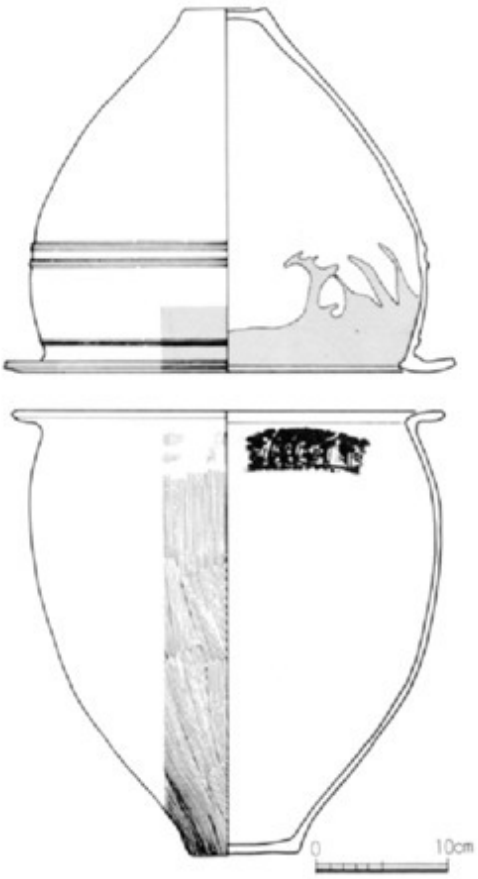
土　器（60・61・62）

上棺は丹塗りの小型甕である。径 6.6cmのわずかに上げ底となった小さな底部から大きく開く胴部がつき，最大径部に断面口唇状の2条の突帯をめぐらしている。突帯の上部からゆるやかに外湾しながらのびて逆「L」字形の口縁部へと続く。屈曲部の外面にも断面口唇状の突帯を1条めぐらしている。器面の調整は，内面が丁寧なナデ，胴部突帯部は横のミガキ，突帯部より底部にかけては縦のミガキで全体的に丁寧な調整である。口縁上端部は放射状のミガキで暗文風な効果が出ている。口縁部と突帯より上部は内外面ともに丹が塗付されており，内面は丹が流れている。口径は34.8cm，器高は27.8cmである。

下棺は「く」字形口縁を持つ小型甕が用いられている。口径33.2cmで上棺よりやや小さい。器高は34cm，底部は平底で径 8.4cmを測る。屈曲部



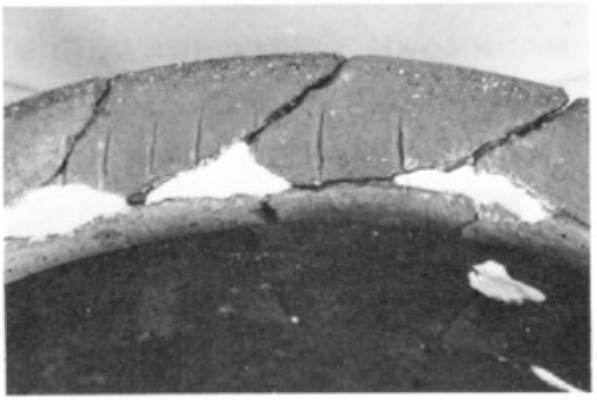
（上）58　第13号甕棺墓
（下）59　第13号甕棺墓



内面は，にぶい稜となっており，口縁上端部はわずかであるが平坦面をつくる。胴部最大径は31.5cmで胴部上位にある。焼成はよく，内外面とも色調は赤茶色を呈している。器面の調整は口縁部が横ナデ，胴部外面は底部まで縦のハケ目で，口縁部近くは横ナデでハケ目を消している。口縁上坦部にはヘラ状のもので7本の刻み目がいれられている。

◀60　第13号甕棺実測図（縮尺1/6）

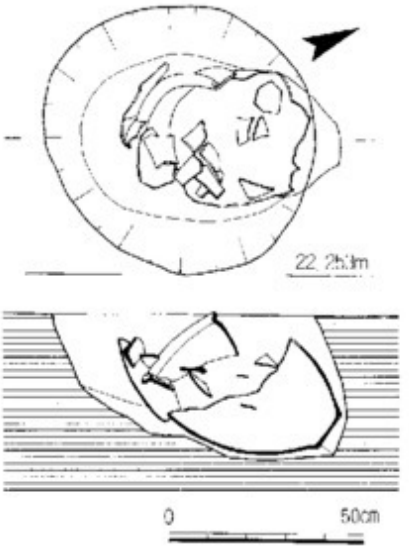
▼61　第13号甕棺下棺口縁部



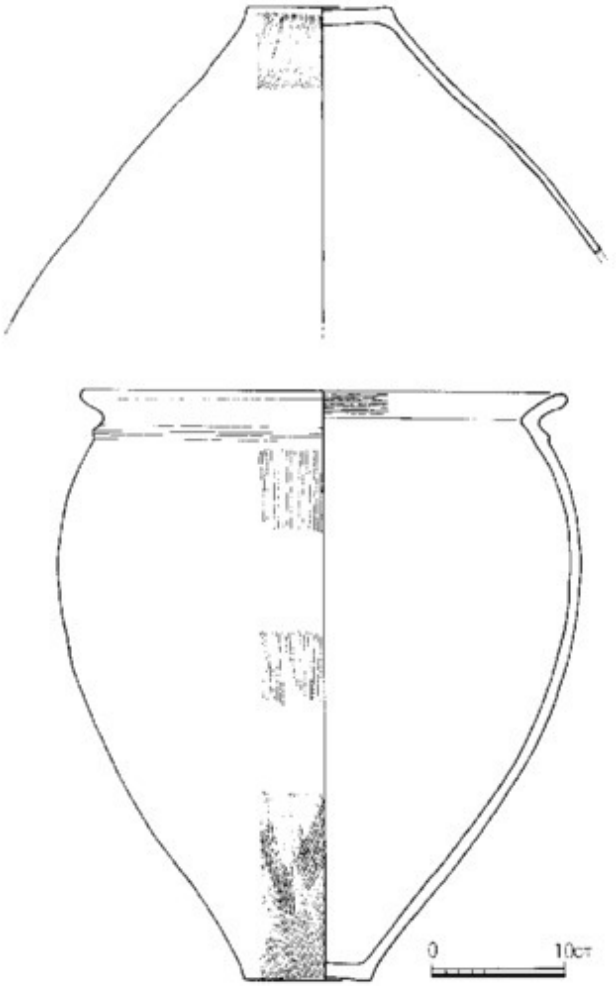
▼62　第13号甕棺（縮尺1/5）

第14号甕棺墓（63・65）

第14号甕棺墓は四方を第10，13，15，17号甕棺墓にとり囲まれている。墓坑上面プランは68cm×70cmの円形である。墓坑は第13号甕棺墓と同じように最初から傾斜を持って掘りこまれており，32度の傾斜で埋置されている。上部は削平され，かつ棺が移動しているようであるが，接合復原の結果，上棺は大型の鉢と思われる。下棺は中型甕が用いられており覆口式である。主軸方位はS－2°　Wで，他の甕棺墓の多くが東西方向であるのに対して土坑墓と同じように南北方向をとっている。



63　第14号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



64　第14号甕棺実測図（縮尺1/6）

土　器（64・66）

上棺の口縁部は墓坑内では見出すことができず，口縁部打欠きの可能性が強い。径11cmの平底から大きく開きながらのびる胴部がつく。大型甕の胴下半部に比して器壁がうすく，胴部の外側への開きが大きいために鉢と推定した。色調は内外面とも茶色で，焼成はよい。器面の調整は，内面が底部から縦のナデ，外面は縦のハケ目である。底部近くには小さな黒斑が見られる。

下棺は中型甕で，「く」字形口縁を持つ。胴部の最大径は中位よりやや上にあり40cmを測る。屈曲部には1条の断面三角形突帯をめぐらすなどの特徴は，第5，9，10号甕棺と類似しているが，これらの口縁部が

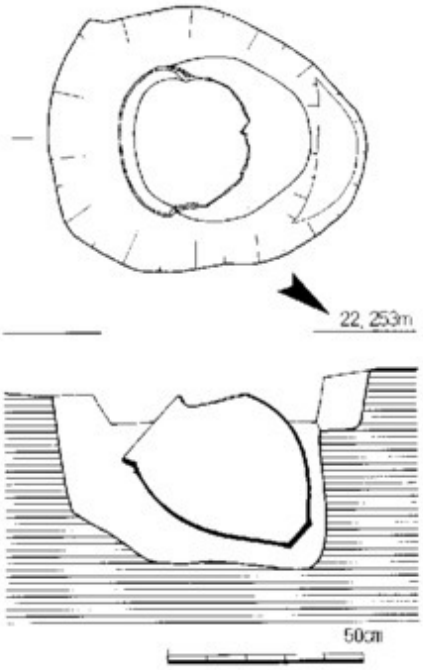
屈曲部から内湾しながらのびるのに対して，逆に外湾ぎみにのび端部を丸くおさめている。また屈曲度も大きい。この部分には粗い横ハケ目後にナデを加えている。胴部外面の調整は全面縦の粗いハケ目である。口縁部から突帯部にかけては横ナデであるが突帯部は強く横ナデされているために突帯はつぶされている。

▼65　第14号甕棺墓

▶66　第14号甕棺（縮尺1/5）

第15号甕棺（67・69）

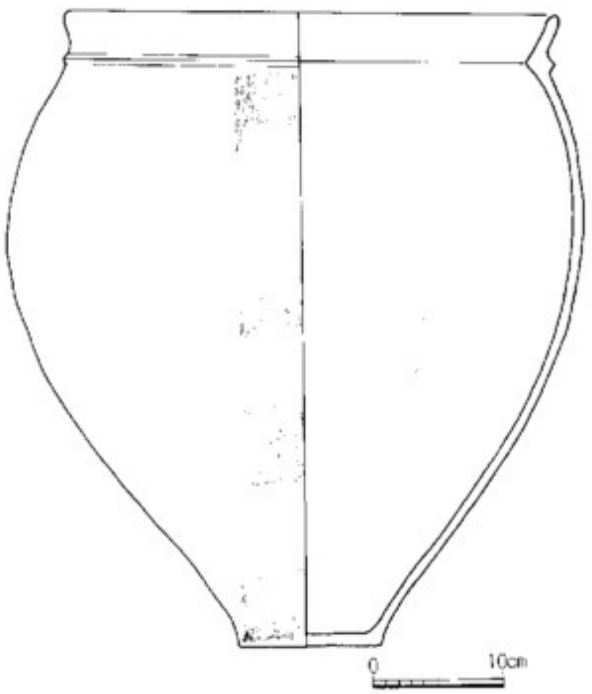
墓坑上面プランは81cm×68cmの楕円形で，ほぼ垂直に掘りこまれている。棺は中型甕の単棺で，墓坑の北側によせ埋置されており，坑底よりやや上にある。主軸方位はN－142°－Eで，埋置傾斜は41度である。頭位を南東側に置いているのは第15号甕棺墓の他には，第16，17，18号甕棺墓の計4基で，うち第15，16，17号甕棺墓の3基は，発掘区の南端部に集中している。同じように東側に頭位を置く第1，2，3，4，5号甕棺墓，西側に頭位を置く第6，7，8，9，10，19，20号甕棺墓は同じ主軸方位のものが接近して埋葬されているようである。



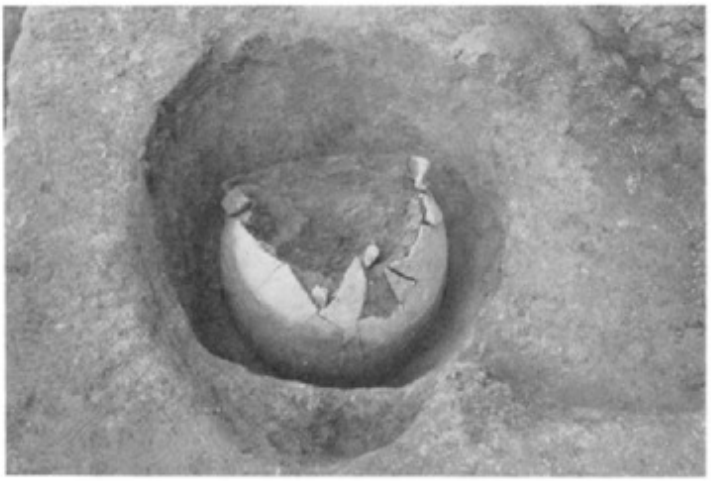
67　第15号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

土　器（68・70）

口径は37cm，器高は49cm，底径は41cm，胴部の最大径は中位よりやや上部にあり，44.2cmを測る。平底の底部に倒卵形の胴部がつく。口縁部は「く」字形に屈曲している。屈曲部は肥厚しており，外面には断面三角形の突帯が1条めぐっている。内面の突出部はにぶく，口縁部へ内湾しながらのび，端部を丸くおさめている。他の類似する甕に比べ口縁部の湾曲は小さく，かつ直立ぎみである。胎土には小砂粒が多く，内外面ともに器面が剝離し砂粒が露出している。色調は外面が茶色，内面が褐色をおびている。器面の調整は胴部外面の縦ハケ目後に口縁部を横ナデしている。

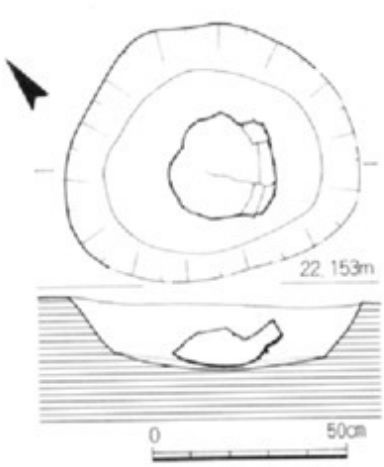


68　第15号甕棺実測図（縮尺1/6）



◀ 69　第15号甕棺墓

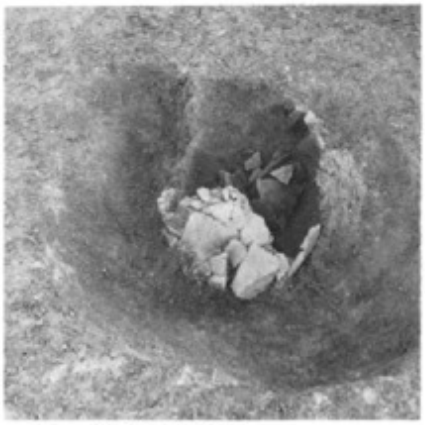
▼ 70　第15号甕棺（縮尺1/5）



71　第16号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

第16号甕棺墓（71・72）

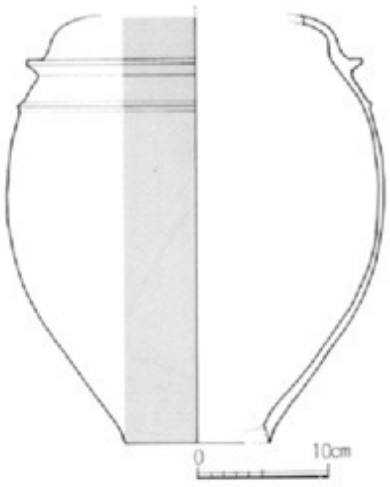
第16号甕棺墓は第17号甕棺墓の墓坑を切って埋置されている。墓坑上面プランは75cm×63cmの楕円形である。墓坑の壁は傾斜をもたせて掘りこまれ深さは18cmを測る。坑底のプランも上面と同じで楕円形を呈す。主軸方位はN－129°－Eで，下に埋置されている第17号甕棺墓の主軸方位とほぼ同じである。埋置傾斜は，発掘中に細片となり正確でないが19度である。



72　第16号甕棺墓

土　器（73・74）

いわゆる瓢形土器を用いた単棺で，頸部は打欠かれた可能性がある。とすれば複棺であるかもしれないが上部は削平されており明確でない。胴部最大径は中位にあり，上部には断面三角形の突帯と上向きの鍔状の突帯をめぐらしている。外面は全面にわたって丹が塗付されている。底径は11.2cm，器高は32.4cm，胴部最大径29cmを測る。

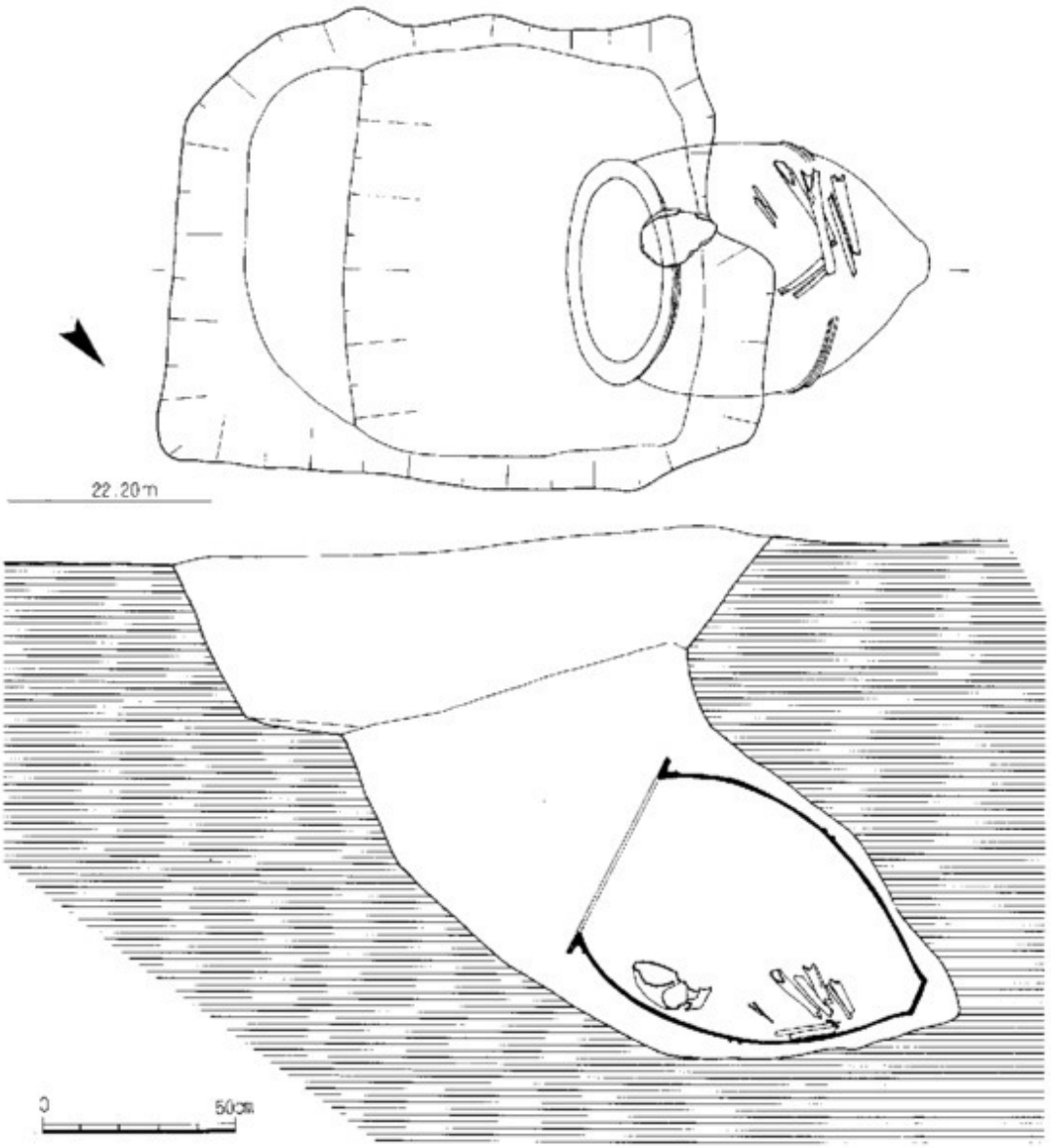


73　第16号甕棺実測図（縮尺1/6）

74　第16号甕棺（縮尺1/5）

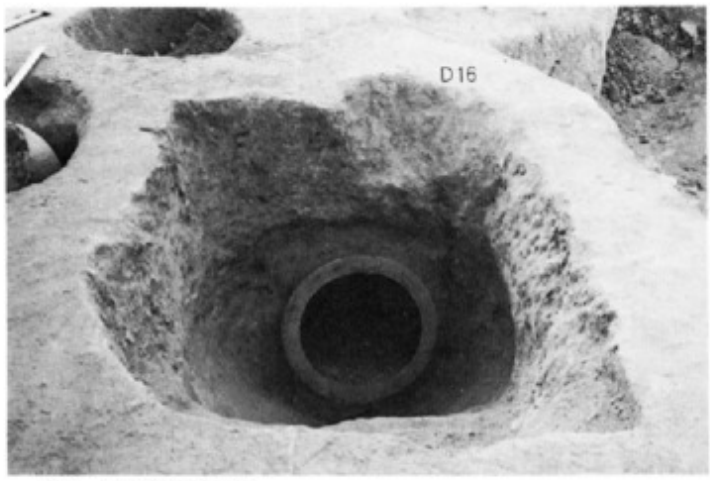
第17号甕棺墓（75・76・77）

第17号甕棺墓の埋置方法は，まず 123cm×140cm に平面形が隅丸長方形の竪穴を45cmの深さに掘り，東短壁側の坑底を26cm残して，ここを階段状にしさらに西短壁側を斜め下に棺の大きさよりやや大きめに掘りこみ，大型甕をすべりこませている。大型甕を用いた甕棺墓は第3，6，7，17，19，21号の6基であるが埋置傾斜角度の平均は34度であるのに対し第17号甕棺墓は25度でもっとも水平に近い。これは棺を埋置した斜坑がより大きいことを示している。主軸方位は，N－136°　E で東南側に頭位を置いている。甕の口縁部には粘土の目貼りは見られな



75　第17号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

かったが，棺内にはあまり流土は見られず，人骨の保存を助けたようである。人骨は成年の女性（？）と推定されている。第17号甕棺墓の被葬者が女性と推定されたことから，上部に主軸方位を同じくし，あたかもそえるようにして埋葬されている第16号の小児用甕棺墓とは直接的な根拠はないものの母子の関係ではなかったかと想像される。ただし，第16号甕棺墓の墓坑は第17号甕棺墓の墓坑を切っており，同時に埋葬されたのではなく，ある程度の時間を考えるべきであろう。同じように大型甕の上部に小児用甕棺墓が埋置されている例は第19号甕棺墓と第12号甕棺墓にも見られる。ただし主軸方位を異にしており，また第19号甕棺墓の被葬者は出土人骨から老年の男性と推定されている。



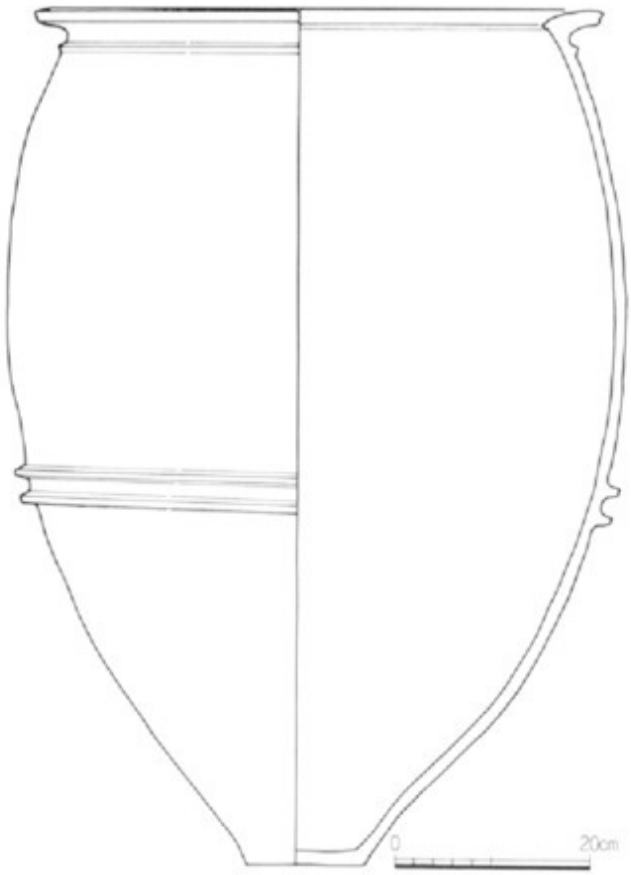
76　第17号甕棺墓

77　第17号甕棺墓

土　器（78・79）

口縁部が逆「L」字形をなす大型甕である。径12.2cmの平底に卵形の胴部がつく。胴部の上位はやや内傾して口縁部がくびれており全体的に丸みがでている。逆「L」字形の口縁部は内傾し，内端部は突出し面取りされている。外端部は強く横ナデされ凹状となっている。胴部の最大径は63.3cmで，中位よりやや上にあり，58.4cmの口径よりも大きい。突帯は口縁部直下に断面三角形の突帯を1条，胴部中位よりやや下に断面台形の突帯を2条めぐらしている。胴部の突帯はやや上向きに貼りつけられている。胎土，焼成ともによく，色調は茶色を呈する。胴部の突帯は水平にめぐらされていないが，たいへん整った器形をなす。

78　第17号甕棺（縮尺1/10）



▶79　第17号甕棺実測図（縮尺1/8）

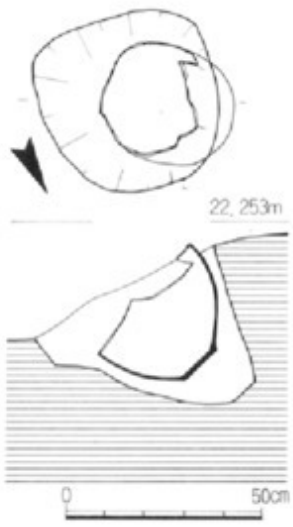
第18号甕棺墓（80・81）

第18号甕棺墓と第21号甕棺墓の2基は，他の大部分の甕棺墓よりやや離れた所に位置している。第18号甕棺墓はいわゆる瓢形の壺を用いた単棺である。墓坑の上面プランは45cm×45cmの不整円形である。器壁がうすいこともあって残存状態はたいへん悪く，かつ上部を削

平されているために，検出時には胴下半部を残すのみであった。墓坑は西側に向かって斜めに掘りこまれ，壺が埋置されている。

土　器（82・83）

径11.8cmの底部はやや上げ底ぎみで，最大径を中位にもつ胴部がつく。胴部の上部はくびれて，ここに上向きの断面台形の突帯が1条めぐり，さらに内湾しながら頸部へと続いている。胎土には2㎜大の大きめの砂粒が多く入っており，焼成不良のためか軟質で，淡黄茶色を呈する。

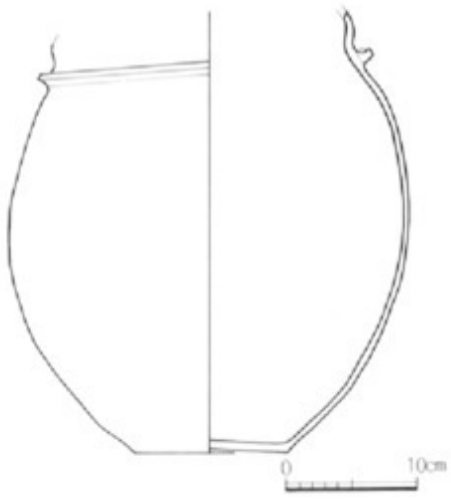


▲80　第18号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

◀81　第18号甕棺墓

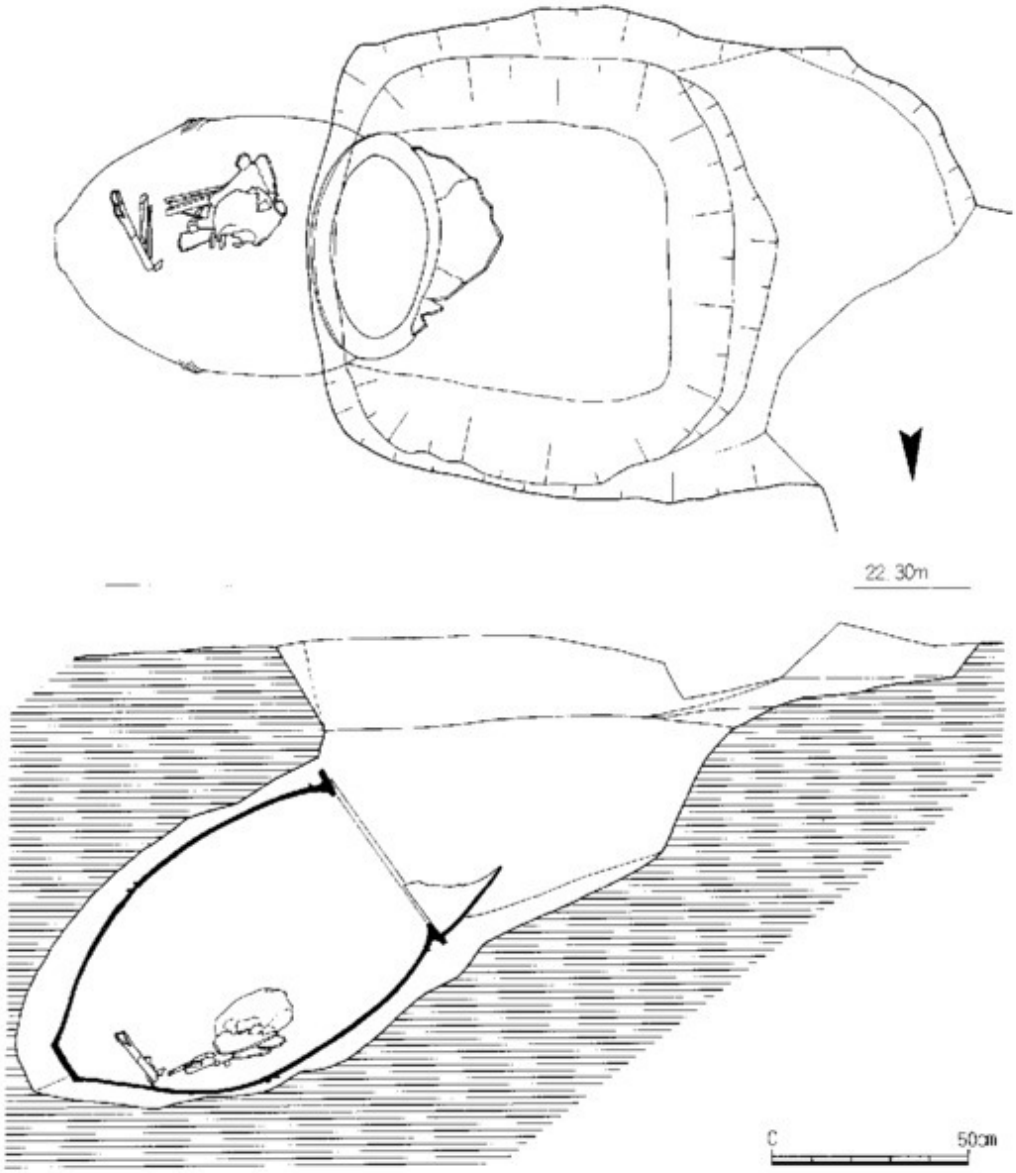
◀82　第18号甕棺（縮尺1/5）

▼83　第18号甕棺実測図（縮尺1/6）

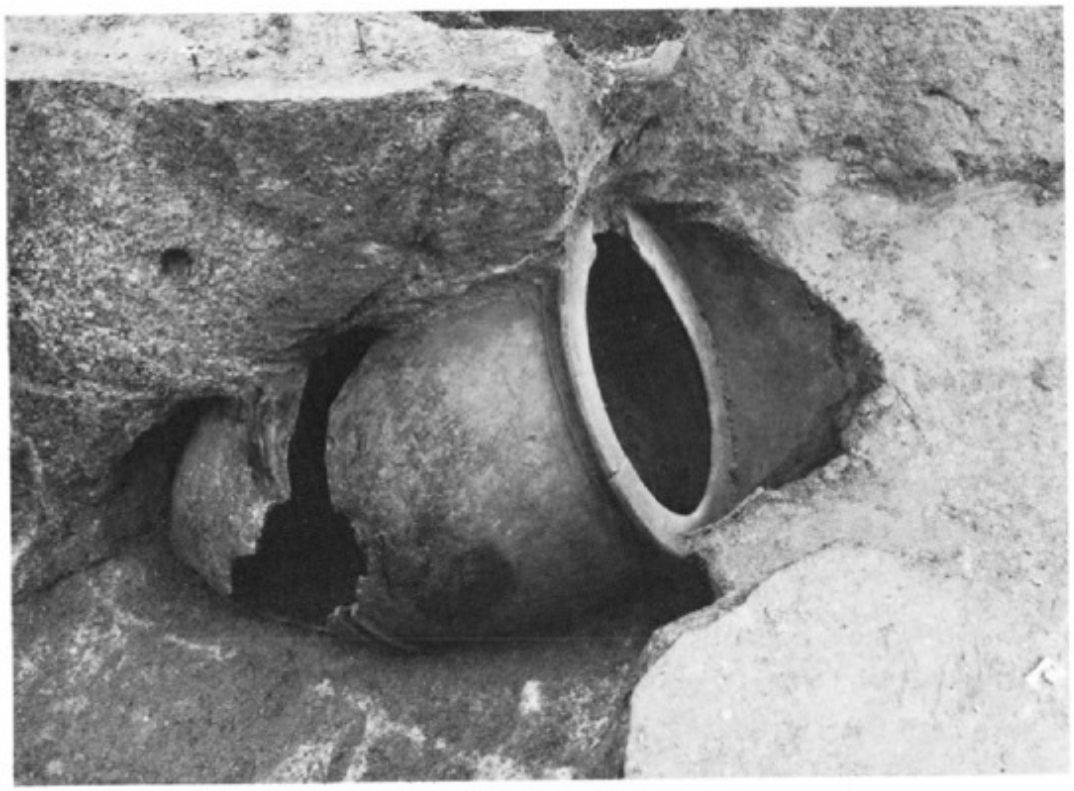


第19号甕棺墓（84・85）

第19号甕棺墓の墓坑は第11，12，20号甕棺墓によって切られており，第19号甕棺墓が先に埋置されている。主軸方位はN－87°－Wで第6，7号甕棺墓と同じ西側を頭位としている。墓坑上面プランは170cm×120cmの隅丸長方形で，深さ70cmの坑底から東側に向かって斜坑が掘りこまれている。棺は上棺が口縁部を打欠いた鉢，下棺が大型甕の複棺で接口式である。上棺の鉢は土圧のためか早くつぶれ下棺の棺内は土で半分ほどが埋まっていたが人骨は残っていた。人骨は，老年の男性と推定されている。



84　第19号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



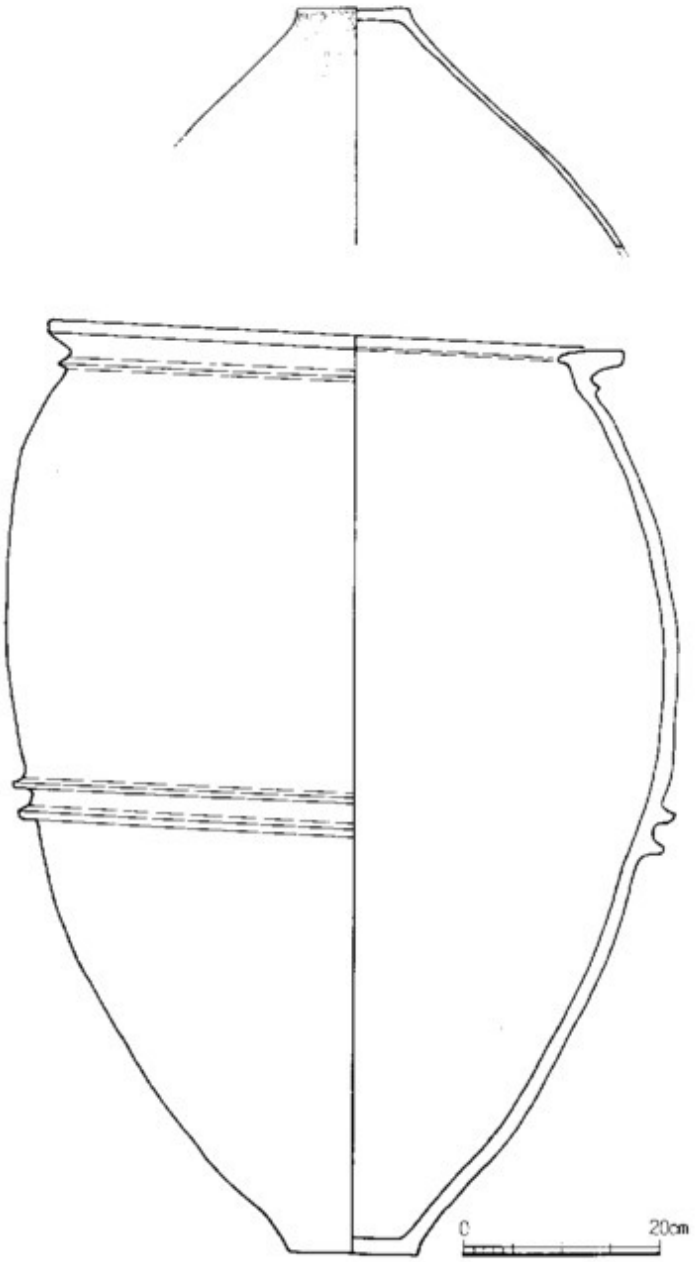
▲85　第19号甕棺墓

▶86　第19号甕棺（縮尺1/10）

土　器（86・87）

上棺は口縁部打欠きである。やや上げ底ぎみの底部から，大きく外に開きながら胴部がのびる。底径は11.4cmを測る。器壁のうすさ，胴部の開きなどから，第14号甕棺上棺と同じように鉢と判断した。胎土には小砂粒が見られ，焼成良好で，色調は茶色を呈する。調整は胴部内面が縦のナデ，外面は縦のハケ目である。

下棺は大型甕で逆「L」字形の口縁部を持っている。底径13cm，器高94.8cm，口径は59.2cmを測る。胴部最大径は68.4cmで中位よりやや上にある。胴部上位で湾曲しながら内傾し，口縁部へと続く。口縁部は肥厚しており，上世部は内傾するが平坦面をつくっている。内端部は内側へ大きく突出しており「T」字形に近い断面である。口縁直下には断面三角形の突帯が1条めぐらされている。この突帯はやや下向きに貼りつけられている。胴部の突帯は中位に2条ある。突帯の断面は台形で斜めにめぐらされている。焼成はよく，茶色を呈する。器面の調整は口縁部と突帯部が横ナデ，胴部外面は粗いハケ目調整で，突帯より上部15cmまでは細かいハケ目調整である。細身の甕棺であるが，かなりいびつな器形である。



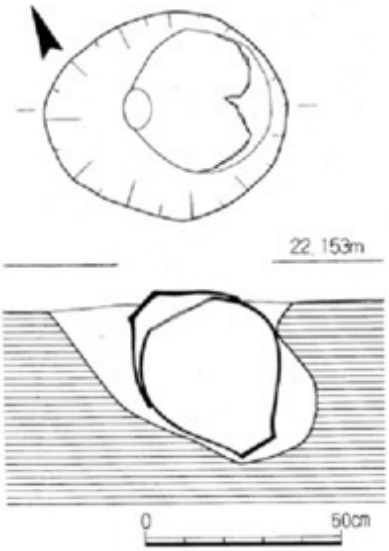
87　第19号甕棺実測図（縮尺1/8）

第20号甕棺墓（88・89）

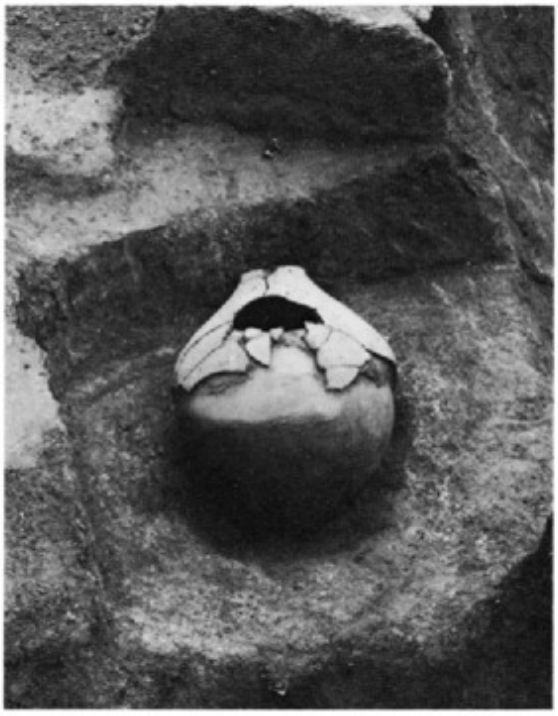
第20号甕棺墓は，第19号甕棺墓の墓坑を切って埋置されている。墓坑上面プランは62cm×53cmの楕円形で，最初から棺の大きさに斜めに掘りこまれている。棺は上棺が胴部上半部を打欠いた壺で，下棺は頸部を打欠いた壺である。上棺が下棺を覆う覆口式で，接合部は完全に密着している。粘土の目貼りは見られなかった。

土　器（90・91）

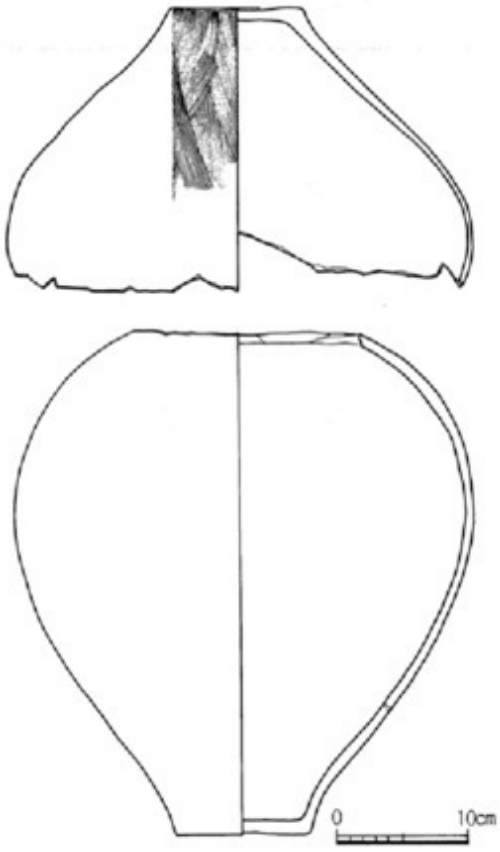
上棺は前述したように胴部上部が打欠かれており，全形を知りえないが，最大径を胴部上位に持つ広口の壺となるのであろう。径10cmの底部はわずかながら上げ底ぎみとなっている。胴部最大径は35.6cmを測る。色調は内面が黒茶色，外面は赤茶色，胎土は密で精良である。器面の調整は内面がナデ，外面は細かいハケ目が施されている。



88　第20号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



89　第20号甕棺墓



90　第20号甕棺実測図（縮尺1/6）

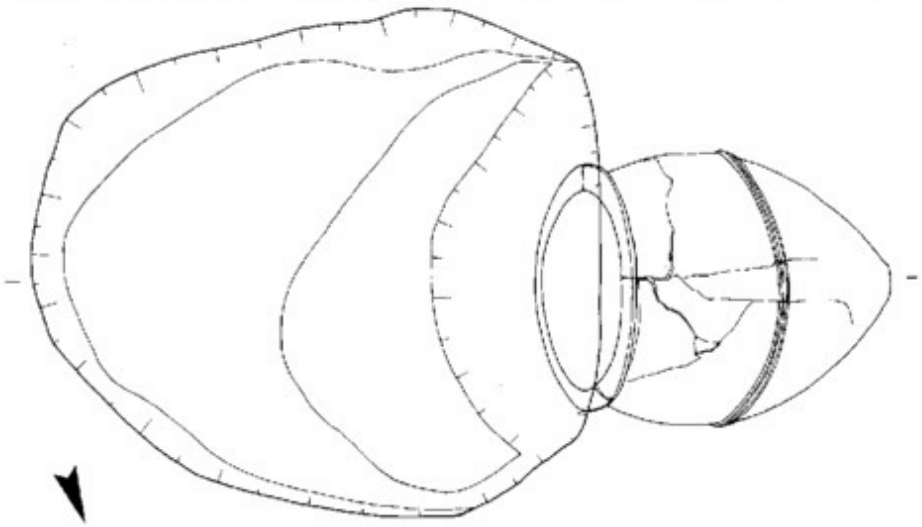
下棺は頸部より上部が打欠かれている。平底に倒卵形の胴部がつく。胴部の最大径は35.2cmでやや上位にある。器面は丁寧なナデ調整が施されている。色調は明茶色を呈し，焼成良好である。胎土には砂粒の混入が見られる。胴部の下部に3mm大の小孔が穿たれている。底径10.2cm，器高は38.6cmを測る。

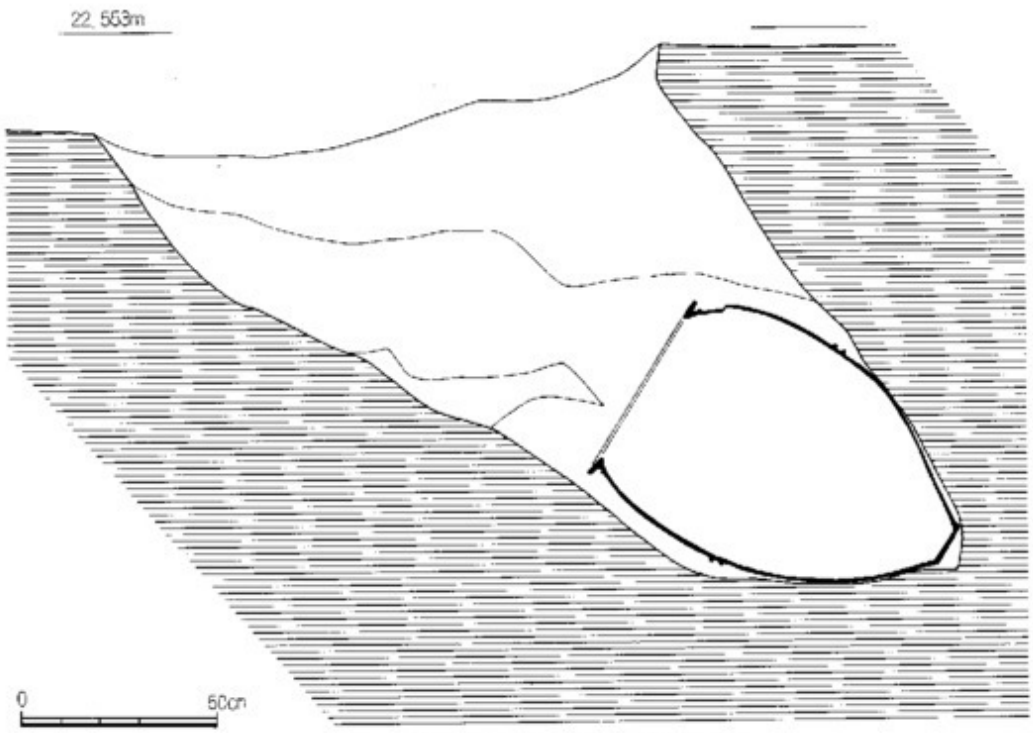
◀91　第20号甕棺（縮尺1/5）

▶92　第21号甕棺墓

第21号甕棺墓（92・93）

第21号甕棺墓は本遺跡ではもっとも西端に位置している。墓坑上面プランは130cm×145cmの不整隅丸長方形である。大型甕を用いた第3，6，7，17，19号甕棺墓の墓坑がまず竪穴を掘り，その坑底の一方を斜めに掘りこんでいるのに対して第21号甕棺墓の墓坑は最初から斜坑を掘っている。棺は大型甕を用いた単棺で，口縁部には粘土の目貼りは見られなかった。





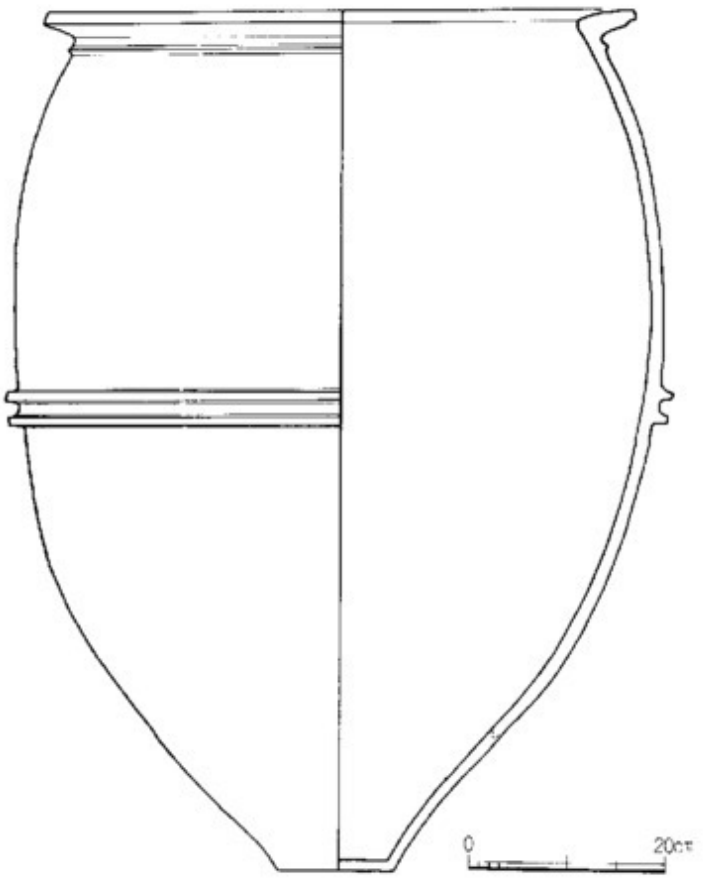
93　第21号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

土　器（94・95）

口径61cm，底径12cm，器高は89cmの大型甕である。平底から胴部へは内湾しながら開き，胴部中位にめぐらされた突帯からは，直立ぎみにのび上部でわずかに内傾している。この上部に逆「L」字形の口縁部がつく。口縁内端部は突出していず，外端部は肥厚している。突帯は口縁直下に断面三角形の突帯を１条，胴部中位に断面台形の突帯が２条めぐらされている。焼成は良好で色調は明茶色を呈している。器面の調整は口縁部と突帯部が横ナデ，胴部外面はナデ，底部付近は縦のナデ調整である。

大型甕法量対比表　（単位cm）

No.	口　径	底　径	器　高	胴部最大径	人骨，その他
3	60.0	11.6	82.3	65.0	男性，熟年(40才代)
6	69.0	12.6	101.0	75.2	人骨ナシ
7	70.6	11.4	99.8	71.8	男性成人
17	58.4	12.2	87.4	63.3	女性（？）成年
19	59.2	13.0	94.8	68.4	男性　老年
21	61.0	12.0	89.0	66.2	人骨ナシ

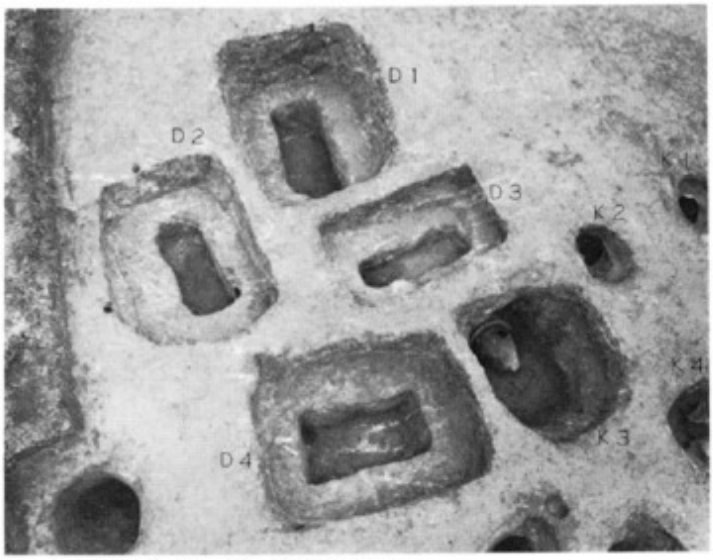


▶94　第21号甕棺実測図
（縮尺1/8）

▶95　第21号甕棺（縮尺1/10）

2. 土　坑　墓

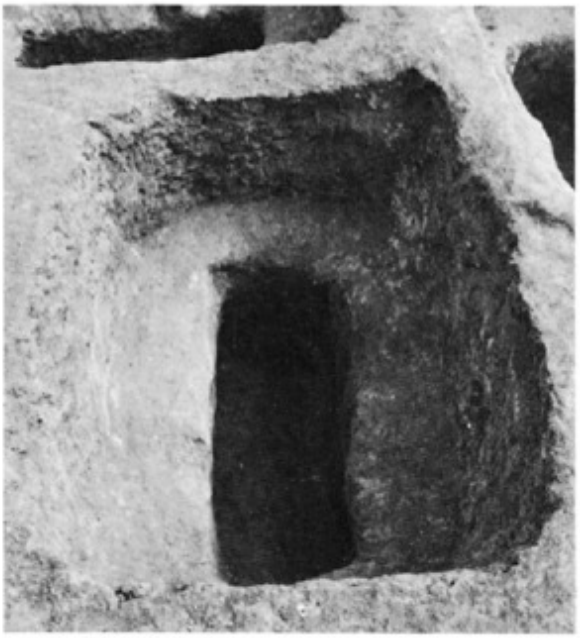
検出した土坑墓の総数は9基である。これらの土坑墓は検出順に番号を付したが，第7号土坑墓がやや離れた東端にあるのに対して他の8基は西側に片寄っている。土坑墓の掘り方は，第6号を除いてすべて二段掘りである。これらの土坑墓は一段目か二段目に木などの蓋がしてあったものと思われるがその痕跡をとどめているのは第4号土坑墓のみである。甕棺墓との先後関係は，第6，8，9号土坑墓が甕棺墓によって切られており，甕棺墓より時間的に古いことがわかる。



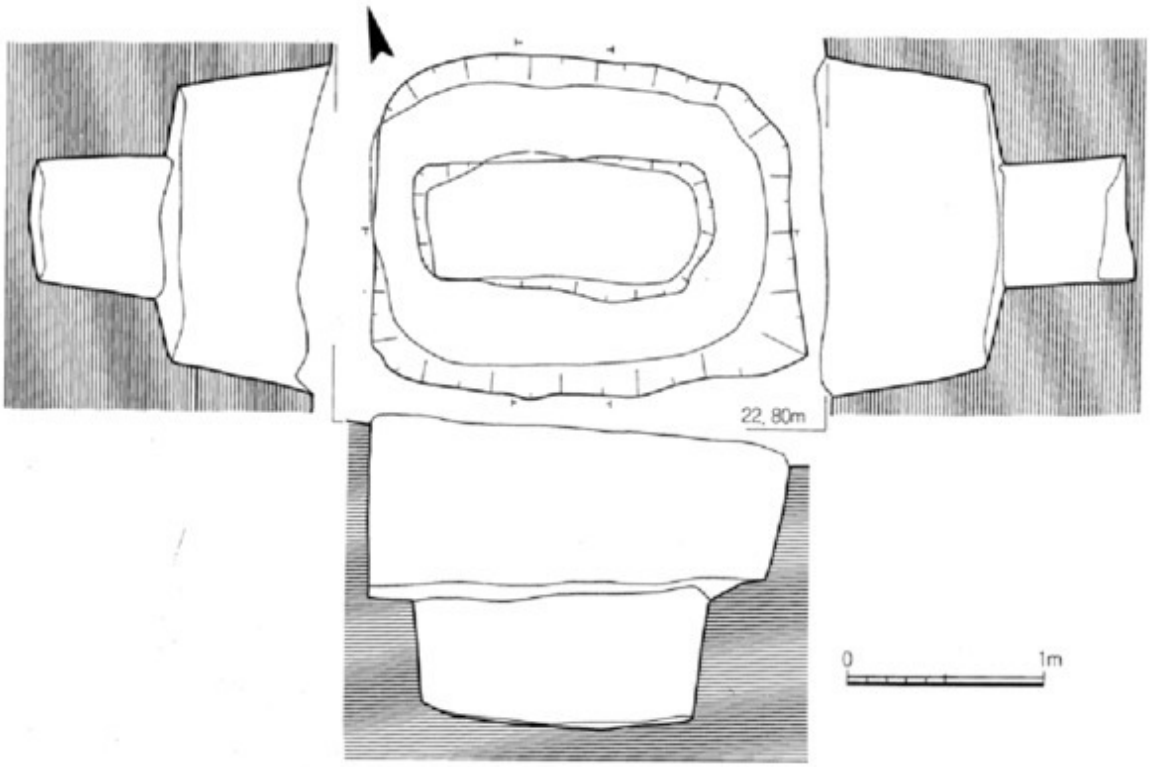
96　第1，2，3，4号土坑墓

第1号土壙墓（97・98）

第1号土壙墓は発掘区の西端部に位置し，発掘区ではもっとも標高が高いところにあたる。主軸方位はN－106°－Eで東西方向の主軸をとっているのは第1，2，9号土壙墓の3基のみである。上面形は隅丸長方形で，一段目を214cm×174cm，深さ90cmに掘っている。四壁はやや傾斜があるが西短辺の壁は垂直に近い。一段目のほぼ中心に二段目が掘りこまれており，四壁は一段目の壁より垂直に近い。壙底は中心部がわずかに窪んでいるが，ほぼ平坦といえよう。一，二段目ともに蓋があった痕跡は認められなかった。二段目の掘りこみ幅から西辺側が頭位にあたると考えられる。



97　第1号土壙墓

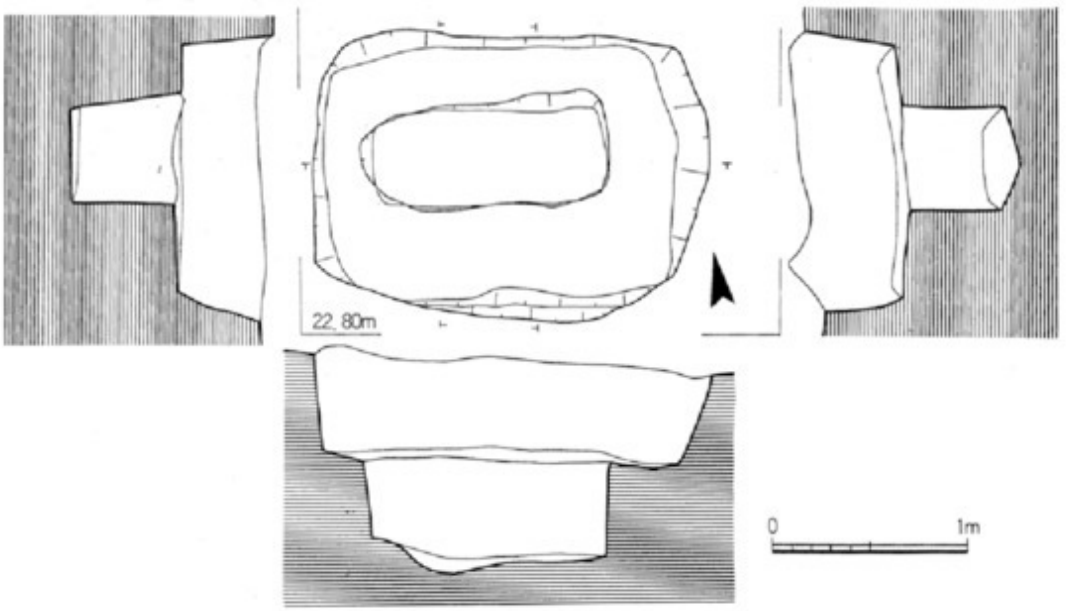


98　第1号土壙墓実測図（縮尺1/40）

第2号土坑墓（99・100）

第2号土坑墓は二段掘りの土坑墓で，第1号土坑墓の南側に位置している。主軸はN－100°－Eで第1号土坑墓と大きな差はない。一段目の平面形は隅丸長方形で，長さ206cm，幅145cmを測る。深さは50cmで第1号土坑墓よりもやや浅く，四壁は東短壁をのぞいてほぼ垂直に掘られている。遺体を埋葬する二段目の坑底は，中心よりやや北長壁に片寄って掘りこまれており，長さ128cm，幅56cm，深さ56cmを測る。坑底は西側に窪んだ部分があるが，東短壁側に比べると約10cm西短壁側が高くなっている。副葬品，および蓋の木材や目貼り用粘土は見られない。

99　第2号土坑墓

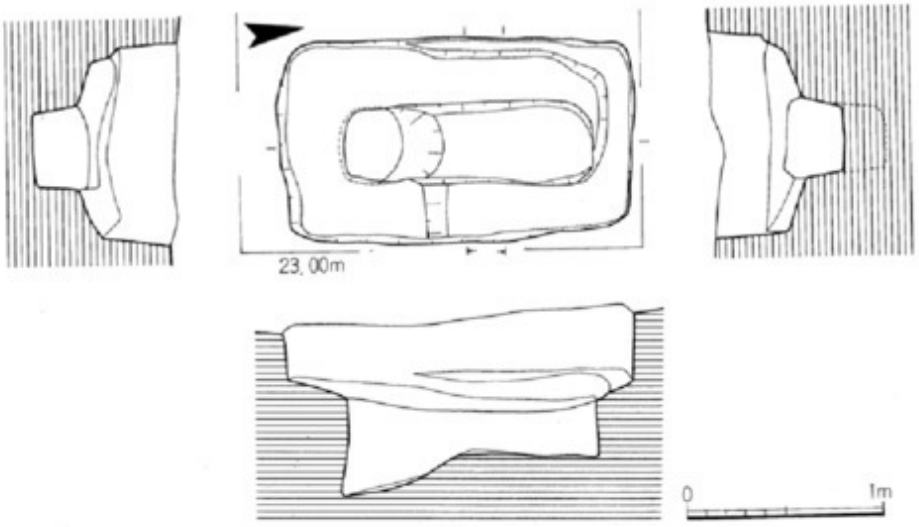


100　第2号土坑墓実測図（縮尺1/40）

第３号土坑墓（101・102）

第３号土坑墓は第１号土坑墓と第３号甕棺墓の間に位置する。第１，２，４号土坑墓とはかなり接近しているが切り合いは見られない。第３号甕棺墓とは平面的には重複しているが，第３号甕棺墓の下棺は第３号土坑墓の坑底を破壊することなく埋置されている。一段目掘りこみの平面形は長方形で180cm×105cm，深さ42cmに掘られている。一段目の坑底は平坦でない。二段目も隅丸長方形で，128cm×43cmを測り，北短辺側が幅広い。坑底は南側で急に深くなっており二段目の掘り方からは50cmの深さである。出土遺物や，粘土目貼りなどは見られなかった。

▶101
第３号土坑墓

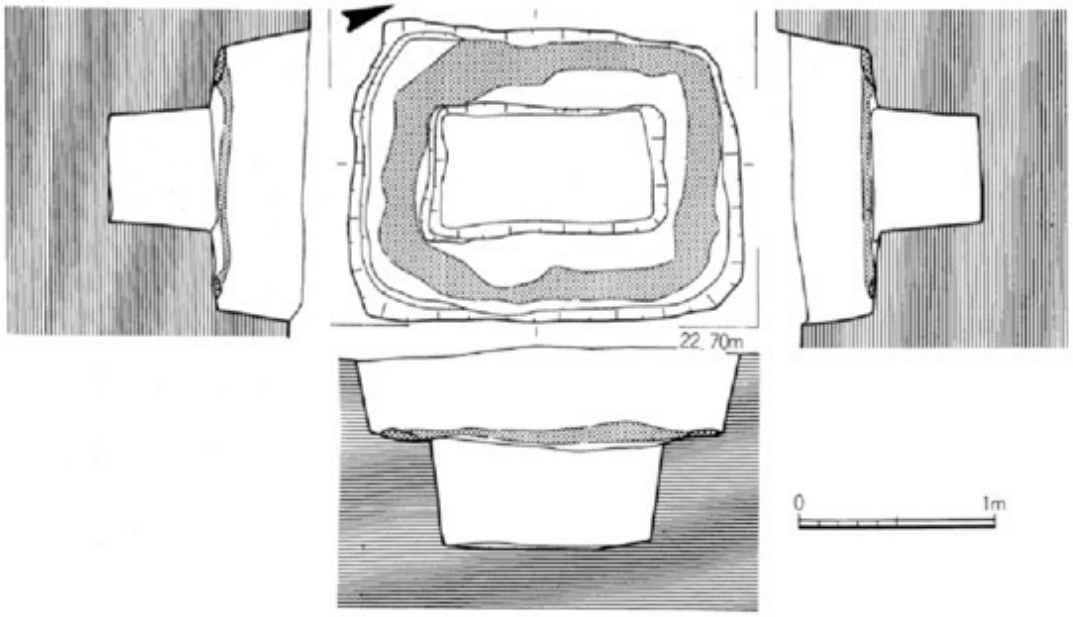


102　第３号土坑墓実測図（縮尺1/40）

第4号土坑墓（103・104）

第4号土坑墓は第3号甕棺墓と第21号甕棺墓の2つの甕棺墓の間に位置している。主軸方位はS－19°－Wで第3号土坑墓と同じように南北方向の主軸をとる。一段目掘りこみは196cm×151cmの長方形で44cmの深さに掘りこまれている。二段目はほぼ中央に長方形に掘りこまれ，長さ118cm，幅69cmを測り，坑の深さは58cmで本遺跡の土坑墓では深い部類に入る。幅は南短辺が北短辺に比べ5cm程広く，頭位と考えられる。このことは一段目の平面形にも指摘でき，南短辺が北短辺より16cm幅広い。二段目の坑底はほぼ平坦で坑底レベルは21.54mである。一段目の坑底には四壁にそって灰白色粘土が厚さ約5cmでめぐっており，蓋の目貼りであろう。粘土の残存状況から蓋はかなり大きかったものと推定される。遺物の出土はなかった。

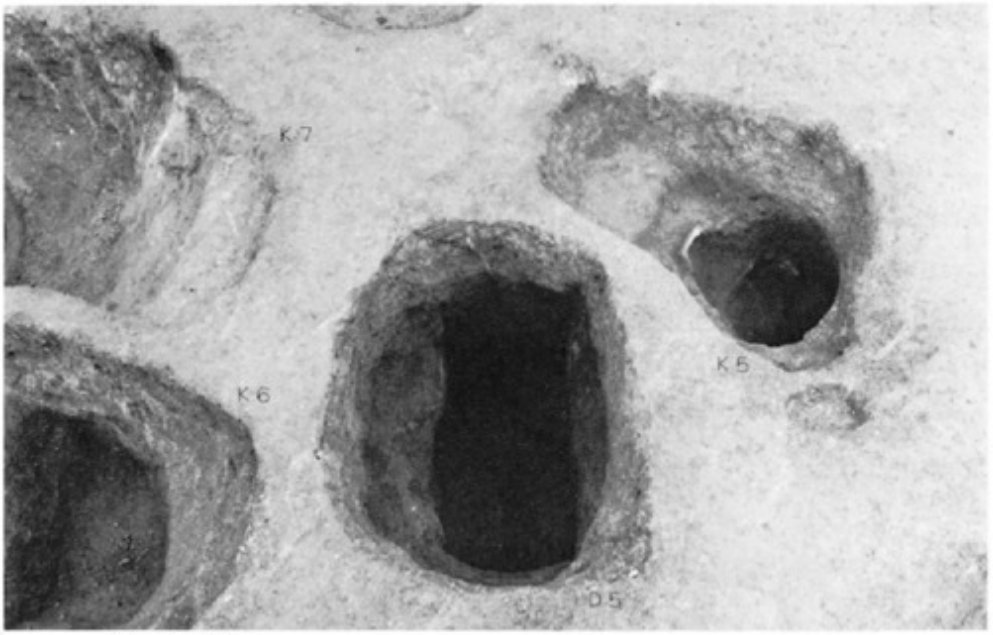
103　第4号土坑墓



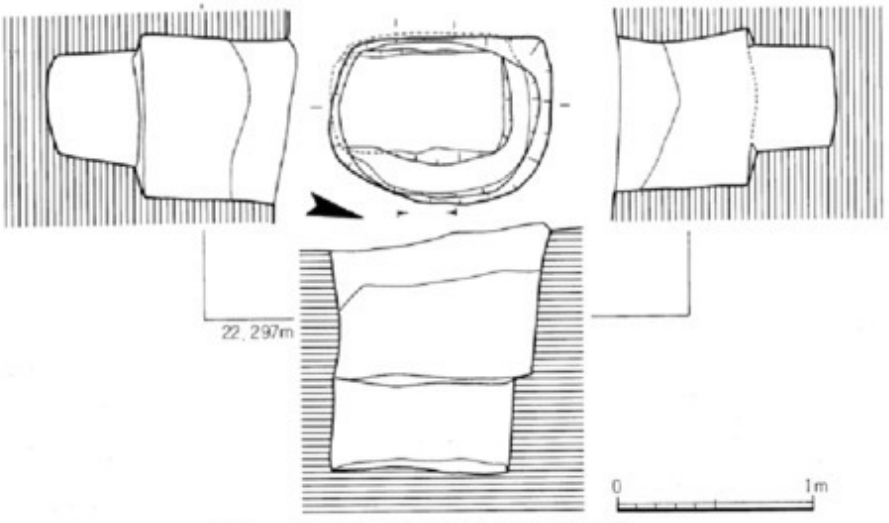
104　第4号土坑墓実測図（縮尺1/40）

第５号土壙墓（105・106）

第５号土壙墓は，第１～４号土壙墓が互いに接近していたのに対して東側にやや離れて位置している。一段目の平面形は隅丸長方形で113㎝×85㎝，深さ76㎝であり，長辺と短辺の長さに大きな差がなく方形に近い形となっている。一段目の壁はほぼ垂直で，西長辺壁はえぐりこまれている。二段目は中心線より西南側にやや片寄って掘りこまれる。平面形は長方形で92㎝×57㎝，深さ48㎝を測る。壙底はほぼ平坦で，壙底レベルは21.13mと本遺跡の土壙墓では２番目に低い。ただし上面からの深さは124㎝で，第１号土壙墓の155㎝におよばない。



105　第５号土壙墓

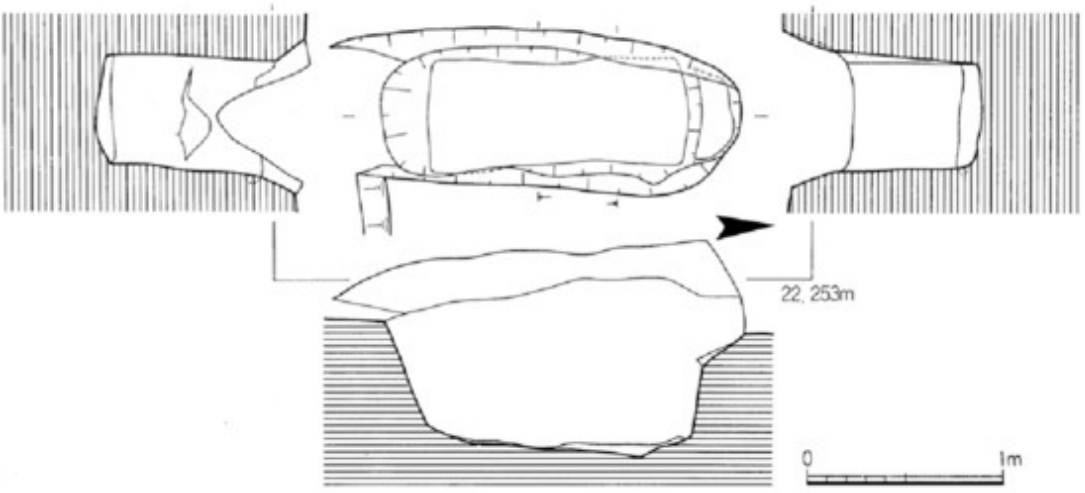


106　第５号土壙墓実測図（縮尺1/40）

第6号土坑墓（107・108）

第6号土坑墓は，発掘区のほぼ中央部に位置している。主軸方位はS－9°－Eである。平面形は隅丸長方形で，210cm×78cmを測る。北短辺壁は第5号甕棺墓の墓坑で切られている。また南短辺壁も掘りこみが明瞭でない。両長辺壁はほぼ垂直に掘りこまれているが，南短辺壁はかなり傾斜をもっており，北短辺壁は深さ60cmに段がある。断面で観察すると，上面より約30cmの深さまでは壁を斜めに掘り，その下部は垂直に掘りこんでいる。したがって北短辺壁に小さな段があるものの二段目に蓋をかぶせるようなことはできず，二段掘りの土坑墓というよりも素掘り土坑墓とすべきであろう。坑底のプランは長方形で長さ163cmを測り，幅は南短辺が57cmで北短辺より3cm幅広く，頭位と考えた。坑底は平坦でなく凹凸がある。

107　第6号土坑墓

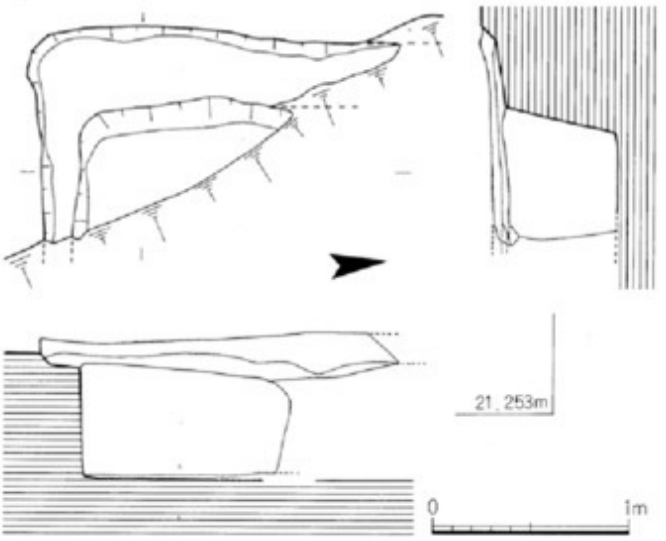


108　第6号土坑墓実測図（縮尺1/40）

第７号土坑墓（109・110）

第７号土坑墓は発掘区の東端で検出したもので，全体の½ほどが土取り時に破壊されている。二段掘りの土坑墓であるが，一段目の掘りこみが浅く第１～４号土坑墓とは異にしている。残存部から推測される一段目の平面形は隅丸長方形である。二段目の坑の大きさが不明なので全形を知りえない。一段目の深さは22cmで，上部が削平されているとしてもかなり浅い。二段目も隅丸長方形で深さ52cmを測る。この深さは，二段目深さの平均値が53cmなのでほぼ等しい。坑底は平坦である。頭位は不明。

▶109　第７号土坑墓

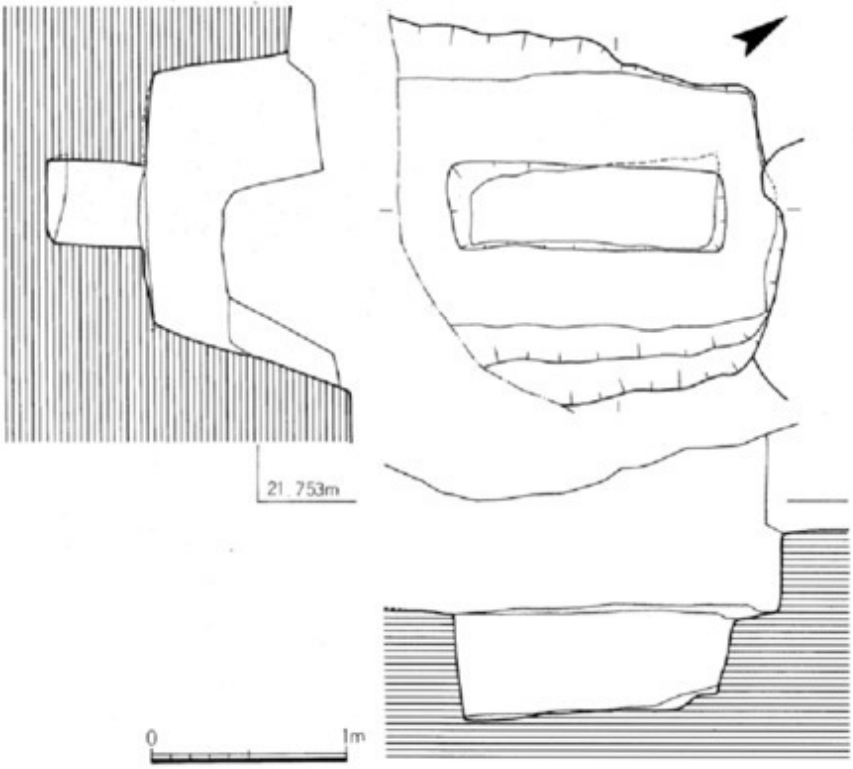


110　第７号土坑墓実測図（縮尺1/40）

第8号土坑墓（111・112）

第8号土坑墓は発掘区の南端部にあり，その一部は調査区外のため発掘できなかった。一段目の深さが90cmあり，たいへん深い二段掘りの土坑墓である。一段目の平面形は隅丸長方形で南短辺壁に向かって広がっている。長辺壁は傾斜があるが，北短辺壁はほぼ垂直である。南短辺壁は第9号甕棺墓の墓坑で切られており，先後関係がわかる。二段目は中心線上に掘りこまれている。二段目は長方形で長さ141cm，幅43cm，深さ52cmである。南短辺が43cmで北短辺より3cm幅広く，頭位であろうか。坑底は南に向かって傾斜している。坑底のレベルは，20.63mでもっとも深い位置に埋葬したことになる。なお，もっとも高い坑底は第3号土坑墓の21.79mでその差は1.16mある。

111　第8号土坑墓

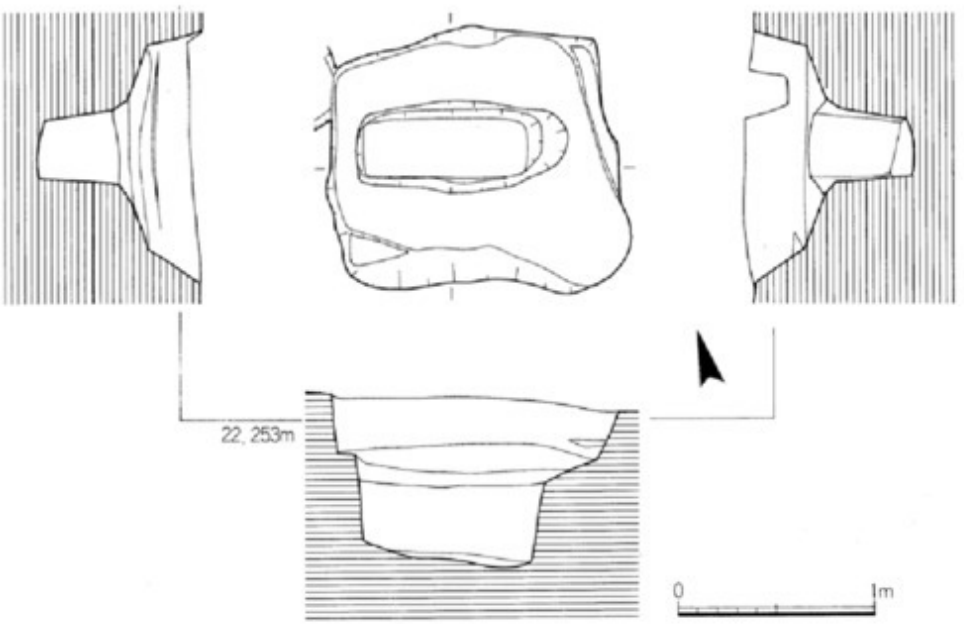


112　第8号土坑墓実測図（縮尺1/40）

第９号土坑墓（113・114）

第９号土坑墓は発掘区のほぼ中央部に位置しており，第５号甕棺墓の墓坑でわずかに切られている。また上部に第８号甕棺墓が埋置されている。二段掘りの土坑墓であるが，二段目の墓坑に対して一段目の掘りは大きい。一段目は146cm×128cmの隅丸長方形で深さは35cmである。二段目は長方形で長さは108cm，最大幅47cm，深さは50cmである。両短辺の幅はほとんど差はないが，坑底は東に向かって傾斜しており，西側が頭位であろうか。

▶113
第９号土坑墓



114　第９号土坑墓実測図（縮尺1/40）

III　下月隈宮ノ後遺跡甕棺墓出土の人骨

九州大学医学部解剖学教室　永井昌文

全般的に見て保存状態は不良で，辛うじて5体が得られている。以下，各人骨について主な所見を摘記する。

K－3号人骨：　男性，熟年

保存状態　上記5体のうちでは最も残りが良いが，それでも完全人骨量の⅓しかなく骨質も不良である。これらの骨片はすべて下甕内にずれ込んだ状態で見出されたが，もともとの埋葬姿勢は仰臥屈葬であったらしい。残存骨は右側上顔部ならびに底部を欠失した頭骨（下顎はある）と四肢の主要長骨および両側寛骨片などである。

推定性別　寛骨および頭骨の所見から男性であることはほぼ確実である。

推定年齢　歯牙の咬耗（M氏の2度ないし3度），冠状縫合の癒合度，および左側恥骨結合面の状態より40代の初めと推定した。

頭形　頭最大長180㎜，同最大幅144㎜で，示数80.0を示し，中頭型に近い短頭型である。顔高および眼窩高ともにやや高い。

四肢骨　大腿骨の柱状形成強く，脛骨はヒラメ筋線が発達し扁平であり，全身的に筋肉付着部の浮彫像は著明である。

推定身長　右脛骨最大長より推算した身長は163.0㎝となり，この地域の弥生人としては平均的な値をとる。

なお，抜歯風習の痕跡は認められない。

K－7号人骨：　男性，成人（成年か熟年か不明）

保存状態　下甕の底部に集塊をなして出土した。残存量は⅓，骨質は不良である。残存骨は，頭骨では冠の一部であり，四肢骨ではその多くが骨端部を欠く主要長骨である。

推定性別　幸い残っている右側の大座骨切痕の形状から男性とした。

推定年齢　確実な年齢推定の根拠に乏しいが，成人骨であることに間違いない。ただ，成年であるか熟年であるかは決め難い。

其の他　四肢骨はK－3号人骨ほどの頑強性はない。頭形，推定身長，抜歯風習の痕跡など一切不明である。

K－9号人骨：　幼年（4才くらい），性別不明

保存状態　頭蓋冠のみ下甕底に残存，他の骨は見当らず。

推定年齢　咬耗のある乳歯と未萌出の永久歯とが混在しており，後者の中切歯および第一大臼の歯冠の形成時相から4才程度と推定した。

推定性別　未成年骨であるため推定は困難である。

K－17号人骨：　女性（？），成年

保存状態　残存骨量は⅓，骨質不良。頭骨は右の側頭骨がやや良く残り，他部は細片に破砕している。四肢骨は骨体部のみの長骨が7本認められる。

推定性別　困難であるが，四肢骨がやや細く，辛うじて残った上顎大臼歯冠が小さく，側頭骨頬骨突起の基部上縁が明確に側頭線に移行していない，などからむしろ女性である可能性の方が高い。

推定年齢　これも明確ではないが，残存歯冠の咬耗からみると成年であろう。

其の他は一切不明である。

K－19号人骨：　男性，老年

保存状態　残存骨量は⅓，骨質不良。頭骨は左半が残っているが，顔面及び下顎は見当らない。四肢骨は骨端部のない長骨6本が残っているだけである。

推定性別　頭骨は骨壁厚く，著明な外後頭隆起を有し，左眼窩上縁も厚いことなどから男性と推定した。

推定年齢　ほとんどの縫合が癒合を終っているので老年とした。

其の他　四肢骨の性状は，むしろ年齢に起因すると思われる退縮的傾向を示している。

附記事項：

ここで人骨の保存度に関して南々東約1.3 kmの近さに位置する金隈遺跡と比較してみる。

「金隈」では甕棺142基中62基（43.7%）に人骨を検出しているが，ここ「宮ノ後」では21基中5基（23.8%）しか見出していない。人骨探索の努力如何にも関係するであろうが，大まかに見て「宮ノ後」のほうが保存に関してはやや不良であったとしてよいであろう。

ところで，埋葬人骨の保存には経過年代よりもむしろ埋葬土壌の水素イオン濃度（pH）や埋葬施設が大きく関係するらしいことを筆者は経験的に感じている。

この両遺跡は同じ月隈丘陵上に位置し，遺体は花崗岩のバイラン土壌中に，同様な葬法で，時代もあまり差のない時期に埋葬されている。当教室の中橋孝博助手の測定した未発表資料に

よれば，甕周辺の土壌の pH（H_2O）は「金隈」4.72，「宮ノ後」4.75でほとんど差はなく，共に酸性はかなり高い。これを裏書きして土坑中には人骨を検出し得なかった。人骨の保存に差を生じた原因として残るのは甕棺の密閉度（亀裂の多少，それに関係する甕の大小や胎土の良否）と埋葬地域の排水の問題であろう。排水には標高も関係すると思うが，「金隈」30m前後，「宮ノ後」23m前後と，やや前者に有利を感じる。

一方，人骨の側にも性別，年齢に応じて耐蝕性に差のある傾向は認められるので，諸種の観点から今後も注目して行きたい。

▲ 1　第3号甕棺墓人骨出土状況

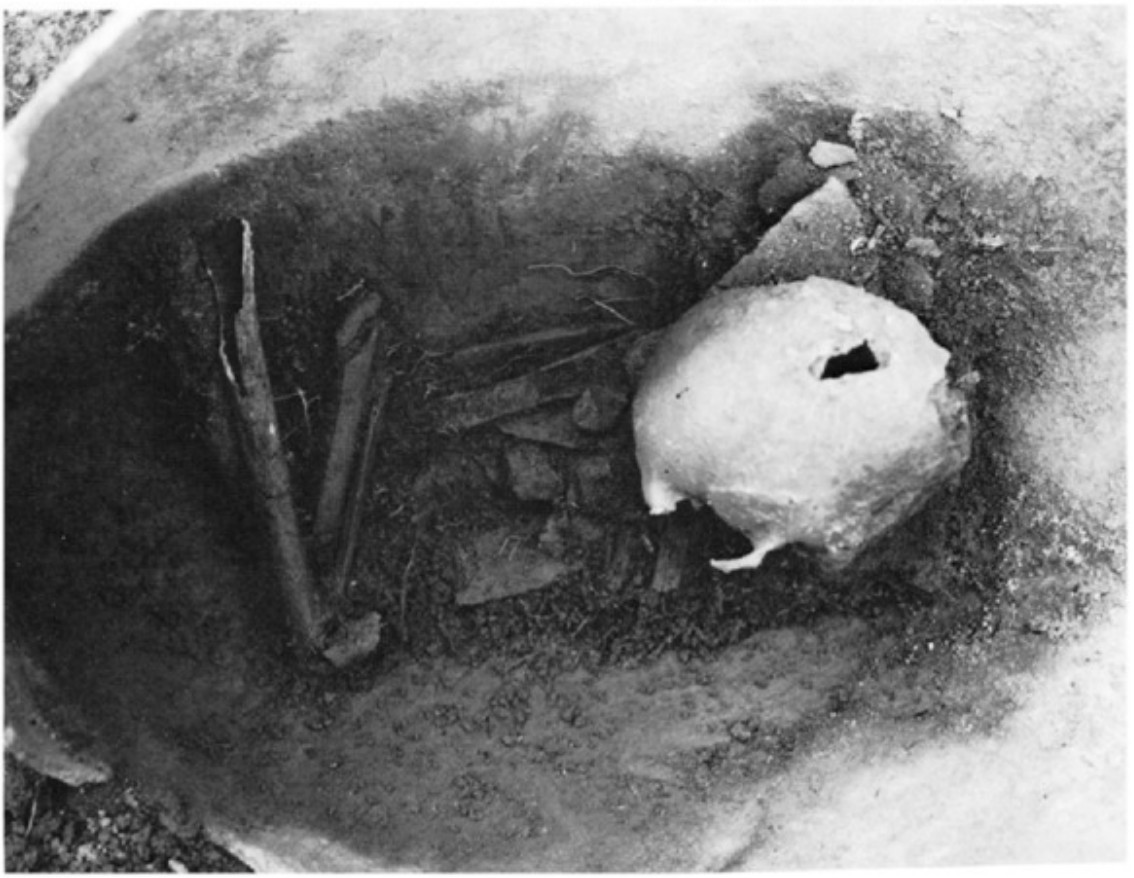
▼ 2　第7号甕棺墓人骨出土状況

▲ 3　第9号甕棺墓人骨出土状況

▼ 4　第17号甕棺墓人骨出土状況

▲ 5　第19号甕棺墓人骨出土状況

▼ 6　第19号甕棺墓人骨出土状況



Ⅳ　おわりに

下月隈宮ノ後遺跡は土取りで残された245㎡という狭く限定された面積の調査であったが，甕棺墓21基，土壙墓9基を検出し，弥生時代の共同墓地の一部であったことがわかった。甕棺墓，土壙墓の個々については前述したとおりであるが，ここでは宮ノ後遺跡の発掘調査で明らかになったこと，あるいは問題として残ったことなどをまとめてみたい。

宮ノ後遺跡は甕棺墓と土壙墓とによって構成される共同墓地であるが，両者の切り合いは3例で見られ，いずれも土壙墓が甕棺墓によって切られており，土壙墓が古いといえる。ただし，9基の土壙墓は1か所に集中せず，第7号土壙墓のようにやや離れたものもあり，すべての土壙墓が古いとは決めがたい。21基の甕棺墓のうち大型甕を用いているのは6基のみである。他は中型甕，小型甕，あるいは壺などによる甕棺墓である。これら15基の甕棺墓は明らかに小児用と思われるものがあるが第9，10号甕棺墓のように二つの棺の全長が80～105㎝と大きいものもある。しかし第9号甕棺墓より出土した人骨は4才ぐらいと推定されたことから大型甕6基以外はすべて小児用と考えていいだろう。小児用が圧倒的に多いが，土壙墓が甕棺墓より古い状況を示してはいるものの，あるいは土壙墓が甕棺墓で少なかった成人用として使われた可能性もあろう。小児用と判断した甕棺墓に丹塗りや甕形の特殊な土器が使用されているのも宮ノ後遺跡の特徴の一つである。特に甕形土器は，福岡市南部を中心に数か所の遺跡で出土例が知られているが，ほとんどは墓地から出土しており，祭祀と関連づけが行なわれている。宮ノ後遺跡では甕形土器は第1，2，16，18号甕棺墓の4基に見られるが，第1，2号甕棺墓は，口頸部を打欠き，上，下棺と合わせており，明らかに棺として用いられており，従来考えられてきたような特別な用いられ方はしていないようである。むしろ棺として用いたこと自身に意味があったとすべきである。この外に丹塗り土器は第10，20号甕棺墓にも見られるが祭祀として使用されたものではない。第10号甕棺墓は上棺が丹塗り土器で，下棺の中型甕胴部には煤が付着した日常容器との組みあわせである。第4号甕棺墓は甕棺墓と認定したが，あるいは祭祀遺構として考えるべきかもしれない。また第6号甕棺墓の墓壙上部より出土した土器片も祭祀行為の一つであろうか。つぎに土壙墓と甕棺墓の主軸方位であるが，土壙墓は東西と南北の二つに大きく別けることができる。甕棺墓は前述したように頭位に東，西，南東の三方向があり，同一方向のものは場所的にも集中しておりグループとして把握できそうである。第1のグループは第1，2，3，4，5号甕棺墓の5基，第2のグループは第6，7，8，9，10，19，20号甕棺墓の7基，第三のグループは第15，16，17号甕棺墓の3基であり，いずれのグループに

も1基以上の大型甕を用いた甕棺墓が入っている。さて宮ノ後遺跡の時期であるが，大型甕の口縁部はいわゆる「T」字形口縁の内側突出部が退化し，口縁部上面が内傾した逆「L」字口縁を持っており弥生時代中期後半という時期が考えられる。また内湾ぎみにのびた「く」字形口縁の中型甕は後期前半に比定されることから，甕棺墓の時期は弥生時代中期後半から後期初頭と考えられる。土壙墓は甕棺墓との切り合いから一時期古いようであるが上限は明らかにしえない。なお土取り残土中より採集した大型甕口縁部は6基の大型甕口縁部よりも，より「T」字形口縁の特徴を強く持っている。これらのことから宮ノ後遺跡は，本来は丘陵全体が墓域となっていたのであろう。今回の調査はその一部を発掘したにすぎない。ただ今回の発掘区でも西側や南東側では土壙墓，甕棺墓の分布がとぎれており，一つの丘陵がいくつかの共同体の墓地として利用され，その結果として一大共同墓地となった可能性が強い。

下月隈宮ノ後遺跡甕棺墓，土壙墓の切り合い

115　土取り残土採集の甕実測図（縮尺1/2）

下月隈宮ノ後遺跡甕棺墓一覧表

No.	主軸	傾斜	墓壙平面形	単・複	合口	上棺	下棺	備考	挿図
1	N−57°−E	31°	不整円形	複	打欠き覆口	甕	甕	甕形土器	8，9，10，11
2	N−95°−E	29°	楕円形	複	打欠き接口	壺	壺		12，13，14，15
3	N−92°−E	31°	隅丸長方形	複	挿入	甕	大甕	男性熟年(40才代)	16，17，18，19
4	N−96°−E		不整円形		不明	甕×3	甕	祭祀遺構か？	20，21，22，23
5	N−101°−E	36°	隅丸長方形	複	打欠き挿入		甕	D6を切る	24，25，26，27
6	N−99°−W	43°	長楕円形	単			甕	K7を切る 埋土に土器片	28，29，30，31
7	N−99°−W	41°	不整長楕円形	単			甕	男性成人	32，33，34，35
8	N−86°−W	42°	不整円形	複	覆口	鉢	壺	D9を切る	36，37，38，39
9	N−102°−W	36°	隅丸方形	複	接口挿入	甕	甕	D8を切る 幼児	40，41，42，43 44
10	N−89°−W	28°	隅丸長方形	複	挿入	壺	甕		45，46，47，48
11	S−35°−W	39°	楕円形	複	接口	甕	甕	K19を切る	49，50，51，52
12	N−39°−E	46°	楕円形	複	接口	甕	甕	K19を切る	53，54，55，56
13	N−101°−E	38°	円形	複	接口	甕	甕		57，58，59，60 61，62
14	S−2°−W	32°	円形	複	覆口		甕		63，64，65，66
15	N−142°−E	41°	楕円形	単			甕		67，68，69，70
16	N−129°−E	19°	楕円形	単			壺	甕形土器 K17を切る	71，72，73，74
17	N−136°−E	25°	隅丸長方形	単			甕	女性(？)成年	75，76，77，78 79
18	N−119°−E	49°	不整円形	単			甕	甕形土器	80，81，82，83
19	N−87°−W	33°	隅丸長方形	複	打欠き接口	鉢	甕	男性老年	84，85，86，87
20	N−68°−W	61°	楕円形	複	覆口	壺	壺	K19を切る	88，89，90，91
21	N−109°−E	32°	不整隅丸長方形	単			甕		92，93，94，95

（主軸は南北を基準に頭位方向を測定した。）

下月隈宮ノ後遺跡土壙墓一覧表

（単位　cm）

No.	方向	平面形	一段目　長さ×幅(図の右・中・左) 二段目　長さ×幅(図の右・中・左)	深さ 深さ	二段目レベル 壙底レベル	備考
1	N－106°－E	隅丸長方形	214×146・174・157	90	21.95m	頭位は東
			156×　66・　66・　56	65	21.30m	
2	N－100°－E	隅丸長方形	206×124・145・123	50	22.19m	頭位は東
			128×　56・　54・　42	56	21.63m	
3	N－9°－E	長　方　形	180×　93・105・103	42	22.29m	頭位は北？
			128×　43・　41・　34	50	21.79m	
4	S－19°－W	長　方　形	196×135・150・151	44	22.12m	頭位は南 二段目に粘土目貼り
			118×　64・　64・　69	58	21.54m	
5	N－17°－W	隅丸長方形	113×　80・　85・　66	76	21.61m	頭位は南
			92×　52・　57・　49	48	21.13m	
6	S－9°－E	隅丸長方形	210×　65・　78・　68	60	21.95m	K5によって切られる
			163×　54・　64・　57	48	21.47m	
7	N－3°－E	隅丸長方形		22	22.00m	頭位？
				52	21.48m	
8	S－32°－W	隅丸長方形	200×147・171・　？	90	21.15m	K9によって切られる 頭位南
			141×　40・　43・　43	52	20.63m	
9	N－76°－W	隅丸長方形	146×125・128・102	35	22.00m	K5，8によって切られる 頭位西
			108×　37・　47・　35	50	21.50m	

福岡市博多区

下月隈天神森遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第76集

©1981年３月31日発行

編集
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目７－23
電話　（福岡）　771－4667（文化課）

印刷　祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南四丁目15－17
電話　（福岡）　411－1611（代表）

福岡市博多区

下月隈天神森遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集

1981

福岡市教育委員会